

---

# 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

オンドゥル侍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

### 【Nコード】

N1608W

### 【作者名】

オンドウル侍

### 【あらすじ】

民間軍事会社リトルウィングに所属する青年「アレン・クラウド」はある日家の中で一つのカードデッキを拾う。そして彼は、鏡の向こうの世界「ベントラ」の事、そこを征服し次にグラールを狙う「ゼビアクス將軍」の事を知る。大切な人が繋ぎ、守ってきたグラールをゼビアクスの魔の手から守るため、アレンは「仮面ライダードラゴンナイト」となり、ベントラの戦士「レン」と共に戦う事を決意する。

原作のストーリー沿いに行きつつ、所々改変をくわえてお送りいた

します。

## 世界観説明

### グラール太陽系

母なる太陽と、3つの可住惑星からなる太陽系。太陽の名が『グラール』であると考えるのが自然だが、太陽系そのものをグラールと言う事が多い。SEED襲来のおとにイルミナスが本格的に活動し、その脅威がさつたと思えば旧文明人の罠によって危機に陥り、それを退けた直後にダークファルスが復活、さらにそれを凌いだと思えばゼイビアックスによる侵略など、とにかく事件に事欠かない。

### ベントラ

グラールと鏡映しになっているパラレルワールドで、レンの故郷。そのため同じDNAを持つ人間が、グラールとベントラに1人ずつ存在する。ゼイビアックスによって住人が拉致されたため、現在は無人。

### カーシュ

ユートが生まれ育った少数民族ではなく、ゼイビアックスの母星。北軍と南軍に分かれての長きにわたる戦争で荒廃し、その再建に使うための労働力としてさらわれたベントラの住人が使われている。

### リトルウイング

アレンが所属する民間軍事会社。規模は小さいが基本的にどんな仕事でも受けるのがウリ。亜空間事件を乗り切ってから顧客もかなり増えたらしい。頻発する行方不明事件の調査を進めるが、モン

スターとの関連にまでは気付いていない。

## ガーディアンズ

警察権を与えられた『民間警護会社』の中でも最大規模の組織。モンスターと行方不明事件の関連にいち早く気付いており、極秘調査を進めるための機関も設立されたといううわさもある。

## 仮面ライダー

アドベントマスターことユーブロンが、ベントラを守るためにカースの技術を用いて開発した特殊強化戦闘システムおよびその使用者。全部で12が存在し、それに加えてユーブロン自らが変身したプロトタイプライダーを加えた13人で戦ってきた。ドラゴンナイト、ウィングナイト、アドベントマスターを除いたすべてのデッキはゼビアクスの手に渡ったと考えられる。

## アドベントビースト

アドベントマスターが作り出したモンスターで、ライダーと契約をかわし力を与える存在。必ずそうしなければならない訳ではないが、倒したモンスターのエネルギーを与える事で強化することが可能。

## モンスター

ゼビアクスが作り出した戦闘用の人工生物で、人間を拉致して要塞まで運ぶのが主な役目。ライダーと契約を交わすことは不可能。アドベントマスターはこれをもとにアドベントビーストを作り出したものと考えられる。

## ベント

ライダーが敗北すると発動する機能。規定値を超えるダメージを受けると、そのライダーの意思を問わずに、二つの世界の狭間にある『アドベント空間』に強制転移する。アメリカでは放送コードが厳しく原作の様にライダーを死なせる事が出来ないため取り入れられた。

## アドベント空間

ベントされたライダーが転送される先で、アドベントマスターが作り出した。元々は傷付き倒れたライダーを隔離し、後で回収するシエルター的な場所だったが、唯一アドベント空間と現実世界を行き来できるアドベントマスターが行方不明になったため、牢獄同然の場所となってしまった。

## デイメンジョンホール

グラールとベントラを隔てるトンネルの様な物。アドベントサイクルはここに用意されている。

## プロローグ

夜の駐車場。その女性は少し急いでいた。自分の車に向けて足早に歩いて行く。そこには事務所にいる管理人と彼女以外誰もいない。……周りの光景を反射して映している黒い車体から、彼女を見つめる異質な視線を除けばだが。

「きゃあ！」

突如、その女性が現れた何者かに後ろから押さえられる。管理人はと言えば、よからぬことをされそうになっていると勘違いし、読んでいる雑誌越しに時々眼をやるだけ。

人の様に四肢が生えてはいるが、顔の無い赤い体。背中に背負った巨大手裏剣。首元のコード。どう見ても、人間ではない。それが鏡から現れて、彼女を引きずりこもうとする。

と、その時だった。突然飛び出した1台のバイクが女性をかわして赤い怪物だけをね飛ばし、少し走ってから急停車する。

黒い車体のバイクだ。従来のホイールバイクと少し違った変わったデザインだが、乗っている男に比べれば大したことは無い。

蝙蝠の様な鎧。腰に巻いた銀のベルトとそこから下がったレイピア。

さつき撥ね飛ばした怪物が起き上がり、鏡の中から増援も現れる。数的にざっと15くらいか。男はレイピアを抜き放ち、勇躍怪物に跳びかかった。

流れるような剣技は怪物に攻撃の隙を与えない。しかしこの数が相手では少し無理がある。男はレイピアを納めるとベルトのバックルに手を伸ばし、1枚のカードを引き抜いてレイピアに取り付けられた器具に挿入した。

『SWORD VENT』

突如飛来した蝙蝠から男の手に、黒い槍が飛び込む。その槍を振りかざし、男は再び怪物たちに向かっていった。

一撃の威力はさつきとはけた違いに重い。横に薙ぎ払った一撃に怪物のほとんどが斬り伏せられる。続けて1撃。2撃。その怪物は地面に倒れ伏すと、突然跡形もなく消え去った。

「…大丈夫か？」

「え、ええ…」

男は女性を助け起こし、バイクの辺りまで来るとそこで立ち止まった。管理人はと言えば、電話の受話器を握りしめている。

と、管理人は自分の目を疑った。男の体を囲うようにして一つのリングが浮かび、その姿が変わったのだ。サングラスを掛け、革のジャケットを着た男だ。見た目から、歳はざっと20代後半と言ったところか。その男はバイクに跨り、ヘルメットをかぶると夜の街に消えていった。

「……マジかよ。」

管理人はそう呟き、事務所に足を向けた。

バイクに乗って走る男の頭に、共鳴ともつかない音が響く。その男は前を見据え、言い放った。

「KAMEN RIDER！」



## プロローグ（後書き）

原作第1話の最初の方のシーンです。丸ッぽそのまんまですが第2話からはちゃんとオリジナルシーンとかも出てきます。

## 第一話 鏡の向こう／前編

「よっしゃあ！また勝った！」

「ああんもう！何で勝てないのよ！」

リゾート型コロニー、クラッド6。その居住区のある部屋でカードゲームに興じる二人組がいた。

アレン・クラウドとエミリア・パーシバルである。ただの仕事仲間：よりはお互いに親しいが、それでも恋人とかいう仲ではない。

「ま、天性の才能ってやつかな？」

次の瞬間、アレンの頭上には幾つか星が舞っていた。ちなみに目の前にはいらだたしげに拳を構えるエミリア。

「ちょ・う・し・に・の・る・な！」

「ずびばぜん。」

アレンが顔を押さえながら立ち上がる。

「……じゃ、あたしもう帰らせてもらっわ。」

「おう。じゃあな。」

と、エミリアが部屋を出たのを見届けた直後、ふとベッドのわきに目をやったアレンは、そこに見慣れないものが置いてあるのを見つけた。

「……カードデッキ？」

シンプルな黒く薄いケースに収められた数枚のカードだ。ためしに一枚ぬいてみた。『SELE』と書かれている。裏面を返して見ると、始めてみる名前があった。

「……アドベントカード？」

アレンはカードゲームに詳しくはなかったが、こんなカードは見たことが無い。買った覚えなどもちろん無かった。

何となくベランダに出て、カードデッキを人工太陽の光にかざしてみる。やはり、書いてある事は変わらない。と、ふと目の前を見たアレンは、そこに妙な物を見た。

彼の部屋はベランダ付きで、そこから繁華街が一望できるようになっていた。向かいには大きなオフィスビルがあり、窓は太陽を反射して巨大な鏡のようだった。その表面がさざ波だっている。

「？」

と、その波紋の中央から突然何か飛び出してきた。

赤いドラゴンだった。それが、咆哮を挙げてアレンの方に向かってきた。

「うわぁ！」

両手で顔を庇うと、持っていたカードデッキから光の壁の様なものが現れ、アレンを守ってくれた。弾かれたドラゴンはそのまま壁面に舞い戻り、その中へと消えた。

「……なんだ？」

アレンは街に出ていた。何故かそうしなければいけない気がした。

しばらくして、アレンは裏路地を歩くエミリアを見つけた。別に怪しくは思わなかった。その路地は彼女の行きつけの床屋への近道だった。最近髪が伸びたと言っていたから、切りに行くのだろう。

そう思ったその時だった。道のわきに捨て置かれた古いテレビの画面から、何かが這い出てきたのだ。赤い、人型の何かだ。それも2、3体はいる。

「お、オイ！」

エミリアがアレンの方向を振り返る。

「お、お前ら…その…あ、あっちへ行け！」

エミリアの視界には明らかにその怪物が入っていたが、気にも止めようとしない。それどころか、不思議そうな顔をしてアレンに声をかけた。

「あ、アレン。…ってか誰と話してるの？」

間違いない。エミリアにはこいつらが見えていない。

「え、お前、見えないのか…ってか逃げる！ここは危ない！」

「え？あ、う、うん…」

エミリアが、まるでわけがわからないと言った顔で路地の向こうに駆けて行った。それを見届けてから、アレンは怪物を見据えた。街中で武器を振り回す訳にはいかない。素手で戦うしかないだろう。

「さあ…きやがれ…」

「オ、オオオオオッ！」

怪物　正確にはレッドミニオンと言うが　はアレンに襲いかかった。叩き込まれた拳はかなりの威力だったが、アレンは慣れた動きでかわし、首筋に手刀を叩き込んだ。レッドミニオンはよろめきはしたが、それほど大きなダメージは受けていない。

「チイツ！」

反対側から飛びかかってきたレッドミニオンを組みふせ、近くの木箱目掛けて投げ飛ばす。そのレッドミニオンは壁に叩きつけられたが、やはり起き上がってきた。

と、アレンの後ろから、もう1体が迫ってきた。後ろからのサイドキックを受け、続けざまの重い拳がアレンの体をはね飛ばす。

「ぐああ！」

と、その時だった。

「きやああ！！！！」

エミリアが、いつの間にやら出てきたもう1体に抑え込まれ、近くにあった鏡の方に引きずられていった。抵抗はしているが、ほぼ無駄だった。

「エミリアアアア！！！」

アレンは叫んだが、どうにもならなかった。エミリアは鏡に引きずり込まれ怪物もろとも消えていった。

「エミリア…ウソだろ…」

次の瞬間、レッドミニオンが1体、鏡の中から叩きだされるよう

に出てきた。そしてその次に出てきたのは、エミリアを抱きかかえたサングラスの男だった。

男はエミリアを下ろすと、黙ってレッドミニオンを見据える。

「ア、アアアア！！」

レッドミニオンは襲いかかったが、明らかに男が優勢だった。続けざまに拳やキックを叩き込まれた1体が、靄の様に消滅する。続いてもう1体、もう1体。

最後のレッドミニオンを壁に蹴り飛ばして消滅させると、男はアレンに近付いてきた。

「スゲえじゃんあんた！なに？格闘家か何か？」

しかし、男はアレンの言葉など無視した。

「カードデッキをよこせ。」

「え？何のこと？」

「そのままの意味だ！俺に渡せ！」

アレンは男から走って逃げ去った。あんなのの相手をするのは御免だ。

それから少しして、アレンはとあるブティックの前に来ていた。ふとそのショーウィンドウを除くと、彼は思わず目をこすった。

ショーウィンドウの内側、いや、ショーウィンドウに使われている透明鋼の中に、何か這っている。  
トランスパリスチール

蜘蛛だ。でかい蜘蛛だ。

と、突然その蜘蛛の足が壁面から出てくる。

「うわあっ！」

驚いたアレンはそのまま背中を後ろの車にぶつけた。と、次の瞬間、彼の体は見えなくなっていた。

銀色のトンネルの様な空間。そこをアレンは飛んでいた。と、その体が光に包まれる。そのまま、アレンは飛んで行った。

サングラスの男は、アレンが消えたショーウィンドーまで来ていた。彼はすぐに事態を飲み込んだ。落ち着き払って懐から何かを取り出す。

カードデッキだった。蝙蝠のレリーフが刻まれた紺色のカードデッキ。それをショーウィンドウにかざす。と、カードデッキから青い電光が男の腰に伝わり、銀色のベルトの様なものを形成する。バツクル中央にはカードデッキと同じくらいの空間がある。

「KAMEN RIDER！」

男はそう言つて、バツクルにカードデッキをスライド挿入した。上下の固定器具の様なものが閉じ、カードデッキが縦に激しく回転する。

次の瞬間、男の体を囲うように青いリングが2本重なって出現した。それがそれぞれ反対の方向に回転してから消滅すると、男の姿は変わっていた。

鎧だ。蝙蝠の様な鎧を着、腰には蝙蝠をかたどったレイピアを下げている。そのレイピアを引き抜き、男は壁面に消えていった。

## 第一話 鏡の向こう／前編（後書き）

### 次回予告

わけもわからぬまま鏡の向こうに飛ばされたアレンは、そこで巨大モンスター「デイスパイダー」に遭遇。逃げるだけのアレンを助けたのは、蝙蝠の様な剣士だった。彼の正体とはいったい？そしてアレンを襲撃したドラゴンとは？

次回、仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『鏡の向こう／後編』

命をかけて、守りたいものがありますか？ 7

## 第2話 鏡の向こう／後編

誰もいない屋外の駐車場。そこに停まった1台の車の車体から、突然出てきた人間がいた。

アレンだった。

地面にぶつけた体を確かめようとして、アレンは自分が妙な格好をしていることに気付いた。

黒と灰色の鎧だ。左手には白い手甲の様なものが取り付けられ、頭もヘルメットの様な物で覆われている。

「え？何これ？」

と、目の前に気配を感じて顔を上げたアレンは、さっきの怪物が正面にいることに気付いた。

「わあっ！」

走って逃げようとしたが、バケモノ蜘蛛の方が早かった。横殴りの一撃を受け、アレンの体が横つとびに吹っ飛ぶ。

壁に叩きつけられたが、思ったより痛くなかった。この鎧のおかげだろうか。どっちにしろ、今は逃げる手段を見つけるのが先決だ。しかし、蜘蛛は思った以上に素早かった。もうアレンとの距離を詰め、じりじりと迫ってきている。

とその時だった。突然飛び出してきた何かが、蜘蛛をはね飛ばした。

それは、弾丸とVRシミュレーターのシートを足して2で割ったようなホイールバイクだった。そのキャノピーが開き、中からレイピアを下げた鎧の男が出てきた。

「あ、ありがと。助かったよ。」

だが。

「…俺にデツキを渡さないからだ。」

「あんたかよ…」

その声は、さっきのサングラスの男だった。男は腰のレイピア



ダークバイザーに手を伸ばすと蝙蝠の尾の様な部分を引っ張ったジャキツと音がして翼型のパーツが開き、中からちょうどカードが1枚入るくらいの空間が露わになる。続いて男はバックルのデッキからカードを1枚引き抜き、空間に差し込むとダークバイザーの翼を閉じた。

S  
W  
O  
R  
D  
  
V  
E  
N  
T

流暢な男の声とともに大きな蝙蝠が飛来し、男の手の中に大きな  
 槍、ウイングランサーが飛び込む。男はウイングランサーを構える  
 と、蜘蛛に飛びかかって行った。

蜘蛛がつきだす足を、男は見ほれるほどの巧みさで裁いていく。それを見ていたアレンは、自分の腰にもデッキ付きのベルトがあることに気付いた。

「ああやって使うのか。」

カードを1枚抜くと、手甲がジャキツと音を立てて開く。その中にカードを挿入すると、手甲が自動でとじた。

S  
W  
O  
R  
D  
  
V  
E  
N  
T

同じ声とともに空から剣が降ってきて、カスンと乾いた音とともに地面に刺さる。アレンは少し上空を見つめるとその剣を引き抜いた。細身の片手剣だった。

男がウイングランサーで蜘蛛の攻撃をさばいていると、突如後ろから気合が聞こえた。

[illegible]

アレンがさっきの剣　ライドソードを構え、蜘蛛に突進していった。

「おい、待て！」

男の制止など聞かず、アレンは蜘蛛に切りかかった。いつも仕事でやっているように剣を大上段に振りかざし、蜘蛛に切りつけ……

「お、折れたああ!？」

パキンと音がしたと思うと、刀身が無くなっていた。切りつけた

だけで折れるなど、耐久性が無いにもほどがある。すぐに返り討ちにあい、アレンの体が後ろに飛ぶ。

「うわぁっ！」

「邪魔をするな！」

男はウイングランサーで飛んでくるアレンを弾き飛ばすと、もう1枚カードを読み込んだ。

『ATTACK VENT』

と、さっきウイングランサーを呼び出したときに出てきた蝙蝠が飛来し、蜘蛛に体当たりを浴びせた。牽制くらいにしかなくていないが、それで十分だったらしい。男はその隙に3枚目を差し込む。

『FINAL VENT』

電子音声が鳴るが早い、男はウイングランサーを構えて助走をつける。その背中にさっきの蝙蝠　ダークウイングが合体し、その体が空に舞い上がったかと思うと、ウイングランサーを下に構えて蜘蛛に突っ込んでいった。ダークウイングがマントに変形して体に巻きつき、漆黒のドリルのような姿で蜘蛛に突撃した。次の瞬間、蜘蛛はバラバラに吹っ飛び、破片が四散する。

「ちよつとまで。アンタ誰だ？そこに…ここはどこだ？」

しかし男はアレンの問いには答えようとしなかった。

「すぐにここを出るぞ。」

「え？」

とその時だった。

「危ない！」

男がアレンを押しわけ、次の瞬間、さっきまでアレンと男が立っていたところ　やや男よりだったが　に炎がぶつかった。

さっきのドラゴンだ。炎を吐きながらこっちに突っ込んでくる。

「逃げる！」

男はそういいつつ、アレンと共に車の間を縫うように走って行った。ドラゴンが吐いた炎が、二人の周りを次々に爆破し、そして……

## 第2話 鏡の向こう／後編（後書き）

### 次回予告

男からこれ以上首を突っ込まないように忠告を受けるアレ。しかし、倒したはずの蜘蛛が復活を遂げ、男に危機が訪れる。そしてドラゴンと契約を交わした時、赤き戦士が鏡の世界に降り立つ…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『ドラゴンとの契約』

命をかけて、守りたいものがありますか？

### 第3話 ドラゴンとの契約

「何で俺が狙われてるんだ？」

ひとしきりドラゴンの炎をかわしてから、アレンがいらだたしげに質問した。

「説明は後だ！窓を通って帰るぞ！」

「窓？そこから帰れるのか？」

「モノが映る物なら何でも。」

男はそう言うのと近くの窓に近寄り、そこに歩いて行った。と、そこに吸い込まれるようにして、男はいなくなった。

「よ、よし、俺も……」

とその時だった。ドラゴンの炎がその窓を粉々に砕く。

「う、うわああ！」

アレンは叫びながら車の間を走って行った。

「ええと、窓……窓……でなければ、モノが映るもの……」

と、不意に近くの車の黒い車体が目に入った。周りの風景が映っている。

「ええい、どうにでもなれッ！」

アレンがそこに飛び込んだ直後、最大の炎がその駐車場の地面をえぐる。

アレンはどこかの駐車場の車の車体から出てきた。さっきのブティックからは離れている。

「……わざと逃げたって思われたかな……」

一方男は、ブティックのショーウィンドウから出てきた。周りを見渡してもアレンの姿は無い。

「アイツ、何処に行った？」

『アレン…ドラゴンを恐れるな…』

アレンは夢を見ていた。響いてくるのは、1年前から行方不明になっている父親の声だった。

『契約のカードだ…』

と、アレンは目を覚ました。まだ何か違和感が残っている。こういうときはバイクで走るに限る。

「つて、またあいつかよ！」

アレンの後ろから、さっきの男が黒いホイールバイクで追いかけてきた。すぐに裏路地にバイクを走らせる。しかし、男は執拗だった。と、表通りに出ようとしたところで、荷物を運んでいる人間が出てきた。慌ててブレーキを切ったおかげで衝突は免れたが。

「ご、ゴメン！」

「気をつける…」

突然男が横に並ぶと、アレンのバイクのキーを外して走り去っていった。

「あ、オイ何するんだ！」

「何の冗談だ？キーを返せ。」

アレンが押してきたバイクを止め、男に詰めよった。だが男は例によって答えない。



二人で男の体を抑え、思い切り後ろに引っ張る。糸を吐いてきた何かはかなりねばったが、引っ張る力に耐えきれなくなった糸が切れると、それきり出てくる事は無くなった。そしてアレンは、パネルの向こうに、一瞬だけ異形の姿を見つけた。

「その人を頼む。」

サングラスの男はそう言うのと、パネルの前に進み出て懐から取り出したカードデッキをかざした。青い電光がベルトを形成すると、すぐにデッキを差し込む。

「KAMEN RIDER！」

光が迸ってリングが回転し、男は蝙蝠の様な戦士 仮面ライダーウイングナイトへと変身する。すぐにウイングナイトはパネルの中に入って行った。助けられた方の男はうめくような声を出して絶する。

アレンはそれを見ると、自分のデッキをパネルにかざして叫んだ。

「KAMEN RIDER！」

が、反応がない。

「KAMEN RIDER！」

発音を替えて行ってみるが、やはり何も起こらない。

「仮面ライダー……」

やっぱり無反応だ。

と、突然アレンの脳裏に言葉がよみがえった。

ドラゴンを恐れるな。

契約のカードだ

「契約のカード……そうか！」

アレンはデッキから「CONTRACT」のカードを抜き、陽の

あたる位置に移動する。向かいのビルの壁面がさざ波だっている。

「……契約しよう。」

それに気付いたウイングナイトが叫んだ。

「よせえええええ！」

が、敵の一撃に弾かれ、後ろに吹っ飛ぶ。

突如、ビルからドラゴンが飛び出してきて、アレンの体へと突っ込んできた、アレンは腕を広げ、ドラゴンが自分の体へと入って行くのを受け入れる。

アレンは何かの空間に立っていた。その体が、あの黒と灰色の鎧の覆われる。

と、突然カードデッキの中央に龍の頭のような紋章が浮かび上がり、頭にも同じものが。腕の手甲ライドバイザーが、龍の頭のような装備 ドラグバイザーに代わる。

次の瞬間、鎧のカラーリングが灰色と黒から赤と黒に代わる。

ウイングナイトは苦戦していた。相手は倒したはずの蜘蛛だった。しかも、頭の上から人型の上半身が新しく生え、体自体も大きい。ミサイルの様に発射された針をウイングランサーでかわすが、横からいきなり叩きつけられた足に不覚を取られ、ビルの屋上から叩き落とされる。

「ぐあああああ！！！」

地面に叩きつけられ、ウイングナイトは這いつくばった。そこに蜘蛛が降り立つ。そして、止めとばかりに針を放った。

突然、飛び出してきた何者かが針をことごとく叩き落とす。



ウイングナイトはそれがアレンだとすぐさま気付いた。明らかに契約を交わした後だ。

「アドベントカードを使え！」

アレンはその言葉を聞くとドラグバイザーを開き、デツキから引き抜いた1枚のカードを挿入する。

S  
W  
O  
R  
D  
  
V  
E  
N  
T

アレンの手に、赤い柄の剣　ドラグソードが飛び込む。アレンはそれを振りかざして飛びあがると、蜘蛛の体に乗って人型の部分に切りつけた。今度は折れずに敵にダメージを叩き込んでいく。

ひとしきり切りつけた後、アレンはそこから飛び降り、デッキから新しいカードを抜いてドラグバイザーに挿入した。

# FINAL VENT

アレンの周りを、先ほどのドラゴン  
ドラグレッダーが舞う。

アレンは地面を蹴って飛び上がると錐揉み状に回転し、空中で飛び蹴りの姿勢を取った。直後、アレンの後ろからドラグレッダーが炎を吐き、その勢いでアレンの体は蜘蛛の方に突っ込んでいく。

「ハアアアアアアアアア！！！！！」

必殺の飛び蹴りが炸裂すると同時に、蜘蛛の体が粉々に砕け散る。

「ヤ、やった。」

そこに立つアレンの周りを、ドラグレッダーが舞った。

「他人の忠告を聞かない奴だな。」

「脅してゐるつもりか？」

⌈  
⋮  
⌋

「……あんなにか……怖くないぞ。」

と、ウイングナイトは踵を返して去っていった。

「これでお前は仮面ライダードラゴンナイトだ。満足か……」

### 第3話 ドラゴンとの契約（後書き）

#### 次回予告

ドラグレッダーと契約を交わし、仮面ライダーとなったアレン。新たなモンスターの出現を察知したアレンは、赤き戦士「ドラゴンナイト」へと変身して戦おうとするが、そこに、アレンを狙う新たなライダーが現れるのだった。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士「ドラゴンナイト」

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第4話 ドラゴンナイト（前書き）

ブレイドネタ入れました。何処でしょう？

## 第4話 ドラゴンナイト

アレンはすぐ近くの鏡の中から出てきた。さっきの戦いで思った以上に消耗していたようだ。

と、目の前を見ると、すぐ前にエミリアの顔があった。

「……どうおあああああああ！！！！！！！！」

「きやあああああああああ！！！！！！！！」

絶叫した拍子に、アレンの顔が後ろの鏡に突っ込んだ。

「待って！待って待って待って！まずは抜いて！その頭を鏡から抜きなさい！」

それから少しして、二人はリトルウイングの事務所にいた。

「…鏡の中に、もう一つの世界があったって事？」

「鏡って言うか、モノを映すものだ。そこに入ると、モノスゲえ早いジェット機に乗ったみたいになる。」

アレンが、鏡の向こうの世界について説明する。エミリアは実際に鏡に引きずり込まただけあって、手間はかからずあっさり信じてくれた。

「じゃあ、あのグラスンはしょっちゅう飛んでるって事？この搭乗券で？」

エミリアはそう言って、アレンのデッキをかざした。

「そうなるだろうな。」

「……ねえアレン。」

「何だ？」

唐突にエミリアが口を開いた。

「ひょっとしてだけど、その鏡のモンスターと、最近頻発してる失踪事件って何か関係があるんじゃないの？ほら例えば…去年からい

なくなってるあんたのお父さんとか…」

とその時。

「アレンの親父さんについては調べは付いている。」

振り返ると、シズルがいた。

「シズル！？いつの間にいたんだ！？」

「ずっといた。それよりほら。これを見る。」

シズルはそう言っ、持っていたラップトップ型のPCの画面をアレンとエミリアに見せた。

「これって？」

「なに、太陽系警察のサーバーに侵入しただけだ。」

確かに、シズルならそれくらい簡単にできるだろう。何せ、亜空間発生装置のパラメータ演算を一人で行ったのだから。

「見る、これって、アレンの親父さんじゃないのか？」

観ると、確かに画面には『フランク・クラウド』と父の名があつた。

「…『クラウド6在住だったが、1年前に失踪、現在でも行方は分からない。息子のアレンは民間軍事会社リトルウイングに勤務。』」

だつてさ。」

「確かにこれは父さんのだ。」

「…ねえ、ちよつとあたしの家に行かない？あたしのPCならスペックがかなり引き上げてあるからもつと深いところまで調べられるかも。」

「…なるほど、僕の出る幕はなしか。じゃ。」

「シズル？もう行くの？」

「久しぶりに君らの顔を見に來ただけだ。」

そう言っ、シズルは去つていった。

と、その時。

ヒュイイイイイイイン…フオオオオン…キイイイイイン…

アレンとエミリアの頭の中に、何かの音が響く。

「エミリア、聞こえたか？」

「うん、はつきり。何なの？」

「たぶん、招かれざる客だ。」

そう言うと、アレンは事務所を出て、すぐ近くの植物の陰にある窓の前まで来た。

「アレン、何するの？」

「ちよつと離れてろ。」

アレンはそう言うと、懷からカードデッキを取り出してそれを見にかざす。赤い電光がデッキから発せられ、腰に到達して変身ベルトを形成する。

「KAMEN RIDER！」

バックルに差し込むとデッキが激しく回転し、赤いリングがウィングナイトの時の様に体の周りを回転する。そのリングが消滅すると、アレンは仮面ライダードラゴンナイトへと変身していた。

「……じゃっ。」

それだけ言って、アレンは窓の中に入って行った。

「……か、仮面ライダー？」

鏡の向こう。レッドミニオンが2体、女性を引きずっていく。それを率いているのは蟹の様なモンスター、ボルキャンサー。

「彼女を離せ！」

アレンに気付いたか、ボルキャンサーが振り返る。ボルキャンサーが鋏を構えると同時に、アレンもカードをドラグバイザーに読み込ませる。

『SWORD VENT』

召喚されたドラグソードを振りかざし、アレンはボルキャンサーに斬りかかり、1撃、2撃と斬撃を叩き込む。が。

「なっ、堅え！」

びくともしていない。むしろアレンの腕にビリビリと衝撃が走る。

ボルキャンサーが突然反撃の鋏を振り上げ、アレンが近くの階段の下まで吹っ飛ばされる。

と、アレンの目の前に、例の弾丸バイク　アドベントサイクルがやってきた。

「来てくれたのか？」

が、降りてきたのはウイングナイトではなかった。蟹の様なライダーだ。左腕に着いた鋏はおそらくドラグバイザーの様な召喚機だろう。

「…え？誰なんだあんた一体？」

そのライダーは黙ったままだった。

「味方なんだろ？……俺と一緒に、戦ってくれるんだ…」

とその時、蟹ライダーが鋏のついた左腕を突き出した。

「グアア！」

鋏の一撃をもろに食らい、アレンが大きくよろめく。

「何するんだ！黙ってないで何とか言えよ！」

しかし、蟹ライダーは襲いかかってきた。

「うえああ！」

突き出された鋏をドラグソードで何とか受け止めるが、そのままの体勢で後ろに追い詰められる。

「俺はアレン・クラウド！お前は！？」

「…黙って戦え。」

「ハハッ、やっと喋ってくれた。よろしく。」

拘束から何とか抜けるが、後ろから突然切りつけられる。さっきのボルキャンサーだった。ボルキャンサーと蟹ライダー、3つの鋏がアレンに襲いかかり、ドラグソードを弾き飛ばす。しかし、アレンは落ち着いて体を縮めると、低弾道の回し蹴りでライダーの足をすくい、ボルキャンサーの背中を踏み台にして後ろに跳躍する。

「…ま、待て…」

着地したアレンのもとに、蟹ライダーがやってきた。後ろについできたボルキャンサーと、どこか似通った雰囲気漂わせている。

「…モンスターと仲間なのか？」

蟹ライダーは鋏を構え、アレンに向けて突進してきた。  
「ハアア！！」



## 第4話 ドラゴンナイト（後書き）

### 次回予告

突如襲ってきた蟹の仮面ライダー、インサイザー。何とか逃げのびたアレンは、既に狙われているのだった…

次回、仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「仮面ライダーインサイザー」

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第5話／仮面ライダーインサイザー

「ちょっと待てよ、味方じゃないのか？」

アレンの叫びも無視して、蟹男は襲いかかってきた。腕に装備されたシザースバイザーを振り回し、ボルキャンサーも再び加勢する。  
「ちいっ！」

振り下ろされた鋏をドラグソードで何とか受け止めて振り払い、くるりと一回転して蟹ライダーに刃を見舞う。続けて2撃、3撃と攻撃を加えたが、後ろからのボルキャンサーの攻撃で思い切り体勢を崩す。

アレンは剣技、特に片手剣の扱いは自信があった。相手も、クロ1系の武器を持っていると考えればどうという事はない。ただ、問題は2対1と言う事だ。ボルキャンサーは堅いし蟹ライダーの攻撃は無駄に重い。そして何より、相手がこちらと同じように武器を召喚できる可能性も高い。そうなれば、迂闊に突っ込みまくることもできない。

「待てよ、聞きたいことがあるだけなんだ！」

蟹ライダーの攻撃を必死にかわしながら聞いた。予想通り無視されたが。今まであったライダーはこんなのはわかりだ。

ボルキャンサーの鋏を受け止め、鏑迫り合いの様な状態が続く。と、蟹ライダーはシザースバイザーを開き、デッキから抜いたカードをセットして鋏を閉じた。

『STRIKE VENT』

と、蟹ライダーの腕にボルキャンサーの鋏とそっくりの武器が装備される。

「……！」

気付いた時には遅かった。アレンはその武器、シザースピンチの一撃を喰らい、盛大に吹っ飛ばされていた。蟹ライダーが挑発するように喋り、シザースピンチの鋏をガチャガチャと鳴らす。

「もう一発喰らつとくか？」

「またにするよ……」

アレンはちょうど後ろにあつた窓から脱出した。

アレンが窓から出てきてどこかへ去っていくと、物陰から男が姿を見せた。

ウイングナイトの男だった。どうやら一部始終を見ていたらしい。その男もバイクで走り去る。と、別の窓がまたもやさざなみ立ち、さっきの蟹ライダーが現れて変身を解いた。

現れたのは、どこかチャラ男的な雰囲気を漂わせる若い男だった。男は首を抑えて軽くひねり、ため息をついた。

「もつと楽に稼げる方法はないのかよ……」

その男はポケットから携帯ビジフォンを取り出し、登録してある番号の一つに掛けた。

「やありッチー、いい知らせでも持ってきたか？」

どこかのオフィスで、スーツを着た男がその電話に出た。リッチーと呼ばれたチャラ男が一気に不平をこぼす。

「それどころじゃないよ。腰は痛いし頭も割れそうだ。これじゃ身が持たないね。」

「ハア……いいかりッチー、金が欲しいんだろ、嫌なら働くか？バーガーショップで。」

「バーガーショップ？そんなのやってられるか！」  
考えただけでもおぞましいと行った様に、リッチーが軽く首を振る。

「だが、生きていくためには働かないとな。約束を忘れたか？」

そう言われ、リッチーの脳裏にはある記憶がよみがえっていた。

『あのプレイは最高だったよなあ？』

『全くだよ、その後もチャンスだったけど審判がファール取りやがったおかげでゲームが台無しだ。』

荷台にバイクを積んだ大きめのホイール車に乗り、数人の男が豪華な家に向かって走っていた。運転しているのはリッチーだ。

と、リッチーは門の前にスーツ姿の男が立っていることに気付いた。車の窓から身を乗り出し、男に声をかける。

『おいそこのおっさん、邪魔だからどうてくれる？』

『……リッチー・プレストン。顧問弁護士のウォルター・コナーズだ。車から降りろ。』

『……何で？』

リッチーが問いかける。コナーズと名乗った男の答えはヤケに冷めていた。

『もう君のじゃない。』

『ふざけるな。俺の車だ。』

リッチーが苦笑して答えるが、コナーズは表情を崩さなかった。

『家にも入れない。』

『何言ってるんだ。よく聞けよ、ここは俺の家だ！』

『正確には、君のお父さんの家だ。出て行ってほしいそくだ。君の事は聞いた。役立たずで、身の程知らずな、怠け者。』

『……当たってるじゃねえか！なあハッハッハ！』

『言えてる。』

すると、リッチーがびしやりと言い放った。

『降りろ。早く車から降りろ!』

彼の友人が全員降りると、コナーズが言葉を掛けた。

『ドライブしながら話そう。』

そう言われて、リッチーはコナーズの車に乗り込んだ。ストームシルバーのセ・ダン車だ。

『お父さんは君に自力でのし上がって欲しがってる。』

『つまり、援助は一切無しって事かよ。』

冗談じゃない。そんな声でリッチーが答えた。

『まずは、己を知ることだ。』

『なんだって?』

『辛い時こそ本性が見えてくる。とにかくお父さんは君を一人前にしたいとき。』

『いまさら冗談じゃないね。俺の欲しいものをすべて与えてきたのは親父だ。』

『確かに都合がよ過ぎるな。だが、お父さんの金だ。彼が渡したくないなら私にはどうしようもない。』

コナーズの言葉は正論だった。リッチーが少し、言葉に詰まった。  
『ン…アアッ! ついてねえなッ!』

車が止まり、二人はある駐車場に降りた。と、コナーズが近くを指さす。そこでは、『ハンバーガー 3個で300メセタ』と書かれた看板をした男が音楽に乗って、時折その看板を回しながら通行人に向けていた。

『アレがなんだっていうんだ?』

『明日は我が身かもな。』

コナーズはストレートに言うと、突然話題を変えてきた。

『武術の心得があるとか。』

『女の気を、引けるからな。』

コナーズは少し笑うと、リッチーに言葉を掛けた。

『元の生活にも戻れるかもな。1億メセタも夢じゃない。』

『戦えばもらえるのか?』

コナーズは懷から、何かを取り出した。蟹のエンブレムが刻まれたカードデッキだった。デッキが響くような音を立てて光る。

『スゲーな。これは？』

『君の仕事道具だ。これで取引しよう。』

コナーズは車の窓を向き、額の汚れを払った。映し出された姿は人間のものではない。

そしてこれこそが、彼が『仮面ライダーインサイザー』として戦う事になったきっかけだった。

「分かってるよ。ちょっと、愚痴を言いたかっただけさ。」

そう言つて電話を切ると、リッチーはシャツのポケットからサングラスを取り出し、掛けた。

「金は必ず手に入れる。」

どこかのビルの屋上。ウイングナイトの男はそこに立っていた。

男はそこで一人、特訓を開始した。空に向かって拳を振るい、ジャンプして足を払い、長い棒を取り出すと、それで大気突き、叩く。ひとしきりその動きが終ると、ウイングナイトの男はデッキを取り出し、構えた。

「KAMEN RIDER!」

エミリアは自室でパソコンに向かっていた。先ほど、彼女が出したモンスターに関する質問の回答を確かめるためだ。ちなみにそこにはシズルもいた。

「エミリア、いい加減にしろ！ランチの時間はあと30分しかないんだぞ！」

「ちよつと待つて……あ、回答が来てる。差出人は……ウソお！？クライスじゃん！」

「クライスって……あのクライスか？」

クライスと言うのは、伝説的ハッカーで、ブロガーでもある人間だ。

「『僕も似たような生き物を見たことがある。』……クライスのサイトのアドレスとパスワードよ！」

エミリアが慣れた手付きでキーを叩く。映し出された画面には何か映っていた。

「凄い！モニスターの写真じゃん！」

「……僕にはばやけた親指にしか見えないんだが……」

と、ノックの音がし、アレンが入ってきた。

「……僕は邪魔ものみたいだな。じゃあ一人でランチを取らせてもらうよ。」

シズルはつまらなそうに部屋を出て行った。

「たった今失踪事件の情報が入ったの。お父さんの手がかりになるかも。クライスの事は知ってる？」

「ああ、オーディオメーカーの名前だろ？」

エミリアは少し苦笑し、説明した。

「クライスってのは、伝説的なハッカーでブロガーよ。未確認生物に関する研究でネット上の有名人なの。」

「へえ。」

「モニスターに関する情報をネットで募ってみたら、クライスがこのサイトを教えてくれたの。」

「おい、ちょっと待て。父さんはモンスターにさらわれたってことか？」

「そうだと思う。モンスターの目撃情報とほぼ同じタイミングで行方不明者が出てるでしょ。」

と、エミリアはアレンが深刻な表情をしていることに気付いた。

「俺はただ…父さんは家出しただけで…時期に戻ってくる…」

エミリアは口を開いた。今は一人にしておいた方がいいらしい。

「じゃあ、また明日にでも続きを調べるってのは…」

「ああ…そうだな。そうしよう。じゃ。」

アレンはメインストリートを歩いていた。それを見ている、不審な人影にも気付かず。

「……今度こそ1億メセタだ。」

リッチーはズボンの尻ポケットからデッキを取り出し、歩き出した。

アレンの頭に例の音が響く。近くの窓を見ると、インサイザーがこちらに手を伸ばし、手招きしている。

「……ふざけやがって……」

アレンはデッキを窓にかざし、ベルトを出してデッキを挿し込んだ。

「KAMEN RIDER!」

体に瞬時にアーマーが形成され、アレンの姿をドラゴンナイトへと変える。



どこかの廃工場、インサイザーの姿で、リッチーは待ち構えていた。あの特徴のある音が響き、アレンが姿を現す。

「戦う前に教えてくれ。何で俺を狙う？」

「俺が欲しい物を持つてるからさ。」

「それは何だ？」

アレンの問いに、リッチーは嘲るように答えた。

「1億メセタだ……！」

「何だって……？」

もうリッチーは答えなかった。デッキからカードを抜き、シザースバイザーに差し込む。

『STRIKE VENT』

飛びかかったリッチーがシザースピンチで切りつける。まともに食らってよろめいたアレンに、追撃の鉄が振りかざされた。

その一撃を何とかかわして、アレンはカードを抜いた。そして身をひるがえすと、一瞬前までアレンがいた所にあつた木箱がバラバラになった。リッチーの胴体に蹴りを入れると、アレンは素早く立ちあがってカードを挿入した。

「そっちがその気なら……！」

『GUARD VENT』

「ハアッ……！」

リッチーのシザースピンチを、アレンの腕に出現した盾、ドラグシールドが防いだ。

「1億だつて？俺がそんな金持ちに見えるか？」

「確かに、せいぜいバーガーショップの店員だな。」

「……傭兵だつつの。」

「一人につき1億メセタ。お前らクズどもを倒せば報酬がもらえるのさ……！」

そう言つてリッチーが再び襲いかかる。次々と打ちこまれる重い攻撃はやがてドラグシールドを弾き飛ばし、アレンの体も捉えた。

「グアアッ……！」

アレンがつきだされた鉄に吹き飛ばされ、後ろの木箱に激突して粉々に砕く。

「…ハッハッハ。」

「クッ！」

アレンは素早く後ろに飛びのいて距離を取り、新しいカードを挿入した。

『STRIKE VENT』

ドラグレッダーが飛来し、アレンの腕にその頭を模した手甲の様な武器が装着される。危機感を感じたリッチーは、シザースピンチを外してもう1枚カードを読み込ませる。

『GUARD VENT』

シザースバイザーに中型の盾、シエルディフェンスが召喚される。アレンは思い切り気合いをためると、リッチー目掛けて腕を突き出した。すると、飛来したドラグレッダーがその方向に向けて炎を吐きだした。リッチーはシエルディフェンスで何とか防いだが、思い切り後ろに弾き飛ばされる。

「おわあっ！」

「この辺でやめてくれねえ？お前に聞きたいことがある！」

だが、リッチーはアレンを無視して襲ってきた。と、いきなり飛び込んできたウイングナイトが、両足でリッチーを蹴り飛ばした。

「どわっ！な、何？」

「来てくれたのか…」

ウイングナイトがリッチーに襲いかかる。今度はリッチーが圧倒される番だった。

「よし！」

アレンはそれだけ言うと、ウイングナイトに加勢した。ひとしきり攻撃を打ち込んだところで、リッチーが両手を突き出した。

「ちよつと待て！2対1なんてフェアじゃねえ！不公平だ！」

それだけ吐いて、リッチーは近くの鏡から出て行った。

「……これから、どうするんだ？」

アレンがウイングナイトに問いかける。

「お前を巻き込みたく無かったが、仕方がない。まず仮面ライダーとしての戦い方を覚えろ。」

ウイングナイトはアレンの方を振り返ると、短く言った。

「…来るか？」

「いきなり来てなんだよ……」

## 第5話／仮面ライダーインサイザー（後書き）

### 次回予告

ウイングナイトの訓練を受けることになったアレン、だが手も足も出ず、ひとまず訓練は終わる。そして、彼は鏡の向こうの世界「ベントラ」についての話を聞くことになるのだった。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「ベントラ」

命をかけて、守りたいものがありますか？

## キャラ紹介（ネタバレ注意）（前書き）

メインキャラの紹介をします。ネタバレあります。嫌いな方はスルーして下さい。

原作キャラはオリジナル設定が含まれている奴がほとんどです。ポジションはあえて書きません。

## キャラ紹介（ネタバレ注意）

アレン・クラウド（仮面ライダードラゴンナイト 龍騎）

民間軍事会社「リトルウイング」に所属する青年。本作の主人公。出来る事と出来ない事がかなりはつきりしている方。武器の扱いでも、苦手な武器、特にウィップとアックスはまともに使えたためしがない。カードゲームマニアという一面も。

自宅でカードデッキを見つけた事をきっかけとして鏡の向こうの世界ベントラやゼビアクス將軍の事を知り、大切な人が住むグラールを守るために仮面ライダードラゴンナイトとして戦う事を決意。

見た目はPSP02iのヒュマ男のデフォルトと同じ。

レン（仮面ライダーウイングナイト ナイト）

ベントラからやってきた戦士。仮面ライダーウイングナイトに変身。無口でクールだが、本当は心優しい性格。

ベントラ侵略の数少ない生き残りであり、次に狙われているのがグラールである事を突きとめて、ゼビアクスを追ってグラールへとやってきた。

幼いころに仮面ライダーに選ばれ、それ以来仮面ライダー一筋でやっていた。

エミリア・パーシバル

アレンのパートナー。天真爛漫な性格で、喜怒哀楽ははつきり顔に出る方。今でこそ人並みに仕事はするが昔は超S級のニートだった。亜空間研究の中枢を担う天才科学者と言う意外な一面もある。料理の腕は壊滅的。

仮面ライダーやベンタラの事を知り、アレンを出来る限りサポートするために情報を集める。

シズル・シユウ

総合科学企業「インヘルト社」の社長御曹子。エミリア同様天才的な頭脳を持つが得意な分野は少し異なるらしい。一見クールに見えるが、おちよくられると受け流す事が出来ず大きく出てしまう。またムツツリでカナヅチ。

特技はハッキングで、子供の頃いじめっ子の家のパソコンに侵入して内側からを破壊した事があるといううわさもあるが真偽のほどは定かでない。

エミリアやアレンからベンタラの話を聞いているが、全く信じようとしていない。

ユート・ユン・ユンカース（仮面ライダーストライク 王蛇）

モトウブの少数民族「カーシユ族」の出身の少年。純粹で真つづぐな性格で、そのため暴走することしばしば。少しばかり人の話を聞けない。好物はプリンで、よくエミリアにおごってもらっている。種族はニューマンだがビーストの血も入っているため体は丈夫。フォトンへの感受性の高さが起因して常人より鋭敏な感覚を持つ。

仮面ライダーストライクのカードデッキを持ってアレン達の前に現れ、協力を申し出る。

ナギサ・アーデルハイト（仮面ライダーステイング ライア）

デューマンの少女。アーデルハイトはミドルネームで、名字の予想も大体はつくが違っている場合を考えここでは表記しない。一見しっかり者の印象を与えるが根本的に一般常識が足りず、時折とん

でもない事をやらかす。欠片騒動（仮）において仲間にも救われたこともあり、彼らへの思い入れは人一倍強い。

ゼイビアックスにだまされ、他のライダーを倒す事が大切な友達を守ることにとなると信じ、仮面ライダーステイキングに変身する。

ユーブロン（変身後の名前は無し　オルタナティブ）

別名アドベントマスター。もとはゼイビアックスの部下だったが、ベントラ侵略作戦に反対して袂を分かち。ベントラを守るためにカードデッキやアドベントビーストを開発。必要と判断すれば自らカードデッキを使って変身して戦う。ベントラのライダーを鍛え上げた人物である。現在行方不明で、死んだとも言われている。

ゼイビアックス

グラール外にある惑星「カーシュ」北軍の將軍。戦争で荒廃した母星を再建するためにベントラの人々を拉致、次なる標的としてグラールを狙う。人間の姿と鎧の様な姿を取るがどちらも仮の姿であり、本当の姿はグレイの様なエイリアン。

クライス

伝説的なハッカーでプログラマー。未確認生物に関する研究でネット上の有名人。何故か仮面ライダーに詳しく、ユートと接触した事があるらしい。

ルミア・ウェーバー

ガーディアンズ総合調査部所属の少女。英雄の妹という肩書の重さに困りながらも、兄を超えようと努力を重ねる。勝手知った者の前では本来の明るさを出す。



アレンやエミリアに接近し仮面ライダーについて調べようとする  
が目的は不明。

## 第6話 ベンタラ

鏡の向こうの広場、そこに立つ二人の鎧男。お互いに向き合っている。

「戦士となった以上、戦う術を身につける。」

「そんなことより質問に答えてくれ。」

と、突然ウイングナイトがダークバイザーを抜き、居合の要領で切りかかった。

「何するんだよ！」

「訓練は必要ないか？」

「マジで戦う気かよ!？」

「敵だと思え！」

ウイングナイトがダークバイザーを振りかざし、再び襲いかかる。その腕を抑え、何とか突き出された刃をかわす。しかし、ウイングナイトは膝を突き出し、アレンの鳩尾をきれいにとらえた。

「どうした？ガードしろ！」

「又グウツ！」

アレンはすぐに起き上がり、カードを引き抜いてセットする。

「ちよつと待つてくれよ！」

『SWORD VENT』

召喚されたドラグソードはアレンの手の中に飛び込み、それを振りかざしてアレンはウイングナイトに斬りかかる。

が、ウイングナイトは落ち着き払ってカードを抜き、ダークバイザーに挿入する。  
ベントイン

『TRICK VENT』

とたん、ウイングナイトが二人に分身する。

「え？双子!？」

繰り出されたパンチを腕でそらしたが、次に振り向いたとき、ウイングナイトは三人に増えていた。

「何だ！？三つ子かよ！？」

続けざまに斬撃が叩き込まれる。ドラグソードで何とかそらすと、ウイングナイトがさらに増えていた。4人から5人。6人7人8人…  
「何だよ！？」

ウイングナイトがアレンを包囲し、一斉に襲いかかる。流石に8対1では無理があつた。次々に剣が閃き、アレンを捉える。

「こんなの汚ねえぞ！」

訓練だからと言って、ウイングナイトは一切手は抜いていなかった。

「ぼやぼやするな！」

「ここだ！」

「こつちだ！」

「何をしている！」

二人が一斉に剣を突き出し、アレンがよろめく。

と、後ろからもう一人が飛びかかってきた。何とか剣で受け止めても、後ろに弾き飛ばされて思い切り体勢を崩す。

「敵が一人とは限らない。」

「んなモン分かってるつつうの！」

『SWORD VENT』

ウイングナイトの手にウイングランサーが飛び込み、それを振りかざして切りかかってきた。

一撃一撃が重過ぎる。例えるなら、アックスの一撃をダガーで受け止めるようなものだ。こんなものよく振りまわせる。

「クツ…今度はこつちの番だ！」

それだけ言つて、アレンはウイングナイトの懷に飛び込んで後ろに押し込んだ。すぐに受け流されるが予想済みだった。ドラグソードを一閃し、ウイングナイトに斬撃を加える。最初の一撃は何とかかすったが、それからは全てが受け止められる。と、突然ウイングランサーが閃き、ドラグソードが上空に吹っ飛ばされる。それに一瞬気を取られた隙は見逃されなかった。重い一撃が叩き込まれ、アレ

ンは後ろに思い切り吹っ飛んだ。そこに、ウイングランサーを握ったウイングナイトが歩み寄って来る。地面に膝を突くアレンを見下ろし、ただ一言、言葉をかける。

「今日はこの位にしておこう。」

どこかの窓。突然表面がさざなみ立ち、二人の人間が出てきた。アレンとウイングナイトの男だ。

「今のがトレーニング?...本物の戦いが思いやられる。」

アレンだって素人ではない。それなりに場数は踏んでいるし腕にも自信はある。しかし、普通の戦いとライダーの戦いは勝手が違う。武器召喚、分身、何でもありだ。何より、男の戦いはあまりにも完璧だった。

「訓練すりゃあいい。」

「訓練って...でもいつたいなんのために?そろそろ質問に答えてくれ!」

と、男はアレンの方に向き直り、一歩近づいた。

「こんなはずじゃなかったが、お前は仮面ライダーになった。」

「仮面ライダー...?」

聞きなれない単語に、アレンが顔をしかめる。

「仮面ライダーはベンタラの騎士だ。」

「ベンタラ?」

「鏡の向こうの世界だ。ベンタラのライダーからカードデッキが盗まれ、地上のお前や、さっきのインサイザーの手に渡った。」

「盗まれた...じゃあ返さなきゃね。」

アレンが少し冗談交じりの様に言ったが、ウイングナイトは真剣だった。

「手放すな。他のライダーから身を守るために。」

「他のライダーって…何人いるんだ？」

「お前と俺を入れて…12人だ。」

12人？と言う事は、単純に考えると敵は10人と言う事か？

「12人！？でも何で俺を狙うんだ！？」

「俺の仲間だと思われてるからさ。」

と、アレんがいらだたしげに口を開いた。

「そうかい。あんたのせいで俺が悪者扱いか。最高だね。」

突然、頭の中に音が響く。忘れようとしても忘れられないあの音だ。

「トレーニングの成果をためそう。」

「ハア、練習試合ってどこか。」

鏡の中から、2台のアドベントサイクルが飛び出す。そこから降りたアレんとウイングナイトは、すぐ近くのビルの非常階段にモンスターが1体いるのに気づいた。あの蜘蛛とは違い、人型だ。二人に気付いたか、モンスターは屋上に向かって逃げて行った。

「あそこだ！」

アレんは叫ぶと地面をけた。信じられない跳躍力で、すぐに屋上にたどりつく。が、そこにモンスターの姿は無い。

「かくれんぼか？」

と、いきなり何者かに押さえつけられ、アレんは近くの鉄格子に叩きつけられた。さっきのモンスター、テラバイターだ。後ろからウイングナイトが斬りかかるが、テラバイターは手に持ったブーメランでかわしていく。

「本気で行くぞ。」

『SWORD VENT』

後ろからの斬撃でテラバイターを捉え、正面に回り込んでもう一撃。すぐにウイングナイトも加わり、テラバイターに斬撃を加えるが、持っていたブーメランが閃いて二人を捉え、後ろによるめかせる。

突然、テラバイターがブーメランを投げつけた。かがみこんで何とかかわした二人を、後ろから帰ってきたブーメランが襲った。

「うわぁ！」

「ぐっ……」

すぐにテラバイターの拳が叩き込まれ、ウイングナイトはよろめいて近くの鉄格子に寄りかかる。

「耳を塞げ！」

ウイングナイトはデッキから新しいカードを抜き、<sup>ベントイン</sup>ダークバイザーに挿入した。

『NASTY VENT』

飛来したダークウイングが、何やら音波を発している。と、突然アレンを猛烈な不快感が襲った。

「うっ、うああぁ！」

だが、それはテラバイターも同じだった。それどころかアレンより効いている。アレンはその隙にドラグバイザーをオープンし、ドラグレッダーのイラストが描かれたカードを<sup>ベントイン</sup>挿入する。

『ATTACK VENT』

はじめて聞く電子音声と共にドラグレッダーが飛来し、テラバイターに炎で一撃叩き込んだ。

テラバイターが吹っ飛ばされた隙を狙い、アレンとウイングナイトはそれぞれの紋章の描かれたカードを抜いて召喚機に<sup>ベントイン</sup>挿入した。

『FINAL VENT』

ダークウイングはウイングナイトに合体し、ドラグレッダーは飛びあがったアレンの周りを舞う。そして、アレンの必殺技『ドラゴンライダーキック』とウイングナイトの『飛翔斬』が炸裂し、テラバイターはバラバラに吹っ飛んで消滅した。

「ハア：ハア：いいチームワークだったな。」

「仮面ライダーは、あれよりはるかに手強いぞ。」

ドラグレッダーが、空に浮かんでいるテラバイターのエネルギーに向かつて飛び、それを食らった。

「カードについて学べ。覚える事はまだまだある。」

リトルウイング事務所。突然、少女の雄叫びが轟いた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

と、エミリアが備え付けてあるビジフォンの陰から申し訳なさそうに姿を見せた。

「あ、皆ゴメン：どうぞお気になさらず……」

「オフィスで雄叫びか。あまり行儀は良くないな。」

「でもシズル、見てよこのメール。おっさんからよ。『お前が言っていたモンスターの話については目撃情報もそれなりにあるから、まあ信じない事もない。そこで、ガーディアンズの奴と共同調査することになった』。つまり、ルミアとよ。」

とたん、シズルが飲んでいた缶コーヒーを噴き出した。

「ブフッ!？」

エミリアは一度、この手の仕事でルミアと一緒にあった事があった。もう最悪だった。何故か街中での調査の類になると彼女は少しばかり上から目線になる傾向にあった。

「ホント最悪だわ：なんでこうついてないの？」

## 第6話 ベンタラ（後書き）

### 次回予告

アレンに「レン」と言う名前を明らかにした男は、インサイザーを発見。レンとリッチーの一騎打ちを見守るアレンの目に、予想もしなかった光景が映る…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「敗者の宿命」

命をかけて、守りたいものがありますか？



## 第7話 敗者の宿命（前書き）

今回はちょっと長めになりました。これも僕がまとめるのが下手だからです。

## 第7話 敗者の宿命

「エミリア、遅いわよ。」

ホルテスシティの広場で、ルミアはいらだたしげに言った。エミリアの手に握られているのはコーヒーの入ったカミ・カップ。

「ゴメン列が長くて……ってかあたしに何やらす!？」  
が。

「……お砂糖入ってない。」

ルミアはそれだけ言々と歩み去っていった。

「ああ……んもう!」

エミリアはいらいらして近くの壁を殴りつけた。深刻なダメージを受けたのは拳だったが。

「いったい!」

どこかの暗い部屋。鎧の様な姿をした一人の男が、カプセルの様なものから出てくる。正面にあるリングの様なものをくぐると、その姿はコナーズに変わった。

コナーズはネクタイを直し、着信音が鳴ったビジフォンのスピーカーを入れる。

「ヤァリッチー。」

「上手くいくとは思えないよコナーズ。」

『そうか?ビルの掃除の仕事なら幹旋してやるぞ。』

「ああ、止めるとは言っていない。ただ、二人の仮面ライダーが相手だなんて知らなかったんだ。」

リッチーが慌ててさっきの言葉に付け加える。

『賢くやれ、二人を仲違いさせりゃいい。』

と、急にリッチーの顔色が変わった。

「マズイ、後でけなおす！」

目の前では、彼のホイールバイクがレッカー輸送されようとしていた。

「オイオイオイオイオイオイ待ってくれ！持ってくなよ。」

しかし、運転手と思しき男は苦笑いしただけで華麗にスルーした。

「頼むよ！俺にはこれしかないんだ！」

「駐車料金を払わないからだ。」

「ちゃんと払ったさ！どうやって帰りゃいい！」

だが、レッカー車は発車した。何とかヘルメットは回収したが、と、彼の視界にはバス停の標識が入った。

「……バスかよ。」

クラッド6の居住区。そのとある部屋。

「……ソードベント、ストライクベント、ガードベントアタックベントファイナルベント。ハア……いまさら宿題なんて……」

と、例の気配がした。

バスを待つリッチーの頭にも音が響いた。

「……今度こそ一億メセタだ。」

ウイングナイトの男は、一足先に現場についていた。バイクを降り、ヘルメットを脱ぎ、窓の前に歩み寄る。

そこからそう遠くないところ、と言うよりすぐ近くで、エミリアとルミアが太り気味の男と話していた。締められたベルトにスパナやドライバーが刺さっているところを見ると、おそらくエンジンアが何かだろう。

「自分でもとても信じられないよ。」

「何を見たか説明してくださいませんか？」

ルミアは男と話し、エミリアは素早くメモを取っている。

「ああ……俺はビルの屋上で空調機を修理してたんだ。その機械は光沢があつて鏡みたいな金属パネルで囲われてるんだが、そこから……糸が出てきたんだ。」

「とすると、板から蜘蛛の糸が出てきたという事ですか。」

と、エミリアの頭に例の音が響く。そして、近くの窓にウイングナイトの男が歩み寄り、カードデッキをかざして変身した。

「……したらその糸が俺の体に巻きついて、グイッと引つ張ったんだ。パネルの方に。」

「ちよつと待つてください。板から出てきた糸に体をひっぱられたと……」

「そうだ。」

「待つてください。ちよつと聞ってるのエミリア？」

エミリアは、男が鏡に飛び込むところをじっと見ていたが、ルミアに呼ばれて思わず我に返った。

「え……？あ、うん。鏡が引つ張ったんだよね？」

ルミアは一瞬エミリアの方を見ると、男に向き直った。

「続けて。」

「そしたら、二人組の男がやってきて俺を助けてくれて、それからその内かたつぽが変わったんだ。」

「変わった？」

「変身したんだ。鎧みたいな姿にね。」

「どんな外見だったんですか？」

「蝙蝠みたいだった。」

「蝙蝠みたいな恰好だった。」

エミリアは少し口をはさんだ。

「えっと、つまりコスプレって事？」

「蝙蝠の鎧だ。黒ずくめの。」

「なるほど……」

ウイングナイトが、蜘蛛の足の様な物にはじき出されたが、ダイクバイザーを構えてもう一度窓に入って行った。

「……あなたいったい何を見てるの！？ぼーっと向こうを見て、メモも取らずに。それでもプロ!?」

「あ…ゴメン。」

ルミアがそつちを見たときは、ウイングナイトはすでにいなかった。

「失礼しました。以前から注意散漫で。えっと、確認させて下さる？えっと…まずスパイダーマンが糸を出して、バットマンとロビンが助けてくれた、と。」

「え、いやそれはちよつと違う……」

男は訂正しようとしたが、確かにルミアの様に解釈するのが普通だろう。

「あ、そうだあなた、今度のコミック大会に出てみたらどうです？ルミアが失礼極まりない発言をする。」

「コミック大会!？」

「いえほんの冗談です。お時間取らせました。エミリア行くわよ。」

「ちよつとルミア、今のは失礼すぎるでしょうが!」

「私くらいキャリア積んでれば、偽物はすぐ見分けられるのよ。あの男だつてそう。周りから注目されたいだけよ。」

「なるほど……」

とは言ったものの、口調は明らかに言葉と正反対だ。

「あの、あたし、もうちょっと残って調査していい？」

「…調査担当者は私よ。あなたは書記兼コーヒー係。次はお砂糖入れなさいよ。それじゃ。」

これだから、ルミアとこの手の仕事をするのは嫌なのだ。

「……んあああ！」

ルミアが去っていくと、エミリアはいらいらで思わず近くの柱に頭突きしていた。その後でかいたんこぶをこしらえたのは言うまでもない。

窓からウイングナイトの男が出てきたのを、駆け付けたアレンは見た。

「おい、何があったんだ？またモンスターか？」

「片づけた。」

「……なあいい加減にしろよ！俺には何も教えてくれないのか？例えばほら……名前とか。」

と、ウイングナイトの男は掛けていたサングラスを外した。

「……レンだ。名前はレン。仮面ライダーウイングナイトだ。」

「そうだそうこなくっちゃ！」

突然、レンと名乗ったウイングナイトの男はアレンを壁に押し付け、自分もその横に身を隠した。

「シッ。」

「何だ？」

「仮面ライダーインサイザーだ。」

二人がさっきまでいた場所を、リッチーが上から見ていた。今は壁で死角になっているので、リッチーは二人を見落とした。

「誰だって？……あ…蟹の男か！アイツが？でもどうしてわかるん

だ？」

「……俺には分かる。」

レンは分かった様な分からないような答えをした。

リッチーが窓をのぞきこみ、別の所に移動しようとする、行く手にアレンが立っていた。

「……また闘る気か？」

「どうかな。」

「じゃ闘るか。」

と、後ろからレンが歩み寄ってきた。

「オイオイまたお友達かよ。永遠のお友達ってか？一人じゃ怖くて戦えないか。」

「戦えるさ。」

と、レンが言葉をかけた。

「引っ込んでろ。」

「何？おい話が違う。」

レンはリッチーに歩み寄り、デッキの入ったポケットに手を入れた。

「俺とお前で、一騎打ちだ。」

「上等だ。」

と、リッチーは突然レンに言葉をかけた。

「ああちよつと、そこに何かついてる。ああそこそこ。」

リッチーの言葉に、レンはジャケットの肩を見た。

「おつとメセタマークか。がっぽり頂くぜ。」

その言葉は事実上の引き金だった。リッチーとレンの両者がそこにあった窓を向き、デッキを突き出した。

「KAMEN RIDER！」

二人のデッキがバツクルに挿入され、ウイングナイトとインサイザーのアーマーが体を覆う。変身が完了すると、二人は窓に飛び込んだ。

ベントラにある、どこかの広場。リッチーとレンはお互いに向き合った。

「カアツコイイ。1億メセタにふさわしいな。」

それを聞くと、レンはダークバイザーを抜いて飛びかった。リッチーもシザースバイザーを構えて応戦する。

刃と鋏の応酬。ぶつかり合う二つの武器が火花を散らす。鏝迫り合いの様な状態になったところで、リッチーがレンの胴に蹴りを入れ、一瞬ひるんだすきに後ろから抑え込んだ。

「さあて、1億メセタ頂くぞお！」

レンはデッキからカードを抜き、ダークバイザーに挿入する。

『NASTY VENT』

ダークウイングが放った音波をともに受け、リッチーは耳を抑えてレンから離れ、うめいた。

「うわあっ！ウあああおお……ちっ！」

軽く舌打ちすると、ダークバイザーを構えたレンと間合いを取り、そのまま横に走り出した。

地面に転がって起き上がると、レンはダークバイザーを開いてカードを抜いた。

『SWORD VENT』

ウイングランサーがレンの手に飛び込むと、それを構えて一閃し、リッチーの体に斬撃を見舞う。

「おわあっ！」

壁に叩きつけられ落下したリッチーは、すぐに立ち上がってシザースバイザーにカードを挿入する。



『STRIKE VENT』

シザースピンチが腕に装着されると、リッチーはレンに鋏を突き出す。刀身でかわした連の後ろに回り込み、さらに一撃。そして腕を突き出し、ウイングランサーを挟み込んだ。

「お前のおかげで金持ちになれるぜ。」

「クウツ！」

レンはダークバイザーを抜いてリッチーの胸を払い、立ちあがって蝙蝠の紋章が刻まれたカードを<sup>ベントイン</sup>挿入した。

『FINAL VENT』

それを見て、リッチーも蟹の紋章のカードを<sup>ベントイン</sup>挿入した。

『FINAL VENT』

飛び上がったレンの背中にダークウイングが合体し、地面から生えるように出てきたボルキヤンサーが自分の鋏を足場にしてリッチーをバレーボールの要領で打ち上げる。レンはそのままウイングランサーを構えて飛翔斬の体勢に入り、リッチーは体を丸めて飛び上がり、必殺のスピントック、シザースアタックで迎え撃った。

「おおおおお！！！！」

「だりやああああ！！！！」

ぶつかり合った二人から爆炎が発生する。着地成功したのはリッチーだった。レンは地面に這いつくばり、ダメージでうめき声を漏らす。

と、不意に炭酸水が泡立つような音が聞こえた。

「何だ？」

振り返ったリッチーの目には、波打った水面に反射した光の様な<sup>パターン</sup>模様を浮かび上がらせ、粒子化して少しずつ消えていくボルキヤンサーが映っていた。すぐに消滅は加速し、頭から消えて行って完全に消える。そして、リッチーの身にも同じ事が起こっていた。窓からそれを見ていたアレンが、眉間にしわを寄せてそれを見る。

「いったい、何が？おいちょっと待て、まだ終わってない！何だこれ…俺はまだ戦える！…どうなってんだ！？なあ…おい…頼むよ！」

しかし、リッチーの悲痛な叫びは届かなかった。

「パパアアア！！畜生！こんなの、嫌だ<sup>ヤ</sup>ね！うわアアアアチクシヨオオオオオオ！！！！助けてくれエエエエエエ！！！！！！！！」

そして、リッチーの体は完全に粒子化し、虚空に消えて行った……。

レンが窓から出てくる。アレンは急いで彼を追った。

「なあ、あいつはどうなったんだ！？」

「アイツはベントされた。」

「ベント？」

「転送されたんだ。二つの世界の狭間、アドベント空間に。仮面ライダーが敗れるとそうなる。」

「転送って、いつ戻るんだ？」

「戻れない。」

レンの答えは簡潔だった。残酷に思えるほどに。

「……だから戦いには負けられない！」

それだけ言うと、レンはバイクで走り去っていた。

「あ、オイちよつと待てよ！」

そう言っ走り去っていくアレンを、赤いバイクに乗った男が見ていた……

レンはビルの屋上に座り、回収したインサイザーのデッキを見て

いた。かつての仲間のインサイザーに、想いを馳せながら。

アレンは、自室で頭を抱えていた。リッチーが恐怖に叫び、助けを求めて消滅する姿が、彼の頭にフラッシュバックする。

アイツはベントされた

戻れない

「ベント……」

アレンはそう呟き、デッキを握りしめた。

「……もう嫌だ……」

アレンはデッキを引き出しに放り込み、ベッドに座りこんだ。と、またもや例の音場響く。そして、カードデッキが無視するなとばかりに光を放つ。

「……これで、最後だから……」

近くの窓の中を走り抜けるアドベントサイクルを、赤いバイクに乗った男が見ていた。男はバッファローの紋章が刻まれたカードデッキを取り出し、窓にかざす。緑の電光が走り、ベルトを形成し、そして……

「  
K  
A  
M  
E  
N  
  
R  
I  
D  
E  
R  
!」

## 第7話 敗者の宿命（後書き）

### 次回予告

ベントされる事する事に恐怖を感じ、戦いから降りようとするアレ  
ン。しかし、契約が一生涯続く事を聞かされる。一方ベントラの要  
塞では、新たな仮面ライダーがアレ達を監視していた…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「二つ  
の力」

命をかけて、守りたいものがありますか？

## ライダーデータ紹介（前書き）

ここまでで登場した3人のライダーのデータを一気に紹介します。  
APやGPは龍騎の公式HPが参考です。武器や技以外のカードの  
ステータスはトン数に換算しません。

## ライダーデータ紹介

仮面ライダードラゴンナイト

変身者：アレン・クラウド 日本名：龍騎

ベントラで開発された12の仮面ライダーのうち一つで、格闘戦を主体とするバランスタイプ。アドベントビーストは無双龍ドラグレッダー。特殊能力系カードは一切保有していないが基本性能は良く扱いやすいため、使いこなせば無類の戦闘能力を発揮する。召喚機は左腕に装備された手甲『ドラグバイザー』。名前は『龍騎』をそのまま英訳したもの。

・ソードベント 2000AP（100t）

ドラグレッダーの尻尾を模した青龍刀『ドラグソード』を召喚。

固有の技『龍破斬』を持つが劇中未使用。

・ストライクベント AP：2000（100t）

ドラグレッダーの頭部を模した手甲状の武器『ドラグクロ』を召喚。そのまま打撃武器として使用するだけでなく、指示した方向へドラグレッダーに炎を吐かせる『ドラグクロファイアー』も使用可能。ちなみにこの技は『仮面ライダーディケイド』において、死なないはずのアンデッドを一撃で爆殺した。他にも『衝空突破』なる技を持つが劇中未使用。

ガードベント GP：2000

ドラグレッダーの腹を模した2枚組の盾『ドラグシールド』を召喚。肩に取り付けて使う事も出来るため、他の武器と併用も可能。固有の防御技『竜巻防御』を持つが劇中未使用。

・アタックベント AP：5000

ドラグレッダーを召喚。火炎放射を行わせた後ファイナルベントにつなげる事が多い。

・ファイナルベント                      A P : 6000 (300t)

『ドラゴンライダーキック』。中国拳法のような動きを取った後地面を蹴って飛びあがったドラゴンナイトの周りをドラグレッダーが飛び、ドラグレッダーの炎に押される形でドラゴンナイトが必殺の飛び蹴りを見舞う。たいていのモンスターならこの一撃で粉砕できる。

## ブランク体

アドベントビーストと契約していない状態のドラゴンナイト。正確にはドラゴンナイトではない。ドラグレッダー意外と契約する事も一応は可能。未契約状態のため戦闘能力は悲惨なほど低い。召喚機はガントレットタイプの『ライドバイザー』。資料によっては『ブランクバイザー』と呼称されている。

ソードベント                      A P : 800 (40t)

細身の剣『ライドソード』を召喚。資料によっては『ブランクソード』と呼称されている。斬りつけただけですぐ折れるほど面白いが本来この設定は台本に無く、撮影中に小道具が折れた際スーツアクターがアドリブで『折れた! ?』とセリフを発したことがきっかけとなっている。ちなみにこのシーンは新規撮影ではなく龍騎の流用フィルム。

ガードベント                      G P : 不明

『ライドシールド』なる盾を召喚。性能は不明だが、おそらく中級以上のモンスターの攻撃を1回受けただけで壊れてしまうだろう。



## 仮面ライダーウイングナイト

変身者：レン      日本名：ナイト

ベントラで開発された12の仮面ライダーのうちの1つで、ドラゴンナイトよりも接近戦に特化したタイプで、使いこなすにはある程度の熟練が必要。アドベントビーストは闇の翼『ダークウイング』。やや防御面に不十分なところはあるが、身軽さと、他のライダーには無いタイプの特異能力がウリ。召喚機はレイピア型の『ダークバイザー』で、これをそのまま武器として使う事もできる。名前の由来は、『ナイト』の部分を残しておきたかったためこの様になったのではないかと思われる。

・ソードベント 2000AP（100t）

ダークウイングの尾を模した槍『ウイングランサー』を召喚。ナツクルガードが付いており、簡単な盾にもなる。

・ガードベント 3000GP

ダークウイングが飛来して背中に合体し、黒いマント『ウイングウォール』に変化。マントなため実際の防御力は絶望的だが、アタックベントで召喚したダークウイングと合体して得られる飛行能力も一応は使用可能。

・トリックベント 1000AP

最大8人に分身する『シャドーイリュージョン』を発動。分身したウイングナイトはそれぞれがアドベントカードを使用可能。ただし一定のダメージを受けると分身は消滅する。

・ナステイベント 1000AP

ダークウイングが敵の生理的に最も嫌う周波数の音波を放出しながら飛来、敵を攪乱する。ウイングナイト自身は影響を受けない。

ちなみに『ナスティ』という単語は『嫌な、不快な』と言う意味。

・アタックベント 4000AP

ダークウイングを召喚する。ダークウイングは背中に合体してマントにし、飛行能力を得る事が可能。

・ファイナルベント 5000AP(250t)

『飛翔斬』。助走をつけて飛び上がったウイングナイトの背中にダークウイングが合体してマントに変形。ウイングランサーを構え、マントが体に巻きついた漆黒のドリルの様な姿で敵に突っ込む。

仮面ライダーインサイザー

変身者：リッチー・プレストン

日本名：シザース

ベントラで開発された12のライダーのうちの一つで、防御力に特化した設計。アドベントビーストは蟹型の『ボルキャンサー』。所有カードは少なく基本スペック的にもほかのライダーにやや劣るが防御力は凄まじく、死なないアンデッドを一撃で爆殺したドラグクロフファイアーをただのガードベントで跳ね返すという驚異の芸当を披露。ボルキャンサーが人型であるため、アタックベントを使用しての挟み打ちが得意。召喚機は左腕に装備された鋏型の『シザースバイザー』。そのまま振り回して武器とすることも多い。名前の意味を間違えられやすいが、『挟み込み』からきている。

・ストライクベント 1000AP(50t)

ボルキャンサーの腕を模した巨大カニバサミ『シザースピンチ』を召喚。右腕に装着して使用する。他の武器に比べてAPは低いが、ドラゴンナイトの体を一撃で弾き飛ばす威力を見せる。トン数に換算すれば、仮面ライダーカブトハイパーフォームの『マキシマムハ

イパーサイクロン』と同じ威力。

・ガードベント 2000GP

ボルキャンサーの背中の中殻を模した盾『シエルディフェンス』を召喚、シザースバイザーに合体させて使用。絶対に死なないはずのアンデッドを一撃で爆殺したドラグクローファイアーを弾いた。日本の『龍騎』では、仮面ライダー王蛇のファイナルベントを防いだものの、連続攻撃で弾かれ攻撃を凌ぎきれなかった。

・アタックベント 3000AP

ボルキャンサーを召喚。

・ファイナルベント 4000AP（200t）

『シザースアタック』。地面に出現した鏡状のスクリーンからボルキャンサーが現れ、その缺をステップにして飛び上がり必殺のスピリアタックを叩き込む。ウイングナイトの飛翔斬を技そのものではない、いわゆる『ライダージャンプ』で圧倒したものの、AP的に負けていたためベントされる事となった。全ファイナルベントの中で一番威力が低い、トン数に換算すれば仮面ライダーキバエンペラーフォームの必殺技『エンペラームーンブレイク』の150tを凌駕。ただし、最強と名高い仮面ライダーラスのソードベントにAPを抜かれてしまっている。

## 第8話 二つの力（前書き）

第5話の展開をほぼ丸ッぽ再構成しました。

## 第8話 二つの力

ベントラにある電車。いきなり突っ込んできたアドベントサイクルが、そこにいたモンスター、ゼノバイターを撥ね飛ばした。どこかの駐車場に飛んで行ったゼノバイターを追いかけてアドベントサイクルを走らせ、ベルト横の固定具を外して車両から降りたのはアレン。

アレンが構えた瞬間、ゼノバイターはいきなり持っていたブーメランを投げた。アレンは何とかかわしたかに思えたが、後ろから帰ってきたブーメランが背中をかすめる。

「うわぁっ!」

ゼノバイターがもう一度ブーメランを投げる。アレンはそれをかわして上のフロアに飛び上がり、デッキからカードを抜いた。

『SWORD VENT』

が、やってきたドラグソードはゼノバイターのブーメランに弾かれた。

「……は？オイちよつと待てよ!」

が、ゼノバイターは容赦なく襲いかかってきた。ブーメランを剣の様に振り回すが、所詮は力頼みだった。繰り出される斬撃を交わし、腕を掴んで抑え込むとドロップキックを見舞って吹っ飛ばす。

「見てろよ!」

『STRIKE VENT』

ドラグクローはやはり弾き飛ばされたが、計算済みだった。素早く横に転がり、ドラグソードを回収する。

「ハハッ、やると思っただぜ。」

武器さえ手に入ればこちらの物だった。続けざまに斬撃を叩き込まれたゼノバイターの体がよろめく。

が、アレンは気付かなかった。バッファローのカードデッキを腰に取り付け、銃を下げて窓の中からじっと見ていたライダーの姿に

……  
繰り出されたジャンプ斬りが、ゼノバイターのブーメランをへし折る。

「どうだ？参ったか！」

しかし、ゼノバイターは一瞬周りを見ると、素早く上に飛び上がった。アレンはすぐに後を追ったが、既に其処にゼノバイターの姿は無かった。

「オイ！……逃げられた……」

それから少しして、窓からバツファローのライダー トルクが現れ、変身を解いた。と、そこに黒いコートを着た男 リッチーにコナーズと名乗っていたあの男 が出てきた。

「何をぐずぐずしている？私の計画にはアレンが必要だ。」

「下調べの最中ですよ。焦りは禁物です。」

トルクはヤケに落ち着いていた。

「時間をかけ過ぎるのも考えものだな。」

「ご安心を。」

そう言ったトルクの声は、自信に満ちていた。

「じゃあ君を助けたのが仮面の男と言う訳か？話が出来過ぎじゃないか。」

シズルとエミリアが、リトルウイングの事務所で話していた。

「でも本当の事なのよ。そして、目の前で格好が変わったの。着替えじゃなくて、変身よ。そいつとアレンは仮面ライダー。」

「仮面…なんだって？どういう事だ？」

「あたしにもよく分からない。まるで鎧を着たスーパーヒーローよ。鏡を通って表れて、モンスターと戦うの。」

「エミリア、君の趣味はもっとましかと思っていたが…」

「これはあたしの体験談よ。ホントの話！」

「そんなの信じられるか！」

とその時だった。来訪者が来たのは。

アレンだった。

「よお。あ、今話せるか？」

「あ、うん。奥に行こう。」

どこかの要塞の司令室。コートの男がカプセルの様なものから出てきて手を一回打ち鳴らす。

「やあ。おはようドリュウ君。調子はどうかな？」

ドリュウと呼ばれたトルクの男がそれにこたえる。

「実を言うと將軍、あなたの計画ある部分が、少し理解できません。」

「どの部分かね？私は荒廃した母星の再建に使うグラール人を拉致する。そして君は、グラールの王になる。」

將軍と呼ばれたコートの男が問う。ドリュウの答えは早かった。

「俺が理解できないのは、誘拐の方法です。今の様に一人ずつではグラールの王に、すぐになれそうにない。」

「ああ、その点は心配ない。今にテレポートシステムを使って、全人類をいっぺんに拉致出来るようになる。そのために、人類のDNAサンプルが必要なんだよ。」

ドリューは今一つ理解が出来ていないようだった。顔に書いてある。

「いい物を見せよう。」

そう言つて、將軍は目の前の画面に手をかざした。と、ニューデイズの市街地が映し出される。そこでは、男が一人歩いていた。画面上で、その男の色々な身体的なデータが映し出される。

「見たまえ、私は時間を無駄にしない。君と違い私はサンプルを集め続けている。じんるいのDNAのね。ターゲットが見つかったら、手下が誘拐してくる。」

画面に映し出された男の背後に、いきなりゼノバイターが現れた。「人類のDNAパターンを解析し、転送装置とのデータリンクを完成すれば、あとはボタン一つで全人類が私の物だ。」

と、將軍はドリューがけげんそうな表情をしているのに気づいた。「まさか、いまさら良心の呵責など感じているのではあるまいな？」

が、ドリューはすぐに元の表情に戻った。

「いえ、どっちに住むか悩んでたんですよ。支天閣か、それともホワイトハウスか。」

彼の顔を見れば分かる。完全にドロドロズブズブの欲望まみれだ。



リトルウイングでは、アレンがさっきのレンの戦いを説明していた。リッチーの目的、そして、リッチーの哀れな末路を。

「モンスターは倒さなきゃいけないけど、インサイザーは人間だった。嫌な奴だったけど彼は人間さ！」

「で、結局彼はどうなったの？」

「……ベントされた。二つの世界の間にある異次元に、飛ばされたんだってさ。ライダーが負けたらそうなるらしくて、一回ベントされたら、もう戻れない。」

「じゃあ、あんたが負けたら、おんなじことになるの？」

それに答えたアレンの声からは、苦悩がありありと読み取れた。

「俺が勝ったら相手がそうなるんだ！どっちも嫌だ……」

「アレン、もうかわらないで。」

「分かってる。」

と、不意に来訪者の知らせがあった。

やってきたのはレンだった。

「アレン、話がある。」

「あ、ああ。」

アレンとレンは、少し奥まった物陰に移動した。

「さっきの事なんだが、俺も、ライダーをベントしたのは初めてだったんだ。」

「その事なんだけど、俺はもう降りるよ。ベントされたくないし、

……するのも嫌だ。…ゴメン。」

が、レンはデッキを置いて立ち去ろうとしたアレンを引きとめた。「そのデッキはもうお前にしか使えない。モンスターとの契約は永遠に続く。カードデッキが無効になるのは、お前が負けた時。」

「……ベントされた時か。クッそ、何なんだよ、何で父さんは俺を!?」

「父さん?」

「何でもない。」

と、頭に音が響く。モンスターが出たらしい。

「俺は行く。来れるか?」

「あ、ああ……」

海沿いの廃工場、大きな姿見の前に立っていたゼノバイターに向かって、2台のホイールバイクが走ってきた。ゼノバイターは鏡に飛び込み、レンはそれを放っていた。

「何で逃がしたんだ?」

レンは、アレンの問いに、メットの風防を外して答えた。

「新しい技を教えてやる。ついてこい。」

そう言っつて、レンはデッキをかざし、ベルトに挿入した。

「KAMEN RIDER!」

そして、スロットルを全開にして鏡に飛び込んだ。

「バイクでもはいれるのか。……よし、俺も!」

アレンもカードデッキをかざし、掛け声を張り上げる。

「KAMEN RIDER!」

ベントラとグラールを隔てる空間、デイメンジョンホール。そこを走るレンが変身すると、乗っているホイールバイクも専用マシン、ウイングサイクルへと変わる。そして、アレンにも同じ事が起こり、バイクの色が変わり、形が変わり、専用のドラグサイクルへと変化した。

「悪くないだろ？」

「スツゲエ、ライダーってこんな力もあるのか。」  
「行くぞ。」

アレンとレンは前方にゼノバイターとその部下のレッドミニオンを確認した。そして、相手もこちらに気付く。

ゼノバイターが突撃命令を出し、そして二人のライダーがバイクを走らせたのを、将軍とドリュウが鏡の向こうからじっと見ていた。

レッドミニオンは一斉に襲いかかったが、生身でバイクに立ち向かうなど、倒してくれと言っているようなものだ。早速2体がアレンに撥ねられ、後ろに盛大に吹っ飛ぶ。

レンは完全に慣れている様子だった。ジャックナイフの要領で車体を回転させ、周りから襲い来るレッドミニオンを撥ねる。

あっという間に6体ほどが消滅した。

と、いきなり飛んできたブーメランが二人を叩き落とした。

「おわあっ！」

やはりゼノバイターだった。

「二手に分かれるぞ。」

「ああ。」

レンはダークバイザーを引き抜き、構えて走り出した。

「行くぞ！」

「了解！」

『SWORD VENT』

アレンはドラグソード、レンはダークバイザーを構えて走り出していった。

「いつまでもぐずぐずしている聞か？彼らに手柄を取られたくはなからう？」

将軍が口を開いた。

「…御冗談を。あいつらもうすぐ全滅ですよ。」

「あんなにいっぱいいるのか？」

とはいえ、将軍の声の様子は言葉とは異なっていた。

「時間の問題ですよ。」

アレンと言えば、そんな二人になど気付かず、レッドミニオンの相手をしていた。RIDERの相手をした経験があれば、レッドミニオンなど大した相手ではなかった。ドラグソードを振りかざし、襲い来る雑魚共を次々と斬り伏せて行く。

「大丈夫か？」

「絶対調だよ！」

と、ゼノバイターがブーメランを振りかざして襲ってきた。が、すぐに二つの剣がゼノバイターの体を捉える。レッドミニオンに比べれば多少は歯ごたえはあるが、それでも二人なら大した相手ではなかった。

ジャンプ斬りをかわされ、ゼノバイターが地面に倒れこむ。二人はその隙を見逃さなかった。素早くカードを抜き、それぞれの召喚機（ベントイン）に挿入する。

『FINAL VENT』

ゼノバイターは背を向けて逃げ出そうとしたが、2発のファイナルベントは外れなかった。ゼノバイターは粉々に吹っ飛び、爆炎の中でアレンとレンが立ちあがった。

「やったな。行くぞ。」

「おう。」

それだけ言葉を交わすと、二人はその場を後にした。

「厄介なコンビが誕生してしまったようだな。」

と、ドリユーが將軍に進言した。

「將軍、俺に任せてください。必ず奴らを引き離します。」

「出来るかな？」

「俺に2匹くだされば必ず。」

「……いいだろう。」

と、將軍は部屋の壁の方に手をかざした。すると、何も無かった空間に、シマウマのモンスター　ゼブラスカル・アイアンとゼブラスカル・ブロンズが現れた。

「流石です。」

そういて、ドリユーはその場を去った。將軍はそれを見届けてから、ぼそりと言った。

「……ペテン師め。」

アレンとレンが出てきた。アレンが笑顔で声をかける。

「やったな。チームワークだよな。」

「ああ。」

と、妙な気配がした。今までのモンスター出現とは違う気配だ。近くの鏡を見たレンが、突如そこに歩み寄った。

「…ゼイビアックス!?」

アレンの目には、一瞬だけ、黒い、鎧の様な姿が映った。が、次の瞬間にはその姿は消えていた。

「どうしたんだ?」

「向こうからブロックされた。」

レンは自分のバイクの近くで立ち止まり、近づいてくるアレンを待った。

「今のは誰?」

「アイツはゼイビアックス將軍、ベンタラを滅ぼした奴だ。」  
「滅ぼしたって、どういう事!?!」

レンは、話し始めた。

「ゼイビアックスはエイリアンだ。仮面ライダーは皆もともと奴と戦っていた。だが、俺達の仲間のライダーのうち一人、ストライクと言っ奴が裏切った。そしてその後、もう一人も。」

「裏切った!?!」

「お前の前のドラゴンナイトだ。そいつらが不意打ちして次々とカードデッキを奪ったんだ。ベンタラ側に残った10人のうち、俺以外の全員がベントされた。ゼイビアックスは次にグラールを狙っている。奪ったカードデッキで仮面ライダー軍団を作り出している。だから力を貸してほしい。」

レンの言葉を聞いていると、アレンの脳裏には、再びリッチーの最後がフラッシュバックした。

「…ベントするんだな。」

「そうだ、やるしかない。このグラールまで滅ぼしたくない。」

「…でも俺は、父さんを見つけれただけなんだ。1年前から行方不明のな。」

レンは、アレンが取り出したビラを見た。

「…分かるよ。俺も大切な人を失った。」

「…レンも大切な人を失ったのか…」

アレンはきつと顔を上げた。

「…俺もやるよ。こんな思いをするのは俺だけでいい。大切な人に、そんな思いさせたくない。一緒に仮面ライダーと戦うよ。」

「……ありがとう。二人なら、きっとできる。」

二人は、しっかりとお互いの手を握った。そして、それぞれのマシンに跨る。

「行こう。世界を救うぞ。」

「オイオイ、そりゃ俺のセリフだっつーの。」

アレンが笑いながら返した。

「早い者勝ちだ。」

2人の戦士は、バイクで走りだした。この絆が、変わらぬものと信じて……

## 第8話 二つの力（後書き）

### 次回予告

レンと共に、ゼイビアックスと戦う事を誓ったアレן。しかし、彼の目の前に現れたドリューは、アレןに、レンがゼイビアックスの手下だと告げるのだった…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 「仮面ライダートルク」

命をかけて、守りたいものがありますか？



第9話 仮面ライダートルク（前書き）

ウラ「ようやく僕の出番だね。」

モモ「お前じゃなくてトルクな。」

## 第9話 仮面ライダートルク

レンは、リトルウイング宿舍のアレンの部屋にいた。彼の机に置いてある、バイクのパーツを一つ持ち上げ、少し見てみる。アレンは、冷蔵庫からペット・ボ・トルの水を出し、レンに手渡した。

「なあ……ストライクと前のドラゴンナイトは、何でゼイビアックス側に？」

レンはアレンから水を受け取り、答えた。

「ストライク……奴は勝ちにこだわる奴だった。アイツが裏切った時点で、俺達のリーダーはいなくなって、敗色が少しずつ出てきたんだ。たぶん、そのせいだ。ドラゴンナイトは……俺も知りたい。」  
「とにかく、その前のドラゴンナイトのせいで俺を信用できなかったわけか。」

「お前はあいつとは違うのにな。」

アレンは少しはにかなりて見せた。とその直後、あの気配が頭をよぎった。アレンは部屋を出ようとしたが、レンが止めた。

「待て。」

そう言って、アレンを洗面所の鏡の前にいざなった。

「こっちの方が近い。」

アレンとレンはデッキを構えた。ほとばしった電光がベルトを形作る。

「『KAMEN RIDER!』」

デッキをスライド挿入し、変身した二人はすぐにその鏡に飛び込んだ。

ニューデイズにある、海沿いの工場、レッドミニオン数体を追って、二人のライダーがやってきた。

「向こうを頼む、俺はこっちだ。」

「分かった！」

アレンとレンは二手に分かれ、レッドミニオンを追っていった。アレンが追っているレッドミニオンは、少し開けたところまで逃げると、アレンに向き直った。アレンは素早くジャンプして2体の後ろに回り込み、素早く体勢を整えて拳を見舞った。そのレッドミニオンがよろめくと、もう1体にサイドキックを叩き込む。続けてもう一撃。と、さっきパンチを見舞った奴が、後ろから襲いかかってきた。ドロップキックをまともに食らい、アレンが体勢を崩した隙に、2体が飛びかかってきた。アレンはそのうち1体を捕まえると、もう1体の拳の盾にした。が、パンチを喰らって後ろにがくと倒れたレッドミニオンの首に顔をぶつけ、アレンの後頭部が後ろのコンテナの角に衝突する。

「いってえ！」

素早く相手に向き直り、回し蹴りを見舞う。

と、突然飛んできたブーメランが、アレンの背中をまともにとらえた。そこを見ると、シマウマのモンスター、ゼブラスカル・アイアンがいなかった。

「お前、覚悟しろよ。」

一方レンは、入り組んだ道に逃げ込んだレッドミニオンを追っていた。敵は巨大手裏剣を装備したものが1体、丸腰が1体。コンテナの陰からいきなり出てきたレンが、レッドミニオンのうち1体に素早く拳を叩き込む。反対側から大きな手裏剣を構えて迫ってきたレッドミニオンの攻撃を交わして背中に蹴りを叩き込み、もう1体に勢いをつけた右ストレートを見舞って吹っ飛ばす。手裏剣もちが武器を構えて連に向き直り、レンも素早く構えた。

突き出された手裏剣をダークバイザーで素早くかわす。レンの斬撃を、どうやら指揮官クラスだったらしいそのレッドミニオンは手

裏剣でことごとく防いだが、やがて武器を上<sup>うへ</sup>に吹<sup>ふ</sup>っ飛ば<sup>とば</sup>される。が、素早く落ちてきた武器を構え、レンに斬撃を加える。レンもそのレッドミニオンに負けない巧みさでさばいていく。と、反対側から丸腰の方が飛びかかってきた。レンは素早く身を翻し、投げつけられた手裏剣をかわして丸腰の方に当てる。その丸腰の方が消滅し、コンテナの上に飛び上がった武器持ちに蹴<sup>く</sup>りを見舞<sup>みま</sup>って地面に叩<sup>たた</sup>きつけ、消滅させると素早く駆け出して行った。

資材置き場と思しき場所。ゼブラスカル・アイアンがいないでいたのをアレンは見ていた。

「待つてろ！」

アレンはジャンプして殴<sup>う</sup>ろうとしたが、ゼブラスカル・アイアンが突き出した拳は空中でかわすすべのないアレンの体をまともにとられ、地面に叩<sup>たた</sup>きつけた。

「のわあ！」

容赦なく、ゼブラスカル・アイアンが襲いかかる。起き上った直後にキックを見舞われ、アレンは地面に転がされた。再び迫ってきたゼブラスカル・アイアンにアレンは飛びかかり、そのままヘッドバッドを見舞った。ゼブラスカル・アイアンは体勢をかなり崩したが、アレンの頭もそれなりにダメージを喰<sup>く</sup>らった。

「うわあっ！ いったえ……頭突きは攻撃に向かないのね……」

すぐに繰り出された攻撃を素早くかわして拳を叩きつけ、ドロップキックを見舞ってゼブラスカル・アイアンの体を後ろに吹<sup>ふ</sup>っ飛ばす。続いてデッキからカードを抜き、ドラグバイザー<sup>ベントイン</sup>に挿入した。

『STRIKE VENT』

「はああ……うああ！」

ゼブラスカル・アイアンは体を縞模様<sup>しまもよう</sup>に沿って別れさせ、ダメー

ジを軽減したものの、やはりドラグクローファイアの直撃を受けてただで済む訳はなかった。

「ハア、びっくりしたろ？」

と、その光景を見ていたライダーがいた。

緑のスーツ。戦車を彷彿とさせるアーマー。メカニカルなフェイスペース。そしてデッキには緑のデッキ。

ゼブラスカル・アイアンがよるめきながら立ち上がる。アレンはカードを抜き、挿入した。

FINAL VENT

咆哮を上げながらドラグレッダーが飛来し、アレンが宙に飛び上がってゼブラスカル・アイアンに必殺の飛び蹴りを叩き込んだ。

「だりやあああああああああッ！」

それをまともに食らったゼブラスカル・アイアンは粉々に爆散し、アレンは息を突きながら立ち上がった。

「ハア…ハア…しつこい奴め…ハア…」

チュイイイイイン チュドオン！

ものすごい音とともにアレンの後ろが爆発した。爆風を喰らって倒れたアレンに、さらにもう1発叩き込まれる。

思わず見やったアレンは、緑の、重戦車の様なライダーがいるのを見た。そう、トルク ドリユーである。両手で構えた大型のキャノン砲から、さらに追撃の砲弾が叩き込まれる。

「うわあっ！…別の仮面ライダー！？」

ドリユーはキャノン砲を捨て、腰に取り付けた大型拳銃を抜いて引き金を引く。

「オイちよつと待て！」

が、ドリユーは決して容赦しなかった。拳銃から発射された光弾が、アレンを捉える。

「よせ！」

そう言ったアレンに、さらに光弾が叩き込まれる。何とかかわし

た直後、資材の山が崩れ、アレンが見えなくなる。周りを見渡したドリューは、突然響いた気合いを聞いた。

「どおりやああああああああ！！！！！！！！！！」

アレンがドラグソードを振り上げ、ドリューに斬りかかったのだ。近距離に来ればこっちの物だ。ドリューは次第に押されていった。

が、いきなり至近距離で、ドリューがアレンに光弾を連続でブチ込んだ。

「ぐあああ！！」

その隙に、ドリューはアレンを押さえ込んでひざ蹴りを何発もお見舞いした。

「うああ…俺はアレン・クラウド。お前は何なんだ？」

「……お前をベントしてやる。」

ベントを知っている。と言う事は、少なくともライダーに関してそれなりに知識はあるのだろう。

「ハッ、ウイングナイトが言ったとおりだ。何故こんな事をする？分からないのか？ゼイビアクスの狙いはグラールだ！ウイングナイトと一緒に奴を倒そう！」

「……何だと？ウイングナイト一緒に…ゼイビアクスを…倒す？」

ドリューの言葉は、少し驚きを含んでいた。と、ドリューがアレンから離れ、変身を解いた。

「…俺は…仮面ライダートルクだ。」

それから少しして、二人は変身を解いた状態でそのあたりを歩いていた。

「レンが言ったのか？ゼイビアクスと戦ってるって？」

「ああそうだ。グラールをベントラの二の舞にはさせないって。俺はグラールをま美里たい。だからレンに協力してる。何か問題があるか！？」

「ハア……いいかアレン、お前は騙されてる。奴はゼイビアックスの手下だ。カードデッキをベントラから奪い取ってグラールにはら撒いたんだ。」

「それはストライクと前のドラゴンナイトの仕業だ！」

が、アレンが何を言ってもドリュウは聞く耳を持たなかった。

「ストライクが裏切ったのは本当だが、前のドラゴンナイトはウイングナイトに歯向かった。そして、奴に一番最初にベントされた。」

「嘘だ……」

「俺はこの目で見たんだ！」

そう言って、ドリュウは語り始めた……

レンは俺達をゼイビアックスの基地に案内して、騙し討ちにしたんだ。

レンは俺に何度も何度も切りつけ、俺が倒れた直後にドラゴンナイトに襲いかかった。全く備えが出来なかったドラゴンナイトは、凌ぐのがやっとだったんだ。

『どうしたんだレン、止めてくれ！』

『やれウイングナイト、始末しろ！』

ゼイビアックスはレンに指示を出していた。その時点で、その場にいた皆が真実を悟った。俺は……何もできなかったんだ。

『レンやめろ！俺達とベントラを売ったのか！？』

『古い世界にオサラバするのさアダム。仲間になれ、そうすれば見逃してやる。』

『断る！』

アダム　ドラゴンナイトは頑として拒否した。だが、レンは圧倒的すぎたんだ。

『ならお前ともオサラバだ！』

結局、アダムは武器も奪われ、レンに一方的にやられるだけだったんだ。

『いいぞウイングナイト。』

ゼイビアックスはウイングナイトの仕事ぶりに満足していた。レンは嘲るようにアダムの剣を投げ捨て、ゆっくり、歩み寄ったんだ。『最後の警告だ。仲間になれ。』

『誰が……！』

俺はただ見ていることしかできなかったんだ。アダムがかつての親友に裏切られ、絶望の中でベントされるのを……

『やれウイングナイト、そいつをベントするのだ！』

レンはそれに従った。何の躊躇もなく、親友にファイナルベントを使っただんだ。

『サヨナラだ。』

【FINAL VENT】

そして、アダムに無慈悲な一撃を見舞ったんだ。そうして、アダムはベントされた……

『レン……俺は……俺達は……』

俺はすんでの所で逃げだした。自分の身の事だけで精いっぱいだったんだ……



「だったら、何でレンは俺を助けた！？ベントするチャンスはいくらでもあったのに。」

アレンがいらだたしげにドリユーに問いかけた。

「分からないのか！？騙し討ちが奴の手口なんだ。お前を信用させて、お前に近付き…ベントするつもりなんだ。」

が、アレンはその言葉を信じようとしなかった。

「そんなのウソだね。信用できるか。」

「そうか…そんなにベントされたいか、親友と思ってたやつに。」

とその時、少し離れた所に、レンが姿を現した。抜き身のダークバイザーを手に持ち、ゼブラスカル・ブロンズと切りあっている。

「丁度良かった。化けの皮をはがしてやる。黙って見てろ、ピンチの時こそ本性が露わになるんだ。」

そう言って、ドリユーはデッキを取り出し、前方にかざした。ほとばしった緑の電光が、やはりベルトを形作る。

「KAMEN RIDER！」

スライド挿入されたデッキが回転し、ドリユーは次の瞬間、仮面ライダートルクに姿を変えていた。

「見つかるなよ。」

そう言って、腰に付けた拳銃　　マグナバイザーを抜き、ゆっくりと近づいて行った。

突如、切り結ぶレンとゼブラスカル・ブロンズの間を、エネルギー弾が駆け抜けた。見ると、ドリュウが銃を構えてたっている。ゼブラスカル・ブロンズはその隙に逃げだした。

「あきらめるウイングナイト、俺達は止められないぞ！」

「どうかな……」

レンは一気に襲いかかった。あつという間に、形勢はドリュウに不利になった。

「お前とゼイビアックスには負けない！」

レンはあつという間にドリュウを切り倒した。地面に横たわったドリュウに、鈍く光る刃が突きつけられる。

「…何だと？」

「手を引け！」

「…断る。」

「お前達にグラールは支配させない！」

「ハア？」

アレンは遠くにいたので、二人の会話は聞こえなかった。

とその時、彼の眼に、あの鎧の様な姿が飛び込んできた。

「やれ、ウイングナイト、ベントするのだ！」

「ゼイビアックス！」

ゼイビアックスはウイングナイトに指示を出した。どうやらドリュウに協力を頼まれていたようだ。

「その邪魔なライダーを始末しろ！我が右腕よ！」

「何だと？」

一瞬、隙が出来た。その隙に、ドリュウは引き金を引きまくった。  
「グアアア……！」

エネルギー弾をしこたま叩き込まれ、レンがひるんだすきに、ドリュウは逃げてきた。

アレンは、ショックを受けていた。会話がよく聞こえなかったのもあるが、ゼイビアックスがウイングナイトに指示を出しているという事実が、彼から他の感覚をほとんど奪い去っていた。

「おい！」

レンはドリュウを追ったが、ドリュウは鏡に飛び込んだ。レンは短く舌打ちし、去っていった。

「……逃げたか……」

と、レンは向こうからやってくるアレンの姿を見た。

「ゼイビアックスの手下なのか！？」

「何を馬鹿な。」

「見たんだ！ゼイビアックスとグルになってた。他のライダーを始末しようとしてるんじゃないのか！？」

「連中にだまされるな！本気でそう信じてるのか！？」

「俺がトルクに協力したらどうする？俺までベントするんだろ！……」

……信じてたのに。」

そう言っつて、アレンは去っていった。

「……トルクの奴め……くそっ！」

## 第9話 仮面ライダートルク（後書き）

### 次回予告

クライスのメールを頼りに、パルムの病院に潜入したエミリアは、そこでアレンの父の姿を見つける。行方不明の彼が、なぜそこにいるのか…？

一方、アレンとけんか別れたレンは、ドリュウと遭遇、彼の目的を聞く事となる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『敵が味方か』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第10話 敵か味方か（前書き）

JTCとの電話シーンは、今後の展開に影響するので丸ごとカットしました。

## 第10話 敵か味方か

国道の近く、ドリユーはアレンに歩み寄り、持っていたカミ・カップのコーヒーを手渡した。

「なあ、辛いのは分かる。信じてたやつに、裏切られたんだからな。」

「こんなの信じれないよ。」

「俺だって同じだったさ。」

とその時だった。

「アレン！」

エミリアだった。

「エミリア？どうしたんだいったい？」

「聞いて。失踪した人を探して、クライスのメールを頼りに病院に行ったら……あんたのお父さんを見つけたの。」

「何だって？」

エミリアは話し始めた…

エミリアは、クライスが郵送してくれた変装用の衣装に身を包み、クノーと共に「未確認疾患センター」に潜入していた。途中、都合が悪くなってスチームが付いていない、底が金属のタイプのアイロんでスタッフを1人殴り倒したのは少し申し訳なく思っていた。

『警備員じゃなくて、警官だったよね、今の。』

『この秘密が重大だという事だ。』

とある病棟、そこをのぞきこんだエミリアが何となしにその力  
ーテンをめくった。と、彼女達は凍りついた。

『え……？クノーさん、これって……』

『アレンの……父親じゃないのか？何でこんなところにいるんだ？』

『あたしだって知らないよ！』

ホルテスシティの中央ブロックにある広場で、レンは一人、物思  
いにふけていた。アレンの、いら立ちに満ちた言葉が、脳裏によみ  
がえった。

ゼイビアックスの手下なのか！？

俺がトルクに協力するって言ったらどうする！？俺までベントする  
んだろ！…信じてたのに。

「……奴らの思うつぼだ。」

と、レンは入口が開く気配を感じ取った。見ると、近くのビルの連絡通路に、ガゼルの様なモンスターがいるのに気づいた。

デッキを手取る。が、レンは少しそれを見ると、懐にしまった。

ベントラの、似たような場所。2体のガゼルモンスター　メガゼールとギガゼールの後ろから、レンが声をかけた。

「オイ、パーティー会場をお探しか？……ここだぜ。」

レンはサングラスをかけると、武器を置いて襲いかかってきたガゼルに向かって行った。

ギガゼールが繰り出した拳を素早くかわし、懐に潜り込んでパンチの嵐を見舞う。勢いをつけた最後の一撃にギガゼールが吹っ飛ぶと、メガゼールが襲いかかってきた。後ろ回し蹴りを見舞われよめいたメガゼールに、続けてサイドキックが撃ち込まれ、レンはそのまま横にローリングして間合いを取った。

「ハアッ！」

そしてそのまま一気に距離を詰め、低弾道の回し蹴りで足をすくった後、宙を舞うメガゼールにキックを放って弾き飛ばす。

と、起き上がったメガゼールが槍を手に取り、同じく武器を取ったギガゼールと共に襲いかかってきた。レンは近くにあったステルニウムの棒を手に取り、繰り出されたガゼルの武器を押さえ込んだ後2体に飛び蹴りを放つ。が、起き上がってきたギガゼールがレンの頭上に武器を振り下ろす。何とか棒で防ぐが、上からたたきつけ



られたメガゼールの槍が棒をへし折った。レンは双剣の要領で棒を構え、ガゼルに的確な攻撃を打ち込む。

と、突然ギガゼールが上空に飛び上がり、近くのビルの屋上に消えた。メガゼールも、相方の後を追っていく。

「…何やってんだ、俺。」

「入口ここだろ？」

「正面からはまずいの。裏からよ。ってか、あの人も？」

エミリアはドリュウの事を言っていた。

「ああ。」

ドリュウは愛想のいい笑みを浮かべた。

そして病棟の中、3人はアレンの父、フランクのいる病室にたどりついた。

「父さん？父さん！？俺だよ、アレンだ！俺の事が分らないのか！？何があった！？」

と、ドリュウが口を開いた。

「ゼイビアックスにライフエナジーを吸われたんだ。エナジーを吸いつくされると、こういう夢遊病状態になる。」

「治療法は無いの？」

エミリアの問いに、ドリュウは少しもった。

「あるけど…」

「あるけど何だ！？父さんを助けるためだったら何でもする！」

「……ゼイビアックスだ。奴を倒すしかない。ウイングナイトもだ。」

と、病室のカーテンが、しゃあツと音を立てて開いた。出てきたのは医師だった。

「二人とも、ここでなにしてる？ここは立ち入り禁止だ、出るんだ。」

「え、二人？」

振り返ると、ドリュウの姿は無かった。

それから数分後、アレンとエミリアはフランクのベッドの前に座っていた。と、カーテンがまた空いた。出てきたのは警官だった。

「アレン君、君の入館許可を取っておいた。症状を教えなかった事はすまなかった。私にもどうできるものじゃないんだ。今は落ち着いてるし命にも別状はない。夜の街を他の連中と徘徊していたそうだと。この事は他言無用だ、二人とも。」

「アレン、待つてよ！」

「ドリュウを探す。」

「何でウイングナイトを……」

「俺は見たんだ、ゼイビアックスがウイングナイトとグルになってるのを！治すには奴らを倒すしかないって……」

アレンの声は、悲痛だった。

そのすぐ後、アレンはレンと出くわしていた。

「父さんを直す方法は無いのか！？」

「何の話だ。失踪してるんじゃないかったのか？」

「ゼイビアックスにライフエナジーを吸われたって……」

「そうだったのか……」

レンの声から、感情はあまり分からなかった。

「治すにはゼイビアックスを倒すしかないって…」

と、レンが唐突にアレンの言葉を遮った。

「治療法なんて無い。治せる人はいたが死んでしまった。」

「俺をゼイビアックスから遠ざける気か！？その手には乗らない！」

そう言っつて、アレンは去っていった。

「…トルクの奴め…」

その後バイクで走っていたレンは、ドリユーの姿をはつきりと見た。向こうもこちらに気付き、持っていた携帯をしまつて逃げだした。

「まて！」

逃げたドリユーを追つて、レンは変身してベントラに飛びこんでいた。と、いきなり砲弾が叩き込まれる。そこをみると、ドリユーがいた。

「俺に用か？」

「アレンをだましたな！」

「ガキなんざちよろいもんさ。」

それを聞いて、レンはすぐにドリユーに斬りかかった。ドリユーは繰り出された斬撃を、ダークバイザーのナックルガードに腕をあてて防いだ。

「グラールを売って何を手に入れるつもりだ？」

「ゼイビアックスがグラールの王にしてくれるってさ。それにグラ

ール最後の男になれば、カワイコちゃんも選り取り見取りってわけ。

「廃墟の街でハーレムごっこか。それがモテない男の夢ってわけか！」

そう言つて、レンはドリユーを蹴つて間合いを取った。

「バカか！？用済みになればゼイビアックスはお前もベントするぞ！」

「上手くやるさ。」

「せいぜい夢を見るんだな。」

「何とでも言え。」

そう言つてドリユーはマグナバイザーを抜き、カードスロットをオープンしてカードを<sup>ベントイン</sup>挿入した。

『ATTACK VENT』

地面から生えてくるように、重戦車のごとき重厚なフォルムのモンスター、マグナギガが現れる。危機を悟ったレンはすぐに逃げたが、ドリユーはさらにもう一枚読み込んだ。

『FINAL VENT』

マグナバイザーをマグナギガの背中のソケットに差し込み、マグナギガが全身の火器を展開した。

「ようやくゴールが見えたな？俺は王国、お前は天国。」

それだけ言つと、ドリユーは引き金を引いた。瞬間、全身の火器が一斉に火を噴いた。ミサイル、レーザー、砲弾、様々なものが飛んでくる。

「うあああああ！！！！！」

とつさに物陰に身を隠したおかげで直撃は何とか免れたが、爆風と振ってきた破片で、レンには大ダメージが撃ち込まれた。

凄惨な一斉射が鎮まると、その地形が大きくえぐれて変わつていた。

「……ちよろいもんさ。」

## 第10話 敵か味方か（後書き）

### 次回予告

アレンやレン達の前に現れた新たな仮面ライダー。それは、最強であることにこだわる格闘家、仮面ライダーキヤモだった。援軍を必要とせず、レンばかりかアレンやドリユーも攻撃するキヤモの行動から、次第にアレンは疑惑を募らせる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダーキヤモ』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第11話 仮面ライダーキヤモ（前書き）

ようつべに第8話の3ノ3が無いので、その辺りはオリジナルです。

## 第11話 仮面ライダーキヤモ

全壊し、無残な姿をさらす廃工場。レンは、そこに倒れていた。

「う……ッ……」

止めなくては。アレンに何とかして真実を悟らせねば。その一心で傷付いた体に鞭打ち、レンはその場をよろめきながら後にした。

ダゲオラ郊外の、3階建てくらいの横長の建物。その中の1室で、二人の男がグローブをはめて向き合っていた。片方は頭にバンダナを巻いた背の高い男、もう一人は、黒い肌とドレッドヘアが印象的だった。

「よし、次はスパーリングだ。」

「ハイ、師匠。」

二人は構え、たがいに拳を繰り出した。鍛えた格闘家らしく的確に攻撃を叩き込み、防ぎ、フェイントをかけて間合いを取る。

ドレッドヘアの男が師匠と呼ばれたもう一人の胴にストリートを見舞うと、師匠は少しよろめき、それから微笑んで見せた。

「なかなかやるじゃないかグラント。」

グラントと呼ばれたドレッドヘアは師匠に更に飛びかかったが、どうやら、さっきまでは少し手加減されていたらしい。拳をかわされてカウンターキックを見舞われ、グラントが大きくよろめいて近くのドラム缶に寄りかかる。

「いいか、一瞬でも気を抜いてはならん。」

師匠は、グラントがドラム缶の中に手を入れて何かしている事に気付かなかった。

「さあ、もうひと勝負だ。来い。」

「ああ…勝負だ…」

グラントがぼそりと呟くと同時に、スパーリングが再開された。支障が蹴りを放つ。と、グラントはその足をつかみ、太腿に右フックを叩き込んだ。

「グアアッ！」

「気を抜いちゃ駄目だよ。」

グローブで殴られた者の声ではなかった。どうやらグラントは、さっきグローブに何か仕込んだらしい。続いて、グラントの拳が師匠の左肩を捉え、続いて止めのボディーブローが炸裂した。

「がああッ……」

グラントは勝ち誇った笑みを浮かべ、地面に倒れて他の門下生に助け起こされた師匠を見た。

「……卑怯者…武道を何だと思っている！」

「強い奴が一番になる、そんだけのこつたる。これで、俺は、あんたを、越えた。」

門下生たちは構えようとしたが、師匠が止めた。

「構うな！卑怯者とは…戦う価値は無い。」

そう言つて、彼らは去つていった。と、その直後、グラントが初めて聞く声がした。

「その言葉は撤回せねばな。戦略的と、言つべきだろう。」

暗がりから、黒いコートの身を包んだ男が出てきた。

「あんたは？」

「マトック少佐。君の実力はさっき拝見した。もっと、名をあげたいだろう？」

「もう叶った。」

「場末の道場の師を倒したからか？大したものだ。だが、君にはもっとふさわしい戦場があると思う。君を雇いに来たんだよ私は。」

「傭兵か？」

「却下だ。契約軍人とも思つてくれ。…二つの世界で最強にはな



りたくないか？」

マトック少佐は、そう言ってグラントの顔を見つめた。

「何だと？」

マトック少佐は、不意に懷から、あるものを取り出した。

「…持ってみたまえ。」

グラントが手に取ると、ライムグリーンの『ソレ』は光を放った。

「これは何だ？」

「栄光だ。……栄光へのチケットだ。」

マトック少佐　ゼイビックスは、カメレオンのエンブレムの入ったカードデッキを見つめるグラントを見ながら、満足げな笑みを浮かべていた。

『仮面ライダーキヤモ』誕生の瞬間だった……

パルムの陸橋を、2台のバイクが走っていた。その二人の頭の中に、例の音が響く。

「こつちだ！」

「ああ！」

アレンとドリュウは、目的の場所でバイクを止め、デッキを取り出した。

ベントラの資材置き場、そこにやってきた2台のアドベントサイクル。そこから降り立ったのはドラゴンナイトとトルク。

二人は構え、ゆっくりと進んでいった。とその時、突然モンスターが姿を現した。シュモクザメのモンスター、アビスハンマーだ。アビスハンマーは二人の姿を認め、胸のキャノン砲から弾を撃ち出した。

「ぐああ！」

ドリュウの腕に、その弾が命中する。ドリュウはカードを使おうとしたが、腕のダメージのせいでマグナバイザーが抜けない。

「…お前が使え。」

「え、俺が？使えるの？」

「試してみろよ。」

半ば強引に、ドリュウがアレンにカードを渡す。アレンはドラグバイザーを開き、そのカードを読み込んだ。

『LAUNCH VENT』

空中から、左右計2門のショルダーキャノンが飛来する。

「おお、スッゲー！」

が、その大砲　ギガキャノンは、アレンではなくドリュウにまっすぐ飛んできて、その体に装備された。

「…え？オイちよつとなんだよこれ！カード使ったの俺だろ！」

アレンが声をかけるとドリュウが振り返り、アレンはギガキャノンの砲身に頭をぶつけた。

「あいつてえ！」

「気を抜くな！戦いはもう始まってる！」

ドリュウはそれだけ言ってアビスハンマーの前に進み出ると、エネルギー弾を続けざまに見舞った。

「ほら、これならどうだ？」

アビスハンマーの砲弾をかわし、アレンは再びカードを挿入した。

『GUARD VENT』

「よっしゃ来い！」

が、砲弾はアレンを直撃した。

「…なんかもう嫌になってきた…何なんだよこれ！何で俺のどこ来

ないんだよ!」

「悪い、またこつちだ。お前のやり方が悪いんじゃないのか?」

ドリューは、召喚された大きな盾、ギガアーマーをかざして見せ、横に置いた。

「そうなのか?」

「ほら、これならどうだ?三度目の正直って言うたる?」

ドリューは、またしてもアレンにカードを渡した。

「スリーストライクならアウトだ!」

『ATTACK VENT』

地面に鏡の様なものが出現し、マグナギガが召喚される。

「よし。」

ドリューはその陰に隠れようとしたが、アレンがその体を突き飛ばした。

「させつかよ!」

アビスハンマーの砲弾が、今度はドリューを襲った。一方アレンは、マグナギガの体見守られて、アビスハンマーを挑発する。

「へっへっ当たりませ〜ん!」

『STRIKE VENT』

アレンはマグナギガの陰に隠れてカードを挿入した。<sup>ベントイン</sup>

「おい、何する気だ?」

「まあ見てなつて。」

直後、アレンはドラグクロフファイアを炸裂させ、ドリューもギガキャノンを2門とも発射した。アビスハンマーは全てまともに食らい、粉々に爆散した。

「悪か無いな。」

「そつちこそな。やるじゃん。」

ゼイビアックスの要塞。グラントはそこに案内されていた。

「どうだね、これが我々の本部だ。」

「スツゲエな。こんなのみた事無い。」

「当然だ。これがさっき言った第2の世界。このテクノロジーを見たまえ。」

ゼイビアックスは、そう言ってサングラスを外した。

「我らこそ最強の軍隊。しかし、最強を自称する連中が現れてね。

見たまえ、ターゲットのウイングナイトだ。撃滅するのだ。成功すれば報酬は弾む。」

「いや金なんかどうでもいい。こいつ強いのか？はったりじゃねえだろうな。」

「1番を気取ってるらしい。」

「……今日からは2番だ。」

グラントは、ライムグリーンのデッキを持ち上げて見せた。

エミリアは、家でメールを打っていた。

「あなたの言った通りの病院で、夢遊病患者をたくさん発見しました。有益な情報を有難う……」

と、そこまで打ったところで、急に後ろから抑え込まれ、エミリアは近くの窓に引きずり込まれた。

「おいエミリア、さっきの本なんだが……」

直後、クラウチが扉から出てきたときには、彼女の姿は無かった。

アレンは、部屋にドリュウーとはいつていた。

「いつてえよ。お前と組むといつもああなるのか？」

「俺はめちゃくちゃ楽しかったぜ。なあ、フォローしただろ？」

「ああ……」

「じゃあ、冷蔵庫を開ける、腹が減った。」

アレンはそう言われ、冷蔵庫を開けて小さな容器を取り出した。

「冷蔵庫ね……マカロニチーズがあるけど、賞味期限切れてるかも。後は……ポテトフライとか？」

「賞味期限は？」

「ああ、たぶん切れてる。」

とその時だった。二人は、例の気配を感じた。

「……メシ食う暇もないってか。」

「みたいだね。」

ベントラのビル街。エミリアは、サメのモンスター、アビスラッシャーに腕を引っ張られていた。

「ちよつ、離しなさいよ！離して！」

アビスラッシャーを殴りつけても、手は離してくれなかった。

と、その時だった。レンが、そこに向けてまっすぐ歩み寄ってきた。アビスラッシャーにパンチを叩き込んでふっ飛ばし、デッキを構えてベルトを形成する。アビスラッシャーはすぐさま飛びかかったが、レンはその腕をつかむとそのままデッキをスライド挿入した。

「KAMEN RIDER！」

直後、現れたリングがアビスラッシャーをふっ飛ばし、そのままウイングナイトのアーマーを形成した。

「其処を動くなよ。」

レンはそれだけ言ってアビスラッシャーに斬りかかった。アビスラッシャーはのこぎりの様な剣2振りに対抗していた。

その対決を、じっと見る人影があった。

グラントだった。キャモのデッキを手にして、機会をつかがう。そしてその場に、アレンとドリュウも到着した。

「レン!？」

「マジかよ……」

ドリュウは少し動揺していた。

「え？」

と、ドリュウは誤魔化すように言った。

「そうだこうしよう。ウイングナイトを助けるふりをするんだ。そして、奴が背を向けた瞬間に倒すんだ。そうしたら俺が止めを刺してベントする。できるか？俺に100パー協力するか、0かだ。」

「あ、ああ……分かった。」

二人は階段を下りてその場に向かおうとした。と、グラントが行く手を阻んだ。

「お前ら誰だ？」

「俺達もウイングナイトを追ってる。味方だ。」

「ハッ、マトック少佐から援軍の話は聞いてねえ。これは俺の任務だ。」

「マトック少佐って、誰？」

アレンが問いかけるが、ドリュウとグラントはいきなりデッキを構えた。

「一人で出来るもんってか？お手並み拝見と行こうか。」

「俺に戦わせて、栄光だけ横取りしようってか？まずはお前ら雑魚から片付けてやんよ！」

「吠え面かくなよ。」

「二人とも落ち着け！喧嘩なんかしてる場合じゃ……」

「喧嘩売ってんのはこいつだ。」

「ハア……KAMEN RIDER……」

「KAMEN RIDER!」

3人のデッキがベルトのバックルで回転し、戦闘アーマーが形成

されて、アレン、ドリュウ、グラントが、ドラゴンナイト、トルク、キヤモに姿を変える。

「アアアアアッ！」

グラントが雄叫びをあげて二人に襲いかかった。アレンもドリュウも拳を振るったが、グラントは慣れた様子でそれをさばき、カウンターを叩き込んでいく。が、少しばかり型にはまっている感がないでもない。アレンは、彼が格闘家であると直感で分かった。

「口ほどにもねえな！」

「どうかね！」

ドリュウは素早くカードを抜き、マグナバイザーに挿入する。

『STRIKE VENT』

『GUARD VENT』

マグナギガの頭を模した武器ギガホーンと、膝を模した盾ギガテクターが飛来し、ドリュウの右腕にと肩にそれぞれセットされる。

「どらあ！」

ギガホーンと叩きつけられ、グラントが体勢を崩した。が、ローリングして起き上がり、彼もカードを抜く。そうして、左足の召喚機バイオバイザーのカードキャッチャーを伸ばしてカードをセットし、手を離してワイヤーが巻き戻されるとカードが挿入される。

『HOLD VENT』

ヨーヨーの様な武器、バイオウィンダーが、グラントの掌に飛び込む。

「ああもう！」

アレンも見かね、ドラグバイザーを開いた。

『SWORD VENT』

アレンの手に、ドラグソードが飛び込む。それを振りかざしてグラントに切りかかるが、グラントはバイオウィンダーをぶつけて牽制すると、もう一度伸ばしてアレンの腕を絡め取った。

「なっ！」

と、ドリュウがギガホーンを構え、2本の角の間に取り付けられ

たレーザー砲を発射した。が、グラントは腕を振ってアレンをその軌道上に持つてくると、身を守る盾代わりにした。

「おわあ！」

「へっ、大したことねえな。でもウイングナイトを見失った。今回はお預けにしてやる。」

それだけ言うと、グラントは新たなカードを挿入した。<sup>ペントイン</sup>

『CLEAR VENT』

瞬間、グラントが姿を消した。透明化したのだ。そして、アレンとドリユーに蹴りを見舞って、そのまま去っていった。

『FINAL VENT』

エミリアが駆け付けると、レンが飛翔斬を見舞ってアビスラッシュを粉碎していたところだった。そして、レンは変身を解いた。

「ねえ、待ってよ。あんた、確か…」

「レンだ。」

エミリアは、まず説明を求めた。

「ここはどこなの？何で誰もいないの？」

「……ここはベントラ、俺の国だ。人々はみんな……ゼイビアックスに拉致された。」

エミリアは、やはりレンを質問攻めにする。分からない事だらけだった。

「拉致されたって…解放できないの？」



「元のライダーは俺を除いてリーダーごと全滅した。だから俺が戦っているんだ。」

「…アレンはあんたがゼイビアックスの手先だって…」

「アレンは、ゼイビアックスの手先に騙されている。何とかして、真実を伝えないと。」

「逃がしたじゃないか！お前のせいだ！」

「アイツも味方だろ！？」

アレンが、いら立つドリユーに声をかける。

「バカは考えんな！ウイングナイトもいない！今日二つもしくじりやがって！この間抜け！」

そう言っ走り去っていったドリユーを、アレンは追った。

その光景を、ゼイビアックスはみていた。

「仮面ライダー…」よ、トルクとキャモが同仕打ちを始めた。

狙いはウイングナイトだ。仮面ライダートラストを呼べ！」

そのライダーは、ゆっくりうなずいた。

突然、レンの後ろから攻撃が来た。みると、サイの様な見た目の重厚なフォームのライダーがいた。そのライダーは、いましがたの攻撃でレンの手を離れたデッキに足を乗せ、レンをじっと見据えた。  
「君は隠れている。」

レンはエミリアに言うと、その体を近くの車の車体に突き飛ばした。エミリアはそこにしたたかに背中をぶつける。

「何すんのよ！」

「悪い。」

レンはエミリアの体を押した。と、その体が吸い込まれるように消え、グラールに姿を現した。

そして、レンは身構えた。

と、そのライダー 仮面ライダートラストはデッキを蹴ってレンに返した。

「？」

レンが、怪訝そうな顔をする。

「拾うんだ、フェアな勝負をしろ。」

レンはデッキを構え、変身した。

「KAMEN RIDER！」

そして、変身したレンは、ダークバイザーを抜いてトラストに切りかかり、トラストも飛びかかって行った。

## 第11話 仮面ライダーキヤモ（後書き）

### 次回予告

レンに襲いかかった仮面ライダー、トラスト。その目的は『バトルクラブ選手権大会』に優勝する事だという。彼も、ゼイビックスにだまされたライダーの一人なのか。そして、アレンはキヤモと再び遭遇し、やがて真実を悟るが…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダーラスト』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## ライダーデータ紹介 PART 2（前書き）

新しいライダーが3人出てきたので紹介します。

この作品はライダーをユーブロンも含めて15人出す予定なので、3人登場することに紹介します。

## ライダーデータ紹介 PART 2

仮面ライダートルク

変身者：ドリユー・ランシング 日本名：ゾルダ

ベントラで開発された12のライダーのうち、射撃戦に特化したタイプのライダー。アドベントビーストは鋼の巨人『マグナギガ』。近接攻撃主体の他のライダーとは違い、複数の重火器を使い分けて遠距離から攻撃するタイプ。おそらく、拠点制圧に特化したタイプのライダーなのであろう。1分間に最大120発のエネルギー弾を放つ大型拳銃型召喚機『マグナバイザー』の連続攻撃で敵を弱らせた後、大火力を込めた1撃で大ダメージを与える戦法を得意とする。名前の意味は『回転』。リボルバー拳銃のマガジンやガトリングガンの銃身をイメージしたものと思われる。

シュートベント AP：2000（100t）

マグナギガの両腕を模した手持ちのキャノン砲『ギガランチャー』を召喚。100キロメートルの射程距離を誇り、並のモンスターならこの火器の1撃で粉砕できるが、その威力に比例して反動も大きいため、発射すると反動で大きく後退してしまう。

ランチベント AP：3000（150t）

マグナギガの脚部を模した2門の大砲『ギガキャノン』を召喚。射程距離は普通に目視できる敵に対して使用できる程度だが、2門合わせて発射すればギガランチャーの1.5倍の破壊力を誇り、また、シュルダーキャノンタイプであるため、マグナバイザーやギガランチャーなどと併用も可能。龍騎ではシュートベントだった。ちなみにランチの意味は『発射』で、昼メシではない。

ガードベント

1：マグナギガの胸部装甲を模した盾『ギガアーマー』を召喚。盾としてだけでなく、ギガキャノンと合わせて使う事で反動軽減に活用も可能。 3000GP

2：マグナギガの膝を模した盾『ギガテクター』を召喚、肩や腕に装着して使用する。原作未登場。 1000GP

ストライクベント AP：2000（100t）

マグナギガの頭部を模した武器『ギガホーン』を召喚し、右腕にセットする。2本の角での打撃攻撃の他、取りつけられたレーザー砲で遠距離攻撃も可能。原作未登場。

アタックベント AP：6000

マグナギガを召喚。自分の意思で動く事はほとんどないため、その頑丈なボディをガードベント代わりに使われる事もある。

ファイナルベント AP：7000（350t）

『エンドオブワールド』。マグナギガの背中のソケットにマグナバイザーを装着するとその体に取り付けられた火器がすべて展開、引き金を引く事でミサイルやレーザーを一斉射し、点ではなく面で敵を焼き払う。全ファイナルベントの中で最大級の攻撃範囲を誇り、一点集中で発射することも可能だが、発動から発射までの隙が大きいため、ここぞという時にしか使われない。

仮面ライダーキヤモ

変身者：グラント・ステイリー 日本名：ベルデ

ベントラで開発された12人のライダーのうち、カモフラージュ

戦法を得意としたライダー。ただしグラントが真つ向勝負でたたきのめす戦法を得意とするため、これらの能力はあまり生かされなかった。アドベントビーストはカメレオン型の『バイオグリーザ』だが劇中未登場。本体の格闘能力はそれなりに高く、真つ向勝負でも十分威力がある。だがその真価はアドベントカードによる変装や力モフラージュで発揮される。召喚機はカメレオンの様な形をした、左太腿の『バイオバイザー』。ワイヤーで本体とつながったカードキャッチャーがあり、それにカードをセットしたのち、カードキャッチャーを離すとカードが挿入され、効果が発揮される。名前の意味は『迷彩模様』。また原作では、全ライダーの中で、キャモのみ全てのシーンが新規撮影である。

ホールドベント      A P : 2000 (100t)

バイオグリーザの目を模したヨーヨー状の武器『バイオワインダー』を召喚。そのままぶつけて攻撃に使うだけでなく、敵を絡め取ったりもできる。

コピーベント

相手の姿や武器をそのまま複写するカード。ただし、ほかのカードを使うと解ける。劇中未登場。

クリアーベント

使用者を完全に透明化するカード。本来は奇襲や騙し討ちに使うものだが、グラントは戦場から撤収する際に使用。

アタックベント

バイオグリーザを召喚するカードだが劇中未登場。

ファイナルベント      A P : 5000 (250t)

『デスバニッシュ』。バイオグリーザが舌をキャモの足に巻きつ

けると、キヤモが振り子運動の要領で敵を捉えて空中に舞い上がり、パイルドライバーの要領で敵の頭を地面に叩きつける大技。原作未登場だが、龍騎では仮面ライダーライアと、仮面ライダーナイトを葬った。

## 仮面ライダーラスト

変身者：ブラッド・バレット      日本名：ガイ

ベントラで開発された12人のライダーのうち一人で、突撃戦法型。アドベントビーストはサイ型の『メタルガラス』。装甲車のような重厚な見た目とは裏腹にその動きは軽快で、ライダーの中でも随一のパワーを誇る猪突猛進型なため、フェアな真つ向勝負を好むブラッドとは相性がいいと言える。防御力も非常に高く、ベントラでは切り込み隊長だったのではないかと思われる。召喚機は左肩に取り付けられたショルダーアーマー型の『メタルバイザー』で、取り付けられた角は攻撃にも転用可能。名前の意味は『突っ込む』のだが、辞書によれば読み方は『スラスト』なので、もう別の単語になっている。

ストライクベント      AP：2000（100t）

メタルガラスの頭部を模した手甲型の武器『メタルホーン』を召喚。鋼鉄をもやすやすと貫く貫通力を持つが、大きく重いためトラスト以外の使用は困難。

## コンファインベント

他のライダーが使用したアドベントカードの効果を無効化する特殊なカード。内部からの裏切り者に備えたカードと思われる。

アタックベント      AP：4000

メタルガラスを召喚。性格が性格だけに、インサイザーよろしく



共闘、と言う訳にはいかない。

ファイナルベント      A P : 5 0 0 0

『ヘビープレッシャー』。メタルガラスの肩に乗り、メタルホーンを構えて突進する。スピードと重量、そしてメタルホーンの威力が合わさり、爆発的な破壊力を生み出す。

## 第12話 仮面ライダートラスト

トラストとレンは、ほぼ互角に渡り合っていた。拳を交えるレンは、少し焦っていた。この目の前の相手が、予想以上にトラストの力を使いこなしていたからだ。

「ハア、やるじゃないか、1回戦からなかなか強敵じゃないか。」

「1回戦！？どういう事だ！？」

レンの言葉など気にも留めず、トラストは襲いかかってきた。

「頑張つてレン！」

エミリアは、車体に映る二人の戦いを見守っていた。

その闘いを陰から見つめるライダーがいた。

蛇の様なヘルメットに、紫のボディ。その視線は、見守っているようにも、監視しているようにも、あるいはその両方にも見えた。

トラストはレンを車に押し付け、襟首をつかんで口を開いた。

「悪いな、君もいい選手だが優勝したい気持ちは私の方が上だ。」

「優勝！？何の事だ！」

「バトルクラブ選手権に決まっている！」

レンは隙を見てトラストの胸に膝を打ち込み、後ろによるめかせてその隙に身を起こした。

「優勝？バトルクラブ？何を言っている！これは遊びじゃない、戦争だ！優勝などあり得ない！」

「私は必ず試練に勝つ。それがブラッド・バレットだ！…そして人生を取り戻す！」

そう言つて、ブラッド・バレットと名乗ったトラストはカードを抜き、左肩のシールドアーマー、メタルバイザーに投げ入れて力

バーを閉じた。

『STRIKE VENT』

サイの頭のような武器、メタルホーンが飛来し、トラストの手に飛び込む。それを振りかざしてレンに襲いかかった。続けざまに繰り出される攻撃を何とかかわし、身をひるがえして間合いを取る。

「だまされるな！カードデッキを渡した奴は俺を倒したいだけだ！大会なんてない！」

「私が優勝すると言っている！」

「お前は嵌められたんだ！何を約束されたか知らんが全部ウソだ！」  
「そんなはず…そんなはずあるか！」

メタルホーンとダークバイザーはぶつかり合って火花を散らす。武器が、拳が、続けざまに繰り出され、レンとブラッド・バレットが一步も譲らずぶつかり合う。

グラールから見守るエミリア。と、不意に彼女の携帯ビジフォンが鳴り響いた。

『おいエミリア！シズルだ！クラウドさんが心配している！頼むから電話に出てくれ！』

「……ああ…ゴメンシズル！今それどころじゃないの！」

エミリアは電話を切った。少し、申し訳なかった。

「…アレンに知らせなきゃ。分かってくれるかしら…？」

アレンの部屋。ドリユーは明らかに立っていた。

「そこに座れ。いいか？俺が言ったとおりにウイングナイトだけ狙ってればさっきのキヤモに邪魔されずに済んだんだ！」

「ああ悪かったさ！謝るよ！でも、何でキヤモはレンを狙ってるんだ？不思議じゃないか？狙われているのはお前じゃねえのか？」

「知るか！レンがデッキを独占しようとしたとかそんなところだろ！肝心なのは一つ、あいつは味方じゃない。味方しない奴は敵だ分

「かったか！」

とその時、部屋のビジフォンが鳴った。アレンは立とうとするが。  
「出るな！話は終わってない！戦争なんだ余計な事は考えんな。」

「ああ……」

と、ビジフォンの音声が鳴り響いた。

『発信音の後メッセージをどうぞ。』

プーッ

『アレン！エミリアよ！レンが、装甲車みたいなライダーと戦ってる！あたしはホルテステイ郊外の資材置き場にいるわ！レンは敵じゃない救世主よ！ドリユーこそゼイビアックスの手下よ！アイツはあんたをだましてるの！お願い助けに来て！』

「……どうやら彼女も丸め込まれたらしいな。」

ドリユーが、表情を少しも崩さず言った。

「……アイツに限ってな。とにかくレンの居場所は分かった。けりをつけよう。」

「ああ。」

「まったく、どいつもこいつも俺の獲物を……」

グラントは、レンとブラッド・バレットの戦いを苛立たしげに見ていた。

と、そこにアレンとドリユーが歩いてきた。

「オイオイまた俺の獲物を横取りする気か？今度はぶちのめす。」

「オイ！喧嘩なんかしてる場合じゃねえだろ！俺達と一緒にゼイビ

アックスと戦おう！」

「ああ？ゼイビー？なんだって？アレは俺の獲物だ。二つの世界で最強になってやる。」

「ちよつと、二つの世界とか最強とかなんの事だよ！これじゃインサイザーみたいじゃねえか……そうか、お前も騙されてるんだ！」  
が、二人は構わずデツキを構える。

「オイオイちよつと待て！」

「KAMEN RIDER！」

二人がそれぞれデツキを挿入し、トルクとキヤモへと変身する。  
「待つて待つて待つて！そんな！」

グラントがドリュウに襲いかかり、拳を次々繰り出した。

「ホオワアッ！ホオッ！アアアッ！」

マグナバイザーを構えるドリュウを、グラントは素早い動きで翻弄する。そして資材の積まれたタナの間に潜り込み、ドリュウを挑発する。

「へへッ、鬼さんこちらアエッへッへッヒュ〜」

「チィッ！」

「オオオオオウ、オウオウオウオウオウ！」

打ちこまれるエネルギー弾を次々かわし、グラントが楽しげに走っていく。

ドリュウが柵の正面に来た時、飛びあがったグラントが蹴りを見舞う。

「何処見てるんだよ！」

『HOLD VENT』

「オオオオオオリアアアアアアアアア！」

バイオワインダーが投げつけられ、ドリュウに命中して腕を絡め取る。転倒したドリュウの後ろに回り込んで蹴りを見舞うと、グラントはまた地形に消えて行った。

一方、レンとブラッド・バレットの戦いも激しさを増していた。と、ブラッド・バレットが不意に横を見やる。その視線の先にはドリユーとグラントがいた。

「他の選手も頑張っているようだ。」

それだけ言つて、ブラッド・バレットは襲ってきた。

「ハア…ハア…ぐッ…」

グラントが、腕を抱え、足を引きずっていた。どうやら、さっきのエネルギー弾は全部が外れたのではなさそうだ。と、いきなりアレンがその目の前に現れた。

「おうお前か…」

「ちよつちよつちよつ、待つてくれ！」

アレンが、両手を出して制止した。

「変身しないと後悔することになるぞ。」

「頼むから話を聞いてくれ、お前を雇ったのは人間じゃねえ！」

「人間じゃない？構わねえさ、戦えれば何でもいい。こんなパワー初めてだ。」

「グラールが滅んでもいいってのか！？」

「うるせえな。」

と、いきなりドリユーの声がした。

「そこで何やってる？俺抜きで内緒話か？」

「ドリユー、話を聞いてくれ、ゼイビアクスはライダーをだましてる！それぞれ、夢を叶えると言つて！インサイザーには、ウイ







レンはその光景を見ながら、ゆっくりカードを抜いた。  
「…こっちの番だ…」

「辛いのは分かる。信じてたやつに裏切られたんだからな。」  
と、その時、電子音声が轟いた。

『FINAL VENT』

「おおあああああつ！」

「なああつ！」

ドリユーは身をかわしていたが、飛翔斬のダメージまではかわせなかった。

「あ…やったあ！やったやったあ！」

エミリアは、その光景を見て思わず叫んでいた。

ドリユーがよろめきながら去って行った直後、レンはその場に倒れこんだ。どうやら、かなり消耗しているようだ。

「レン！大丈夫？」

「あ、ああ…」

物陰から、ゼイビックスがそれを監視していた。蛇のライダーは、何処に行ったか影も形もない。

「…ウイングナイトに弱点が生まれた。そうだろうか？」

エミリアの前にある車から、アレンに担がれてレンが出てきた。

「本当にごめん！お前を信じるべきだったのに……」

「……遅すぎはしないさ……」

エミリアが、そこに駆け寄った。

「レン！大丈夫！？病院に行った方が……」

「いや、射止めにふれさせたくないからやめとこつ。」

「せめて家まで送るよ！」

「家か……俺に家は無い……」

「ウチに来ればいい。」

アレンが、口を開いた。

「守るべきものが出来た……それが、ウイングナイトの、運の、尽きだ……」

## 第12話 仮面ライダートラスト（後書き）

### 次回予告

アレンの部屋へと担ぎ込まれたレン。そこで彼が話したのは、どうしてゼイビアックスが選んだのが、リッチーやグラント、ドリユーと言った人々なのかだった。

そして、敗者はベントされる事を知ったブラッドはしかし、それでもキャリアを取り戻すために戦う事を選んだ……

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『バトルクラブ』

命をかけて、守りたいものがありますか？

### 第13話 バトルクラブ

どこかの空き地に止められた車。その車体から、装甲車の様なライダーが出てきた。

「はあッ…はあッ…はあッ…」

ブラッドだった。変身を解いた彼はバイクに跨ったが、発車はせず、トラストのデッキと見つめていた。

そして彼は、自分がレーサーとしての栄光の中にいた、最後のレースを思い出していた…

モトクロス会場。何台ものバイクとレーサーがいるその場に、ブラッドもいた。

【ゲートで合図を待ちます……さあスタートです！】

スタートの合図とともに、そこにいたレーサーがバイクを走らせる。

【1番手はブラッド！ブラッド・バレットがリードしています！そのすぐ後ろにはジョン・スティーブンス！】

ジョン・スティーブンスはブラッドの友人であり、ともに競い合う良きライバルだった。彼らの実力はかなり拮抗していた。だからこそ、二人も、そしてそれを見る観客もわくわくさせられていたのだ。

【現在、先頭はブラッド・バレットとジョン・スティーブンスの競り合いです！第3ターンでもほぼ差はありません！さあどうなるブラッド・バレット？連勝記録を守れるか！？この試練に勝てるのか

あ！？】

と、その時だった。ジョンのバイクが突然傾くと、転倒した。コースの端だったから引かれる事は無かったが、これでブラッドは完全に彼との間を開いた。

【なんと！ジョン・ステイブンス転倒！ブラッド・バレットがリード！ここでチェッカーフラッグが振られます！ブラッド・バレット、連勝記録を伸ばしました！流石は試練に勝つ男ブラッド・バレット！どんな試練にも勝って見せたあ！】

その少し後のことだった。

『私はやっていません！』

ブラッドがいらだたしげに声を上げる。相手は監督だった。

『誓います！正々堂々勝ったんです！』

と、監督は目の前のラップトップPCの画面をブラッドに向けた。そこでは、ブラッドのジャケットを着た男が、ジョンのバイクをいじくりまわしていた。

『じゃあこれは？ジョンがコントロールを失っていないければ、お前は2位だった。』

『私じゃない！』

『お前のジャケットだな。ジョンは死ぬところだった。』

ブラッドには本当に身に覚えがなかった。認めることなど出来るわけがない。

『ジョーは親友です。傷付けることなどあり得ない！』

『勝ちにこだわるのはいい。だが今回ばかりはやり過ぎだ。トロフィーはやれない。賞金も返してもらおう。ジョーは訴えないと言っているが、俺は委員会に報告する。お前のレーサー人生は終わりだ。』

『ポール、そんな……』

ブラッドは認められなかった。病気や負傷ならまだ許容もできるが、こんな形で人生を絶たれるなどまっぴらごめんだった。

『私はやってません！』

『残念だよ。』

ポール監督は、もう考えを変える様子など無かった。

『……これは試練だ。必ず勝つ。』

それだけ言い、賞金の小切手をポール監督の眼前に叩きつけると、そのプレ・ハブの小屋を後にした。

と、外に出たブラッドは、薄代々のコートを着た男が自分に向かって、外に出たブラッドは、薄代々のコートを着た男が自分に向かっているのに気づいた。

『今日は試練に勝ったかねブラッドくん？』

『サインはお断りだ。』

『何があったか聞いたよ。すべて失ったって？』

その言葉を聞いた瞬間、ブラッドの眼の色ががらりと変わった。

『何で知ってる！？』

『それはどうでもいい。重要なのは、これだ。』

そう言つと、その男は手にした防止の内側をブラッドに向けた。

そこに合った携帯ビジフォンには、先ほど見た、バイクをいじる男が映っていた。と、その男が振り返る。見知らぬ顔だった。

『私じゃない……これを何処で？』

男は答えなかった。

『さては嵌めたな……ビデオをよこせ！』

ブラッドが詰め寄ると、男は帽子を胸につけ、またブラッドに見せた。その中には何もなかった。ブラッドは、何となくこの男の目的を予想した。

『そうか……幾ら欲しい？』

『いやいやいや、金が欲しい訳じゃない。私はチャーリー・フェザーズ。バトルクラブ選手権大会に出てほしいんだ。ルールも、リン

グも、レフェリーもなしだ。優勝したら、ビデオを渡す。負けたら……おっと、負けるのは嫌いだったな。』

ブラッドは明らかにいら立っていた。

『私はレーサーだ。格闘家じゃない。』

『レーサーに返り咲く条件だ。』

『……分かった。ならまずあんたと格闘だ。』

『おおっと。』

と、その時だった。そこに止めてあった車の向こうから、緑のアーマーに身を包んだ装甲車の様な男が、空中前転宙返りをして飛びこんできた。トルクだ。

『……こけおどした。』

『まあ見ていたまえ。』

レッドミニオンが2体、現れた。トルクは軽く手首にスナップをつけ、レッドミニオンに向かっていった。

そこからは、一方的な展開だった。首を掴まれ、プレ・ハブに叩きつけられた1体が消滅し、飛びこんできたもう1体がエネルギー弾をゼロ距離で叩きこまれて消えていく。

『はッはッは、何度見ても楽しいよ。とにかく、大会に出る。あのパワーで戦え。』

『レーサーに戻るのか?』

ブラッドの意思が、わずかに変わってきているのが読み取れた。

『……戦え。優勝しろ。』

そして、チャーリーと名乗った男は、ポケットからあるものを取り出した。

カードデッキだった。サイの様なエンブレムが刻まれたデッキが、共鳴するような音を立てつつ白っぽい光を放つ。

『……勝てるかね?』

チャーリー　ゼイビアックスはそう、問いかけた。

その瞬間、彼は『仮面ライダーラスト』となっていた……

リトルウイング事務所。クノーが見た限り、クラウチは少し焦っていた。

「エミリアは無事だ。あいつに何があったって言うんだ？ なにもある訳がねえ……よし、あと1時間だけ待って警察を呼ぼう。」

「……警察じゃ、役に立たないかもな。」

レンは、アレンとエミリアに担がれてアレンの部屋に入っていた。  
「ソファーへ。」

「……ありがとう。」

レンは二人に助けられ、ソファーに身を預ける。

「お前は命の恩人だよ。俺は疑ったのに。」

「お前は悪くないさ。ゼイビックスとトルクが共謀してお前を嵌めたんだ。」

「お父さんがどうこう、なんて言われたら、誰だって頭がいっぱいになるよ。元気だしなってアレン。」

レンとエミリアが、アレンにはげますような声をかけた。



「そうだけど…俺に人を見る目が無かったんだよ。あいつは最低な奴だ。……そう言えば、何でゼイビアックスはライダーを騙してるんだ？だって、凶悪な犯罪者でも探してデッキを手渡せば……その方が手っ取り早いじゃないか。」

アレンが問うたのは、彼が一番気になっていた事だった。

「そう言えばそうよ。何であの人たちなの？」

その時、レンは立ち上がって、1枚の写真を取り出し、二人に手渡した。二つ折りにされたその写真を開くと、そこに映っていたのは、レンと、そしてアレンとしか思えない若い男だった。笑顔を浮かべ、カメラに向いている。

「これが理由だ。」

「どういう事？これっていつ撮ったの！？」

「……覚えがない。」

「当然だ。映っているのはアダム。前のドラゴンナイトだ。」

レンは、そのアダムとか言う男を指さした。

「アレンに瓜二つじゃん！」

「ホントだ…でもこういう事なんだよ！？」

レンは二人から写真を受け取り、話し始めた。

「このグラールとベントラは、ちょうど鏡映しの関係なんだ。カードデッキは特定のDNAで作動する。同じDNAを持った人間が、グラールとベントラに1人ずついる。」

「…つまり、ゼイビアックスは変身する人を好き勝手に選べないってことだろ？」

「そうだ。」

「…だから人間の欲望を利用するのね。相手によって姿を使い分けて。そして、罠にかける。」

と、アレンが割って入る。

「でもそれだと変じゃないか？俺はデッキをもらってない。ウチの中で拾った。ゼイビアックスは関係ない。」

「無いわけがない。…絶対に。」

とその時だった。例の気配が、3人を襲った。レンは行こうとしたが、どうやらけがは思ったより重いようだ。

「無理するな！」

「……いいや……」

「俺が行く。お前はここで待ってろ。」

「……なら、任せた。」

ブラッドは、不意に鳴り響いたビジフォンを取った。

「チャーリー、最高だな、バトルクラブは。最初は乗り気じゃなかったが、ハマったよ。」

「観客も喜んでるさ。」

「次の試合はいつだ？」

と、ブラッドは、アレンと同じものを感じ取った。

「……さあ試合だ。別のライダーと対戦してくる。」

「オイオイオイ、相手はウイングナイトだ！チケットはもう完売してるんだぞ？」

しかし、ブラッドはヘルメットをかぶると相棒に跨り、アクセルを開いて走り抜けて行った。

「ブラッド！？……クソつ、人間どもは初めて作られた時から進化していないのか？」

アレンの相手は、レッドミニオンだった。しかし今回ののはかなり強い。おそらく、かなりの場数を踏んでいるのだろう。レッドミニオンが、背中のブーメランを振りかざし、アレンに切りつける。何とかかわしたが、すぐに次の一撃が襲いかかる。

が、その一撃は、届かなかった。いきなり腕を掴まれたレッドミニオンが、横に押し倒されたからだ。

そこにいたのは、トラストに変身したブラッドだった。

「ふつ、ライダーがいるのにモンスターの相手とはな。それでは選手権を勝ち進めないぞ。ゴングはもう既に鳴っている。」

「え？選手権って何だよ？」

とその時だった。倒れたレッドミニオンが、身を起こしていた。

「チツ、待つてろ、こいつは私が始末する。」

ブラッドはデッキからカードを引き抜き、メタルバイザーに投げ入れて挿入した。  
ベントイン

『STRIKE VENT』

飛来したメタルバイザーがブラッドの腕に装着され、好かれたレッドミニオンが窓を突き破って吹っ飛んでいく。

「オイ！逃げたぞ！追わないと……」

「構うな。私はバトルクラブ選手権の選手だ。モンスターなど知らん。」

「どうかしてる！あいつらを何とかしないと罪のない人がまたさらわれるぞ！」

それだけ言い残して走り去ったアレンを、ブラッドはじっと見て

いた。

「……何なんだ？」

ビルの非常階段、レッドミニオンとアレンはそこで戦っていた。

が、今はアレンが優勢だった。ドラグソードが何度も閃き、レッドミニオンが踊り場に吹っ飛ぶ。アレンはそれを見るや、カードを引き抜いて挿入した。

『FINAL VENT』

空中に飛び上がってキックの体勢を取ったアレンを、ドラグレッダーが炎で押す。レッドミニオンは飛び退いて逃げようとしたが、間に合わなかった。ドラゴンライダーキックをまともに喰らい、その体が碎け散り、浮上したモンスターのエネルギーをドラグレッダーが吸収する。

「ハア、いいじゃん。俺一人の方が向いてるかも。」

ゼイビアックスの要塞では、ゼイビアックスがいら立ちをあらわにしてドリユーに話していた。

「大失態の意味が分かるかねドリユー君！？君はキャモをベントし、ドラゴンナイトまで狙った！」

「事故です！」

「止める！言い訳は聞きたくない。キャモの事は見なかった事にしてやる、小物だったしな。だが、ウイングナイトを倒すまで、ドラゴンナイトには手を出すな！」

「どうして俺を信じてくれないんです！作戦のうちです！ドラゴンナイトを利用してウイングナイトを惑わしベントする。その手筈で

した。なのにキヤモを送り込むなんてめちゃくちゃだ！ひっかきまわしたのはあなたですからね！」

「……確かに。キヤモを送り込む前に君がしくじるのを見届けるべきだった。」

「しくじりません！」

「だいいいがな。私は君に目をかけてやっている。だが、もししくじれば、代わりの人間は山ほどいる。」

「俺はしくじりません！」

「なら、行つて来い。仕事のじゃまだ。」

ドリュウは去つていった。と、その陰から、あるライダーが出てきた。暗闇に隠れ、その姿ははっきりしない。

「見ていたな？」

「ハイ、將軍。」

「分かっているな？」

「ハイ。奴を監視させます。」

エミリアがリトルウイング飛び込んだ時、そこにいた皆が驚いた。「エミリア！お前ケータイ切っただろ！心配して何回電話したと思つてやがる！」

「ゴメン！アレンが大変な事になったから切るしかないと思つて……」クラウチは小さくため息をついた。

「ハア、もういい。言え、お前は無事だつて。そして反省してます

とな。」

「ゴメンおっさん。あたしは無事よ。とっても反省してる。」  
「よし、もう行け。」

エミリアは、自分の部屋に行くところで、見覚えのある人影を見た。黄色基調の民族衣装に身を包み、バンダナを締めている…

「ユート!？」

「よお、エミリア。今、話せるか? 出来ればアレン達も呼んでほしい。見せたいものがあるんだ。」

「え? あ、うん。デ・マエでも取ろうか?」

「僕が買ってくるよ。お前さえよかったら。」

未確認疾患センターに、アレンは訪れていた。フランクの病室に入ると、彼は車いすに座ってこっちを見ていた。

「父さん、元気か?」

が、フランクは答えなかった。

「…ん……。一つ分かったと思うと、別の謎が出てくる。カードデツキを俺に渡したのは父さん? ゼイビックス? わけがわかんねえよ…レンは治療法は無いって言うし…」

と、フランクがこちらを向いた。

「治療法はある、アレン。」

その声は少し、響くような感じだった。幻か何かかもしれない。

「お前は思い違いをしてるんだ。」

「!?!? それってどういう事だよ!?!?」

が、フランクは、再び黙りこんでいた。

と、いきなりアレンのビジフォンの着メロが鳴り響いた。

「あ、もしもし?」

エミリアだった。

『もしもしアレン? ユートが帰ってきたんだけど、あんたを呼んでる。レンも一緒に読んで、あたしの部屋に来て。』

「あ、ああ...」

アレンは、フランクに言葉をかけると、そこを去った。

「また来るよ。治療法は必ず見つけるから!」

アレンとレンは、エミリアの部屋に入った。と、レンが、ユートをみるやカードデッキを構えた。

「!?!? 何故お前がここにいる!?!?」

「何だ!?!?」

「裏切り者! よくもおめおめと俺の前に姿を現したな!」

アレンは、変身しようとするレンを何とかして取り押さえた。

「何なんだよ!?!? こいつはユート・ユニ・ユニカーズ! 俺の仲間だ!」

すると、レンは静まったようだ。

「……そうか、すまない。彼は、仮面ライダーストライクに瓜二つなんだ。」

と、エミリアが明らかに驚いた様子を見せた。アレンにしたってそつだ。

「え！？ストライクって、ベンタラを裏切ったって言う！？」

「じゃあ、ストライクとDNAが同じなのはユートなのか！？」

「3人とも、何の話をしてるんだ！」

「すまない、知り合いと間違えてな。」

それから、アレン、レン、エミリアの3人は、ユートと向き合っていた。エミリアの手には、線の様なバイザーをもった、エイの様なライダーの写真が握られていた。

「これは？」

「ここに来る途中、クライスってやつから受け取ったんだ。がーであんずのさーばーをはつくして拾った奴で、めーるで送れるしろものじゃないから、渡してくれって。」

「でもこれって…何だ？」

アレンには、これが何かは何となくしかわからなかった。

「がーであんずにも分からないって。ただ、これは全部、先月にグラマシー地区ってところで撮られたって。」

「グラマシー地区で？」

「彼が現れてから、このあたりから失踪者が出てないんだ。」  
すると、いきなりレンが口をはさんだ。

「『彼』じゃない、『彼女』だ。この仮面ライダー、『ステイング』は女性だ。」

エミリアは、少し顔を下げて呟いた。

「女の人のライダーもいたんだ……」

「とにかく、こいつはバケモノと戦ってるらしい。近いうちにまた情報が送られるかもって。あ、それと、もう一つ。」

ユートは腰につけたポーチから、何かを取り出した。

紫色のカードデッキだった。コブラのような紋章が刻まれている。



「ストライクのカードデッキ!?これを何処で!？」

ユートは語り始めた。

「デネブって名乗った男から貰ったんだ。これを使って、『ういんぐないと』に勝って、死んだお兄に認められるような男になりたくないか?って。でも、怪しかったから、そこから去ったふりをして陰から見ると、そいつが鎧みたいな姿になるのを見たんだ。なあ、あいつは何なんだ?」

説明を始めたのはエミリアだった。

「そいつはゼイビアクス将軍。グラールを狙ってる、宇宙人よ。アレンと、このレンは、仮面ライダーとしてゼイビアクスと戦ってるの。」

ユートは、少し黙ったが、また話した。

「……そうなのか……だったら、僕もそいつと戦うぞ!皆の力になりたいんだ!」

とその時、そこにいた全員の頭の中に、あの音が響き渡った。

「これは!？」

ユートが問いかける。

「入口が開いたんだ!今回は俺が行く!トラストがいるかもしれない!」

アレンはそう言って部屋を後にしていった。

アレンがついた時、トラストが鳥賊イカの様なモンスター、バクラーケンの触手に捕らえられて地面に叩きつけられたところだった。

「!!!待て!」

アレンは走り寄ってバクラーケンの頭をつかんだが、バクラーケンはすさまじい腕力で振り払うとアレンに触手を叩きつけた。ブラ

ツドと言えば、余裕の体でカードを抜いていた。

「案の定ライダーが現れたな。」

「おわあっ！」

『STRIKE VENT』

「任せろ。」

メタルホーンが閃き、バクラーケンに重い連撃が叩き込まれる。と、バクラーケンはいきなり触手を伸ばしてブラッドを捉え、引き寄せた。

「アアッ！……クッ！」

ブラッドはベルトに手を伸ばしてカードを抜き、メタルバイザー<sup>ベントイン</sup>に挿入した。

『FINAL VENT』

と、資材の山をブチまけて、サイの様なアドベントビースト、メタルガラスが突っ込み、バクラーケンに角を叩きつけて弾き飛ばす。お休みの時間だ！」

ブラッドはメタルガラスの前に来ると、飛びあがってその肩に乗り、メタルホーンを構える。メタルガラスはバクラーケンに向けて突進し、トラストな巨大な角の様に見えた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

必殺の一撃『ヘビープレッシャー』が炸裂し、バクラーケンが砕け散った。アレンは物陰から姿を見せた。

「スツゲエや。」

「邪魔ものはいなくなった。君と話がしたい。バトルクラブについて教える！君もチャリーの一味か！？」

「バトルクラブ！？チャリー！？何の事だよ！？」

「とぼけるな！この前、あのライダーに何をした！？」

ブラッドはいきなり襲ってきた。ふいに叩きこまれたメタルホーンを喰らい、アレンの体が大きくよろめく。続けての攻撃は身をかわして避けるが、ブラッドは敵意をむき出しにして迫ってきた。

「勘違いしてる！俺はあいつらの仲間じゃない！」

「話を逸らすな！」

ブラッドは親指を下に向け、飛びかかってきた。

## 第13話 バトルクラブ（後書き）

### 次回予告

敗者はベントされる事を知ったブラッドは、真実を知るためにゼイビアックスに詰め寄るが、弱みを握られた彼は戦うしかなかった。そして、ユートを仲間に加えたアレンは、ステイングと遭遇。しかし、ステイングはアレンを逮捕するといい、襲いかかってきた。次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『勝利か消滅か』

命をかけて、守りたいものがありますか？

第14話 勝利か消滅か（前書き）

エイさん登場！

## 第14話 勝利か消滅か

「うわぁっ！」

振り下ろされたメタルホーンをまともに喰らい、アレンは後ろに吹っ飛ばされた。

「バトルクラブなんてものは存在しない！全部作り話だ！」

「作り話…？あくまでシラを切るつもりか！？」

突き出されたメタルホーンを何とかかわすが、先ほどのダメージが大き過ぎた。アレンはブラッドに寄りかかる姿勢になり、膝をついた。

「…もう戦うのはヤメだ…」

「騙し討ちする手には乗らない。」

ブラッドはアレンを蹴って仰向けにし、右腕を大きく引いてメタルホーンを突きたてようとした。

「…だから話を聞いてくれって……ああもう！」

アレンがそのままの姿勢で変身を解く。するとブラッドもアーマーを外した。

「子供じゃないか…プロの集団と思ってた…」

「試合なんかじゃない、キャモを見ただろ！後失礼な事を言うな俺は20だ！」

いら立つアレンにブラッドは問いかけた。

「彼はどうなったんだ？」

「ベントされた。アドベント空間にね。」

「何空間？」

「二つの世界の狭間にある空間だ。一度ベントされたら、もう戻れない。」

「ウイングナイトが行ってた。戦争だった。」

「ああそうさ！だけど俺は敵じゃない！」

と、ブラッドはそこまで聞いてから背を向けて去ろうとした。

「何処へ行くんだ話は終わってない！」  
「チャーリーに会わないと。」

「レン！あのライダーに会った。」  
「が、レンは眠っていた。」

「……どうしてうまくいかないんだ……」  
とその時だった。

「アレン、何があった。」  
「フランクがいた。」

「！？……なあ、ゼイビックスにだまされてる人に真実を知らせたいのに……どうすればいい……？」

「アレン、それが真実とどうしていい切れる？」  
アレンは少しレンの方を振り返った。と、前を向いた時、もうフランクの姿は無かった。

ブラッドは、携帯にさっきから何度もかけていた。

「チャーリー頼むから電話に出てくれ。」

仕方がないので、留守電を残しておく。

「チャーリー、ブラッドだ。電話が欲しい。」

とその時、ブラッドの背後から声がかけられた。

「ブラッド・バレットだな。」

振り返ると、そこにいたのはドリユーだった。口笛を少し吹きながら、持っていたトルクのデッキを見せる。

「バズーカ砲の奴だな？」

「仮面ライダートルクでもいい。なあ、ゼイビアックスはお前に何て言って近づいた？当てるやろうか。ウイングナイトを倒せば、どん底から助けてやるって言ったんだろ？」

「ゼイビアックス？」

「こいつをくれた奴だ。」

ドリユーは自分のデッキを見せた。

「チャーリー・フェザースか！でもどうして私なんだ！？ウイングナイトになんの恨みが…」

「そんなのは関係ない。いいか？俺達がゼイビアックスを倒せば、戦争は終わる。お前はキャリアを取り戻し、俺は人生を取り戻す。」

「私はレーサーに戻りたいだけだ。」

「出来るさ。一緒にウイングナイトとゼイビアックスを倒そう。」

「…？ウイングナイトを？君たちは行ってる事がバラバラだ。もうおかしくなりそうだ！」

そして、ブラッドはドリユーのもとを去っていった。

「オイ！ぶっちゃけて話してやってんだぞ！一人じゃ棺桶から足を引っこ抜けねえぞ！ベントされたいのか！？」



「やった見つけた！ユートが伝えてくれた情報は本当だったのね！」  
エミリアは、パソコンの画面に映し出された新聞の写真を見ていた。そこには、仮面ライダーステイングの写真があった。記事の名前は、『謎の女戦士 グラマシー地区を守る』だった。

「何で出ないんだよ……」  
いら立つブラッドの後ろから、いきなり声がかかった。  
「もしもしブラッド君？」  
ゼイビアックスだった。  
「だましたな…お前はチャーリーじゃないし、バトルクラブなんてものも存在しない。」  
ゼイビアックスは、そこに会った失踪者のポスターを指さした。

「ご明察。すべての件で私は有罪だ。」

「うそつき野郎、ただで済むと思うな。ズタズタに引き裂いてやる。」

「そいつは無理だ。君が濡れ衣を晴らす証拠は私が持つてるこれしかない。」

「別の方法を考えるさ。」

「えらいぞ、人間は考える葦だったか。だが君に選択肢は二つしかない。」

すると、ゼイビックスはそこにあったベンチに飛び乗り、鎧の様な戦闘形態に変身した。

「ベントするかされるかだ！」

グラマシー地区の公園をうろついていたエミリアは、不意に例の気配を感じ取った。

「!?!」

と、すぐ近くに、突然ステイングが姿を現した。そして、そこにいた烏賊<sup>イカ</sup>のモンスター、ウィスクラーケンを鏡に蹴りこみ、自らもそこに飛び込んだ。エミリアはカメラを取り出して撮影したが、とれた画像を見ると、そこにステイングの姿は無かった。

「あつれ？遅かったかなあ…?」

と、すぐ近くにアレンが現れた。エミリアには気付かなかったらしく、デッキを構えて変身する。

「KAMEN RIDER!」

そして鏡に飛び込み、ウィスクラーケンに飛びかかった。  
「気をつけてアレン…危ない！」

少し離れたところ、バイクで走っていたレンの行く手を、ブラッドのマシンが塞いだ。

「さあ2回戦だ。」

「退け！キヤモがどうなったかみただろ！」

「ああ全部分かった。確かに私はゼイビアックスに嵌められた。だがそれでも、いいなりになるしかない。我々どちらかが消えるんだ。そしてそれはブラッド・バレットではない。」

「勝手にしろ！」

そして二人はデツキを向け合い、ベルトが形成される。

「K A M E N   R I D E R！」

スライド挿入されたデツキが回転し、二人の体にアーマーが形成される。そして、ウイングナイトとトラストは鏡の中に飛び込んで行った。

「こんなことはしたくなかったが、ほかに手が無い！」

「言い訳はするな！」

「ブラッド・バレットは試練に勝つ！」

ダークバイザーを構えたレンに斬られ、ブラッドの体が高架から

転落する。レンはそこに降り立ってダークバイザーを開き、カードを抜いて挿入した。

ベントイン

『SWORD VENT』

「行くぞ！」

レンはブラッドに斬りつけ、ブラッドは刀身を掴んでレンを押し戻そうとする。

「来い！」

「調子に乗るな！」

レンが斬りつけるが、ブラッドは素早くカードを抜いてメタルバイザーに挿入した。

ベントイン

『STRIKE VENT』

召喚されたメタルホーンで、ウイングランサーを受け止め、返す一撃でレンの体を吹っ飛ばす。

アレン達の方の戦いも、熾烈を極めていた。ウィスクラーケンは丸腰だったバクラーケンと違い槍で武装している。その攻撃を何とかかわし、飛びあがって壁を蹴るとウィスクラーケンに勢いをつけた拳を叩き込む。よろめいたウィスクラーケンに、アレンとステイングが蹴りを入れた。

「行くぞ！下がってる！」

『FINAL VENT』

ドラグレッダーが飛来し、アレンが飛びあがる。そして、ドラゴンライダーキックが炸裂し、ウィスクラーケンは碎け散った。

「ハア…ハア…ハア…お前は誰だ？」

「…私は仮面ライダーステイングだ。」

声から察するに、20代後半くらいの女性だ。

「ハア、ようやくまともなライダーに会えたよ。」

と、その時だった。

「パルム政府、グラール教団、モトウブローグス連合…三惑星最高機関の命により、貴方を逮捕する！」

「ええ？なんだって？」

「ハアッ！」

「あ、オイちよつと待てよ！」

## 第14話 勝利か消滅か（後書き）

### 次回予告

いきなり襲いかかってきたステイングの正体。それはナギサだった。変声機とステイングのアーマーで正体をごまかし、今まで戦っていたのだった。アレン達は説得しようとするが、レンがエイリアンだと思い込んでいるナギサは、考えを変えようとはしなかった……

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダーステイング』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第15話 仮面ライダーステイング

いきなり襲いかかってきたステイングの一撃を、アレンはかわしきれなかった。突き出された拳をともに喰らい、盛大に体勢を崩す。

「のわあっ!」

ステイングはその隙にカードをデッキから抜き、左腕に取り付けた盾形召喚機エビルバイザーに挿入する。

『S W I N G V E N T 』

エイの様なモンスターが飛来し、ステイングの手の中に大型の鞭、エビルウィップが飛びこむ。それを振って地面に叩きつけると、ステイングは飛びかかってきた。

「ハア!」

「ちよつと待てて!」

アレンも素早くカードを抜いて、ドラグバイザーに挿入した。

『G U A R D V E N T 』

2枚のドラグシールドが現れ、エビルウィップの一撃を何とかしのぐ。

「ああもう!まだるツこいなあ!」

そこから繰り出される攻撃をかわし、後ろに飛びのいて距離を取ると、ドラグシールドを捨ててアレンは変身を解いた。と、アレンはステイングがわずかに動揺しているのに気づいた。

「……アレン?」

「え?」

ステイングが変身を解く。ライトレッドのリングが現れ、アーマーとともに消滅すると、そこに立っていたのはナギサだった。

「ナギサ!?!」

「驚いているのはこっちだ。なぜエイリアンに味方している!」

どうやら、ナギサはレンがエイリアンだと吹き込まれたらしい。

「…そうか。ナギサ、お前は騙されてる！」

「…いや、騙されているのは貴方の方だ。ウイングナイトはグラールを狙う者だ！」

ナギサを説得するのは、どうやらそう簡単ではなさそうだ。

「…とりあえず、話してくれないか。お前が、ライダーになった時の事を。」

「ああ…」

ナギサは語り始めた…

ナギサはレリクスにいた。ワイナールと、誕生日には必ず来よう



と約束していたあのレリクスである。

『ワイナール、おかげさまで私は元気にやってるよ。』

『近況報告かねナギサ君？』

『誰だ！？』

ナギサが振り向いた先には、スーツとネクタイの男がいた。

『サイモンズ捜査官。太陽系警察の者だ。君はナギサ君だね？』

サイモンズと名乗った男は警察手帳を見せた。

『そうだ。』

『単刀直入に言おう、君の力が必要なのだ。』

『どういう事だ？』

サイモンズは、懐からある物を取り出した。

ライトレッドのカードデッキだった。ナギサが手に取ると同時に白っぽい光を放つ。

『今、このグラールは異星人による侵略を受けている。君の仲間を想う心と、このカードデッキがあれば、奴らを滅ぼせる。』

『何故私なんだ？グラール銃見れば、私より強い者など掃いて捨てるほどいるだろうに。』

『我々が調査を行ったところ、適合率が最も高いのが君だったんだ。……友達を……ワイナール君が繋いでくれたグラールを……守りたくはないかね？』

『！？何故ワイナールの事を知っている！』

ナギサはナノトランサーから愛用の剣、スティールハーツを取り出してサイモンズの首筋につきつけた。

『こちらにはこちらの伝手があるのでな。グラールで起こった事の情報の大概は我々のもとに来る。それよりも、聞きたいのは君の答えだ。普段の生活に戻るか……友達を守るか。』

ナギサは、わずかに顔を下ろして、考えた。

『……分かった。要求は？』

『任務内容はすぐにこちらから伝える。……頼んだぞ。』

サイモンズ　ゼイビアクスは、期待しているような表情をし

て見せた。

『大切な人を守れるならそれは私の誇りだ。』

ナギサが決めた覚悟、それが彼女を『仮面ライダーステイニング』  
にしていた…

「なるほどな…」

アレンは少し考えると、急にナギサの二の腕をつかんだ。

「行くぞナギサ！レンに会おう！」

「あ、ちよつと待て引っ張るな！」

その頃レンは、かなり一方的にブラッドを圧倒していた。続けざまにウイングランサーで斬撃を繰り出してメタルホーンを吹き飛ばし、更に一閃させてブラッドの体を弾き飛ばす。

「グアアッ！」

そしてレンはウイングランサーを倒れたブラッドの首に突き付け、ゆっくりと切っ先を引いた。

が、レンは止めを刺さなかった。刺せなかった。槍を持つ手が、小刻みに震える。

「……くそっ！」

それだけいって、レンはその場を後にした。なぜ止めを刺さなかったのか、自分でも理解できなかった。

ゼイビアックスはその光景を要塞から監視していた。

「…厄介な事になったようだな。」

「せめて、変身者の事は伝えるべきじゃなかったんですか？」

ドリュウが相槌を打った瞬間、ゼイビアックスは彼に向き直った。

「一番の問題は、お前だ。…私を裏切ったな。」

「何を馬鹿な。何を証拠にそんな事？」

ゼイビアックスが、すぐ目の前のスクリーンに手をかざす。すると、そこに映し出されたのはブラッドに声をかけた時のドリュウだった。

『いいか？俺達がゼイビアックスを倒せば、戦争は終わる。』

ドリュウの表情は、一瞬で凍りついた。

「全部作戦のうちです！」

「悪い子には…お仕置きだ…」

ドリュウは後ろに駆けだし、手近の鏡に飛び込んだ。ゼイビアックスは通信機を取り出し、起動させて叫んだ。

「仮面ライダー…！…！…！始末しろ！」

『…ありがたき幸せ。』

アレンの部屋では、アレン、レン、ユート、ナギサの4人がいた。  
「もう一度言うぞ。おねえさんは騙されてるんだ！ゼイビアックス  
が姿形を変えて、おねえさんにカードデッキを渡したんだ！」

「ゼイビアックスの方こそエイリアンなんだ。」

「奴は俺の星の人々を拉致し、次にグラールまで乗っ取る気だ！俺  
は奴と戦ってる。だから奴は俺にライダーをぶつけてるんだ！」

が、3人でなにを言ってもナギサは聞かなかった。

「サイモンズが言っていた。エイリアンはうそを吹き込んでくると。  
私は騙されない。任務を遂行する！」

アレンは少しいらだって言った。

「聞けって！奴はお前の望みを巧みに利用している！お前はグラールを守りたいんだろ？」

「そうだ！」

「だからゼイビアクスはお前に力を与えて、お前にグラールを守ってる気にさせたんだ！」

「全部嘘っぱちだ！目を覚まさないのなら、私が力づくで……」

「落ち着けおねえさん！」

ナギサがカードデッキに手をかけた時だった。扉をノックする音、エミリアの声がした。

「アレン、いる？エミリアよ。話があるの開けて。」

アレンは玄関に歩み寄り、エミリアを招き入れた。

「ゴメンエミリア、今はちょっとまズい……」

とその時だった。ナギサがテーブルの天板に飛び込んで逃げだしたのだ。

「マズイ！」

どうやらナギサはフローダーで逃げ出したらしい。足跡が無いのではユートもお手上げた。

「別れて追いかけよう！」

「「わかった！」」

アレンとレンはバイクに跨り、ユートは勘を頼りに追いかけた。

ナギサを発見したのはレンだった。廃工場の様な所にいた。

「戦う気はない。」

「私がグラールの盾になる！」

「止めておけ。」

が、ナギサはまったく効かず、カードデッキを出してベルトにスライド挿入した。

「KAMEN RIDER！」

ステイングに変身したナギサに、レンが歩み寄る。

「俺達と戦おう。」

が、ナギサはレンの体をけっ飛ばした。レンはうまく着地し、デッキを取り出した。

「KAMEN RIDER！」

レンも変身すると、ナギサが飛びかかってきた。数回の拳の応酬の後、二人はベントラに飛び込んだ。

「ウイングナイトは、絶対に倒す！」

ベントラのスタジアム、アドベントサイクルが2台やってきて、ウイングナイトとステイングが降り立った。レンはすぐさまカードを挿入する。

『SWORD VENT』

するとナギサもカードを使った。

『COPY VENT』

ナギサの手に、レンと同じウイングランサーが飛び込んだ。それを振りかざして、二人は斬りあった。

思い斬撃を受け止めたレンの体が大きく後退する。そこに飛び込んだナギサがさらに刃を一閃し、レンの体に直接ダメージを叩き込んだ。

「グアア！」

「ここまでだ！」

ナギサはデツキからエイの紋章<sup>エンブレム</sup>が刻まれたカードを抜き、エビルバイザー<sup>ベントイン</sup>に挿入した。

『FINAL VENT』

飛来したエイのモンスター、エビルダイバーの背中にナギサが飛び乗り、そのまま突撃の体勢に入る。が、レンが抜いたカードを間一髪で使った。

『ATTACK VENT』

飛んできたダークウイングが、ナギサの体を弾き飛ばした。

「ぬあああ！」

吹っ飛んだナギサが地面に叩きつけられ、そこにウイングランサーを構えたレンが迫る。

「又・・・グう・・・」

が、レンはそこで変身を解き、去っていった。

「……クソ……」



ブラッドは、自分の家で最後のレースのビデオを見ていた。脳裏に、様々な光景がよみがえる。

お前のレーサー人生は終わりだ。

さては嵌めたな…

君が濡れ衣を晴らす証拠は私が持っているこれしかない。

(ブラッド・バレットは試練に勝つ…)

君が選べる選択肢は二つしかない。

ベントするかされるかだ！

勝てるかね？

（ブラッド・バレットは試練に勝つ…ブラッド・バレットは試練に勝つ…）

そして、ブラッドはトラストのカードデッキを手にとった。  
「…ブラッド・バレットは試練に勝つ。」

## 第15話 仮面ライダーステイニング（後書き）

### 次回予告

ブラッドは腹を括り、レンに再び戦いを挑む。ドリュウはアレンに助けを求めるが、アレンはそれを拒否し二人はぶつかり合った。

そしてナギサは、レンが自分に止めを刺さなかった事を考え疑問を募らせるのだった……

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『ハンティング』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第16話 ハンティング

エミリアは、アレンの部屋に飾ってある写真を見ていた。フランクと、幼いころのアレンと、彼の母と思しき女性が、カメラに向かって笑顔を浮かべている。と、アレンが戻ってきた。悔しげな表情を浮かべている。

「…ナギサに逃げられた。」

「でも、あのナギサが、ゼイビアックスに進んで手を貸してるなんて思えないよ。」

「分かってる。彼女はレンがエイリアンで、俺とユートはレンにだまされてると思ってるんだ。ゼイビアックスを完全に信じ切って、耳を貸してくれないんだ。ベントするのだけは、避けたい。」

「そんな…」

その時だった。二人の頭に共鳴のような音が響く。

「……きつとナギサだ。」

そう言って、アレンは部屋を後にした。

「アレン！待って！」

ナギサは、公園でサイモンズ      ゼイビアックスに電話をかけていた。

「サイモンズ…ナギサだ。」

『ウイングナイトとドラゴンナイト、それと、ストライクに接触できたようだな。』

「ああ。言った通り、たぶらかそうとしてきた。でも、ドラゴンナイトとストライクは、私の友達だったんだ…」

ナギサは、複雑な心境だった。倒すべき相手と思っていた3人のうち2人が、自分が守りたかった人だったのだ。

『そうか…彼らはグールより、富や権力を選んだんだ。奴らは人を巧みに操る。おそらく君には親しげにしてくるだろう。だが、ウイングナイト達に隙を見せたら、一巻の終わりだ。』

「ああ…理解している…」

『……ならばよろしい。』

「ああ……」

ナギサは電話を切り、少しうつむいた。

（でも私に止めを…刺さなかった。）

その時、彼女はアレンと同じものを感じ取った。

「行かないと…」

ナギサは素早く階段を駆け降りた。停めてあった自分のフロアダーに跨り、変声機の付いたヘッドギアをつけてヘルメットをかぶり、現場に向かう。

そこでは、女性が一人、三つ目の猿モンスター、デッドリマーに押さえつけられていた。

「キヤアアツ！ああああッ！」

とそこへ突っ込んできたアレンがストレートを見舞ってデッドリマーの体を弾き飛ばし、女性を庇った。

「大丈夫？」

「ええ……」

「さあ逃げて。」

女性が走り去ると、アレンはデッドリマーの方に向き直った。

「双眼鏡つてのはあるけど、お前のは3眼鏡？」

デッドリマーは背を向け、手近にあった窓に飛び込んだ。アレンもすぐに追いかける。

デッドリマーは近くのフェンスによじ登り、アレンの攻撃の手から逃れていた。が、すぐにアレンが飛びかかり、一人と1匹はもつれあつて向こう側の地面に着地する。そ、デッドリマーはいきなり背中から拳銃としか思えないものを取り出し、アレンの高周波エネルギー弾を浴びせ掛けた。何とかかわしたものの、デッドリマーは続けざまにエネルギー弾を放ち、接近する隙を与えない。アレンは狭い道に入った。デッドリマーもそれを追いかける。とそこに、電子音声が響く。

『S W O R D   V E N T 』

「こつちだ！」

デッドリマーの頭上にアレンがドラグソードを振りかざして飛びかかったが、デッドリマーは素早い動きでかわし、入り組んだ所に逃げ込むと、高台に上つてまた銃を構えた。

「またかよ！？」

打ちこまれたエネルギー弾を刀身で何とか防いだが、これでは接近すままならない。

「クッ！」

ひとしきり牽制射撃を終えて飛び降りたデッドリマーは、そこにアレンの姿が見当たらない事に気付いた。

アレンは近くの鉄骨につかまって姿を隠していた。後ろから飛びかかれたデッドリマーはもがいてアレンを振り払ったが、アレン

はすぐに間合いを詰めてサイドキックを見舞った。が、大したダメージにはなっていない。反撃の回し蹴りが炸裂し、アレンの体が地面を滑る。

「クッ…好き放題しやがって、いい加減にしろよ!」

『FINAL VENT』

アレンは素早くカードを読み込ませ、地面を蹴って高く飛び上がった。弁解するように手を出すデッドリマーに、ドラゴンライダーキックが容赦なく叩き込まれ、その体が粉々に吹っ飛んだ。

アレンはその場で変身を解いた。と、そこにあったパイプが1本、衝撃で外れた。

「あ、ごめん。」

シズルはリトルウイングに来ていた。近くにちょうどクノーがいる。

「クノーさん、エミリアはまだ戻ってきてないんですか?」

「まだだ。彼女に話でもあるのか?」

「彼女の趣味の事だ!のめり込み過ぎて完全におかしくなってる。鏡から出てきた仮面何とかの話と言い、モンスター騒ぎと言い、普通じゃない!」

すると、クノーが振り返った。

「普通でなければいけないのか?今まで普通じゃない人が世界を変

えてきたんだ。例えば、トムレイン博士とか。皆変わり者だ。エミリアだって今にきつと大物になるさ。」

「はあ……そもそもあなたに相談したのが間違いだったよ……」

シズルはため息をつく、その場を後にした。

ナギサを探してうろついていたアレンは、彼に向かって立っている、ドリュウを見た。懐のデッキに手を伸ばすアレンを、ドリュウは手を出して制する。

「戦う気はない！」

「へえ……俺が背中を向けるまで？」

「聞いてくれ。俺達には、ちょっとした誤解があつたようだ。」

「ちょっとした誤解？ふざけんな。ベントしようとしたくせに。もう騙されない。」

「ゼイビアックスに騙されてたんだ。ウィングナイトが悪いと聞かされてた。」

「信じると思うか？」

「……俺も、ゼイビアックスに追われてる。俺達が力をあわさなくちゃ奴は倒せない！」

アレンは少し頷いた。

「へえ、そう言う事か。自分がボスを出し抜くのにしくじったから、今更守ってくれって？断るね、身から出た錆だ。」

ドリュウはちよつとアレンの目をみると、懐に手を突っ込んだ。



「ああそうかい。言ってみただけだよ。敵は二人もいない、消えてもらう。」

「やっぱりな。」

そこに駆け付けたエミリアは、鏡の向こうで、マグナバイザーのエネルギー弾をかわして走り回るアレンの姿を見つけた。

『GUARD VENT』

2枚のドラグシールドを構え、アレンがエネルギー弾をしのぐ。

「どうした！それで終わりか！」

「今のはほんの小手調べさ。」

ドリュウはデッキからカードを抜き、マグナバイザーに挿入した。

『STRIKE VENT』

召喚されたギガホーンから、エネルギー弾が叩き込まれる。

「うわあっ！」

「へっへっへ。」

エミリアは、後ろから近づいてくる人間の気配に気づいた。

ナギサだった。近くにフローダーも停めてある。

「何する気！？」

ナギサは無言でエミリアの方を透かし、鏡を見る。そこでは、ドリュウがアレンを一方的に圧倒していた。

叩きつけられたギガホーンからエネルギー弾が発射され、アレンの体を大きく吹き飛ばす。

「サプライズ！」

続いてもう1発が、立ちあがりかけたアレンに叩きこまれた。

「ぐああっ！」

吹っ飛んで倒れたアレンは、地面にギガアーマーを据え、ギガラ

ンチャーの砲身をそこに乗せる、ドリュウを捉えた。

「ああ、今度はちよつと痛いぞ。」

ドリュウは余裕しゃくしゃくだった。

「アレンがエイリアンの味方だと本当に思う？」

「……いいや。」

「だったら、味方になってあげて。」

「何故味方と言える！」

ナギサはエミリアに詰め寄ったが、エミリアはひるまなかった。

「アイツはお父さんを助けただけなの。……本当のヒロインに、なつてよ……」

ドリュウがギガランチャーの狙いをつける前にアレンはカードを抜き、ドラグバイザーに挿入した。<sup>ベントイン</sup>

『STRIKE VENT』

飛来したドラグレッダーが、アレンの指示通り、ドリュウのいる方向に炎を吐く。ドリュウはギガランチャーを発射したが、炎に包まれて砲弾が爆発し、爆風をともに喰らって弾き飛ばされる。

「うああああアアアッ！」

煙が消えると、ドリュウはすでに逃げてそこにはいなかった。

「……あ……何処に行った？」

その頃、現場に向かうレンのゆく手を、またもやブラッドが阻んだ。

「俺達の対決は終わって無い。お前も腹を括ったか？」

「俺は使命を果たす。ライダーとしての使命を！」

「俺もだ。」

そして、二人はそれぞれのマシンで駆け出した。

ドリュウは変身を解き、離れた所まで走って逃げていた。よろめきながら走り続けたドリュウは近くのパイプに寄りかかり、口を開いた。

「…何でだよ…こんなはずじゃ…王になれる筈だったのに…どこでしくじった…」

彼の脳裏によみがえる記憶。それは、彼が、小物の詐欺師から王にまでのし上がるチャンスをつかんだ日の事だった…

少し大きい、倉庫の様な建物。ドリユーはそこにある椅子にすわり、すぐ前のテーブルに置いてある、『商売用』のちゃんな携帯ビジフォンを手に取りながら電話をかけていた。

『ああ、今まさに大ヒットの商品だ。…オイオイ乗り遅れてんなあ、ネットくらい見ろよ。…全世界で人気爆発だ。なんせこんな多機能なケータイ見た事無い。電話も、メールも、ネットも、メッセージングも、動画だって…』

が、その『商売用』ビジフォンは、開いた途端、蝶番が外れてカチャンと音を立てた。

『あ…トランシーバーにだってなるんだぜ。…見た事無いって？人氣がすごいのだ。どこのディーラーも血眼になって探してるが、いくら金を積んだからって市場に無いものは無い。けど俺は、特別ルートで倉庫いっぱい買い占めた。』

そう言って、ドリユーはすっからかんの倉庫を見た。

『お前はダチだから斡旋してやる。1万台買えよ。全部でそうだな…3千万メセタ。こんなうまい話2度とない…』

その時だった。一番近くの扉をガタガタとゆする音が聞こえた。  
『……ちよつとそのまま待つてくれ、秘書が呼んでるみたいだ。』  
そう言つてビジフォンを保留にしたドリユーは、ゆっくり、入口を見た。

ガーディアンズの制服としか思えないものを着た男が数人いるのを見た。

【ユニット75、直ちに現場に急行願います。】

【ユニット75、了解。】

【北側に回り込め。】

ドリユーは青ざめた顔で、『EXIT』と書かれたドアを見た。

『……ちよつと急用が出来ちまつたんで、細かい交渉ことはやめにしよう。とりあえず200万メセタ送金してくれ。もう1万代でも何万台でも送るからさ。それじゃアな、よろしく。』

電話を切るが早い、ドリユーは走り出した。素早く出口まで走り、扉を押しかけて自分のホイールバイクに跨りヘルメットをかぶる。が、その行く手を1台の車が阻んだ。

『クソっ！』

後部座席から、一人の男がやってきた。

ゼイビアックスだった。

『失礼、ドリユー君だね。』

『俺の名前はドリユーじゃない。誰かと間違えてるんじゃないか？』

『安心したまえ、ガーディアンズじゃない。実は、仕事の話を持ってきた。』

ゼイビアックスは襟を直しながら話を進めた。ドリユーはヘルメットを脱ぎ、ゼイビアックスの方を向いた。

『興味あるけど、今はちよつと都合が……』

『ほう。だったら、警察か、ガーディアンズでも呼ぶかな……』

ドリユーに、選択の自由は無いらしかった。ゼイビアックスは続ける。

『質問がある。君は人を意のままに操れると聞いたが、本当かね？』

『…報酬と、相談がある。』

『ある男たちを、戦うよう仕向けてほしい。成功したら、そうだな…君に世界をあげよう。』

『俺は砂漠で救命ボートを売れる。ちよろいもんさ。…だが世界？ちよつと話がでかすぎねえか？』

『んああ…分かりにくかったか、分かった。見せよう。私の力を。』  
ゼイビアクスは、車の車体に向かつてまっすぐ歩いた。と、黒光りする車体に、ゼイビアクスの体が吸い込まれるように消えた。そして、同じ場所から、スーツを着た腕が出てくる。その手にあった緑のカードデッキが、ドリユーに手渡されると同時に光と音を放つ。

『このデッキで…君は世界の王になれる…』

彼が、『仮面ライダートルク』となった時のことだった……

ドリユーは駆け出して行った。が、彼は、近くの捨てられたテレビの中から、彼を監視するライダーの視線に気づかなかった。

「……狩りの時間だ……」

そこからそう遠くないところ、光沢のある金属製の扉から出てきたアレンは、そのすぐ近くで、エミリアと、ナギサを見つけた。

「！？何してる！」  
が。

「心配はない。貴方の言った事を考えていたんだ。」  
ナギサはアレンを見返すと、穏やかな口調で話しかけた。

「……本当に？」

「うん。」

エミリアは、少し微笑んで返した。

その時、またもや気配がした。

「あそこよ！」

そこから数段あがったところに、レッドミニオンがいた。1体だけ、と言う事は、前に出くわしたのと同じ、それなりに強い奴なのだろう。

「……アレン、一緒に戦おうと言ったら？」

ナギサの言葉に、アレンは少し戸惑ったが、すぐに笑みを浮かべて返した。

「…あ…ああ！そうしよう！」

走り出した二人を、エミリアは静かに見送った。

「さあ…やっつけて。」

ベントラに2台のアドベントサイクルが走って来る。止まった車体から出てきたのは、変身したアレンとナギサだった。

「何処行った？」

「さあ。」

と、振り返ったアレンは、後ろにレッドミニオンがいるのに気づいた。

「後ろ！」

と、そのレッドミニオンは腕からワイヤーの様なものを伸ばして上の足場にくっつけると、ターザンよろしく飛んできた。

「あ…いや上だ！」

「アレン！ソードベントを頼む！」

「ああ！」

『SWORD VENT』

アレンがカードを挿入すると、ナギサもカードを使った。

『COPY VENT』

ナギサとアレンの手に、ドラグソードが飛び込む。ナギサが勇躍斬りかかったが、レッドミニオンはワイヤーを素早く縮めて上に上



がった。

「降りて私達と戦え！」

とその時、レッドミニオンが本当に降りてきた。振ってきたレッドミニオンをかわし、アレンが叫んだ。

「変な事言つなよ！」

「まさか本当に落ちてくるとは！」

レッドミニオンは背中に巨大手裏剣を出現させ、それを掴んで斬りかかってきた。二人は剣で防ぎ、カウンターを叩き込むが、レッドミニオンは身をかわして二人に順々に切りつけ、弾き飛ばした。続いて手裏剣を投げるが、それは何とかローリングしてかわす。

「危なかった……」

『STRIKE VENT』

アレンはカードを使い、ナギサもさつきと同じカードをエビルバ  
イザーに挿入した。<sup>ベントイン</sup>

『COPY VENT』

アレンの手にドラグクローが飛び込むと、ナギサの手にも同じものが装着された。

「……行くぜ。」

「……ああ。」

「……はアアアアア………でえやあッ！」

二人は同時にドラグクローを突き出し、ドラグレッダーはその数に合わせて二人分の炎を吐いた。そして、直撃を喰らったレッドミニオンが粉々に爆散した。

「ハア……やったな。」

「ああ。これからどうする？」

「ウイングナイトと、ユートに会いたい。私はどんな言葉より、貴方達の行動を信じる。」

「分かった。行こう。」

一方ユートは、ナギサを探してほうぼう走り回っていた。と、彼の目の前に、いきなりドリユーが飛び出した。

「おおっと！……お前、仮面ライダー・ストライクか？」

「だったらどうした。お前は誰だ。」

ドリユーは、持っていたカードデッキを出して見せた。

「……ドリユー・ランシング……アレンを騙した奴か！」

「聞けって！まずは話をしよう！」

「お前の話なんか聞かない！よくも僕の家族を騙したな……許さない……許さないぞ！このペテン師が！」

「言わせておけば……」

ドリユーとユートはそれぞれデッキを構えた。ドリユーのデッキからは緑の、ユートのデッキからは紫の電光が、それぞれの腰に伸び、ベルトを形作った。

「KAMEN RIDER！」

## 第16話 ハンティング（後書き）

### 次回予告

レンとブラッド、そしてユートとドリユーはそれぞれぶつかり合う。その場に駆け付けたアレンとナギサはレンに手を貸そうとするが、そこにドリユーのファイナルベントが叩き込まれる。しかし、そこでユートが予想もしなかった行動をとる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『クライス』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第17話 クライス（前書き）

今回は時間ないので短いです。

## 第17話 クライス

ベントラの工場で、レンとブラッドがアドベントサイクルから降り、お互いに向き合った。

「あの場で俺をベントしておくべきだったな。代償を払ってもらおう。」

ブラッドの言葉とともに二人がそれぞれのカードを挿入した。ベントイン

『SWORD VENT』

「…ブラッド・バレットは試練に勝つ。」

『STRIKE VENT』

そして、飛来したお互いに武器をかざしてお互いに突っ込んでいった。ウイングランサーが振り下ろされ、メタルホーンが重たい攻撃を繰り返す。

「フン！」

「くあっ！」

アレンとナギサ、そしてエミリアは、そこにつながる窓の前に来ていた。目の前で、レンとブラッドが激しい応酬を繰り返している。

「レンがいる……トラストも。」

「どうする？」

「任せろ、俺が話してくる。」

アレンは窓の前に立ち、デッキを構えた。エネルギーの流れが腰に伝わり、ベルトが形作られた。

「KAMEN RIDER！」

そして、ドラゴンナイトに変身したアレンは腕を下ろし、ナギサ

の方を見た。

「行くぞ。ナギサ、準備しろ。」

そして、窓にアレンが飛び込んだ直後、ナギサもカードデッキを取り出して窓の方に構えた。ライトレッドのエネルギー流がベルトを形成し、ナギサは掛け声とともにデッキをスライド挿入した。

「KAMRN RIDER！」

そして、ステイングとなったナギサはエミリアに法を向いて小さく頷くと、アレンを追って窓に入った。それを見て、エミリアは満足げにほほ笑んだ。

「いいチームになるよ。きつと。」

『CONFAIN VENT』

レンが装着したウイングウォールが、突然消滅した。ブラッドが新しいカードを使ったのだ。

「トリックを使うのはお前だけじゃない。行くぞ……ハアッ！」

と、突っ込んだブラッドの前に、アレンが割って入った

「止める！ゼイビアクスの思うつぼだ！」

「邪魔だ！」

ブラッドはメタルホーンをアレンに叩きつけた。腕で防いだが、ダメージをしのぎ切れずに横に倒れこむ。

「アレン！」

と、ブラッドの体に、コピーベントで複製されたウイングランサーが叩きつけられた。そして、ナギサも立ちはだかった。  
「フツ、3対1か。だがブラッド・バレットはもっと不利な試練にも勝ってきた！」

ドリユーとユートの戦いも熾烈さを増していた。マグナバイザーのエネルギー弾をユートがかわし、ローリングしてカードを抜くと、コブラの頭のような飾りが付いた杖型召喚機ベノバイザーに挿入した。  
ベントイン

『SWORD VENT』

螺旋状の刃を持った剣、ベノサーベルがユートの手に飛び込む。その刀身で光弾をしのぐと、横から一撃叩きつけてドリユーの体を吹っ飛ばした。

「…本当に騙し通せると思ってたのか？主人の裏をかいて。」

「まだやれるさ。お前らさえ倒せば!」

『SHOOT VENT』

召喚されたギガランチャーをドリユーが発射する。ユートは何とかかわしたが、爆風でわずかに体勢を崩した。が、すぐにベノサーベルを構えなおして向かって行った。

「ぬん!」

ブラッドが振り下ろしたメタルホーンは、レンの体をまっすぐ捉えた。ナギサはかわしてカードを抜き、エビルバイザーベントインに挿入した。

『FINAL VENT』

が、ブラッドはさっきと同じカードを使った。

『CONFAIN VENT』

飛来したエビルダイバーが、消滅した。

「何?」

「悪いがヒラメ女史、ファイナルベントは使わせない!ハアツ!」

「ぬあつ!」

ブラッドがジャンプからのショルダータックルを見舞い、角を叩きつけられたナギサの体が大きく吹っ飛んだ。



「どんな手を使っても、試練には勝つ！」

『FINAL VENT』

「ナギサ！」

「私がやる！」

「下がってろ！」

ブラッドのヘビープレッシャーが叩き込まれる。が、その行く先に、アレンが立ちふさがった。

『GUARD VENT』

「グアアッ！」

勢いで弾き飛ばされたアレンに、レンとナギサが駆け寄った。

「大丈夫か？」

「ああ、何とか。……もう十分だ！ゼイビアックスのために戦って何になる！」

「ゼイビアックスは関係ない！もうこれはブラッド・バレットに闘いだ！」

アレンはブラッドの攻撃をかわし、その体を後ろから抑え込んだ。

「離せ！」

「いいぞアレン！」

クノーは、リトルウイングの事務所からエミリアに電話をかけた。

「エミリア、遅刻だ。」

「ああ…ゴメンクノーさん、今忙しくて。」

「……また仮面ライダーを追ってるのか。」

「すぐに行くよ！そっちに着いたら全部話すから。」

「ああ。でも急いでくれ。クラウチが騒いでる。」

「ええ。有難う。」

エミリアが電話を切った。そしてクノーは、ちょうど来た顧客の方へ向かった。

ユートは、すぐ後ろでアレンら3人とブラッドが戦っているのを見た。ナギサが、ユートの存在に気付く。

「ユート！」

「トルクはこっちで相手する！おねえさん達はトラストを何とかしてくれ！」

「ああ！」

ドリユーは落ち着いてカードを抜いた。

「ハッ、フルハウスだな。」

『ATTACK VENT』

地面から、生える様にマグナギガが現れた。

「だが、俺には最強のエースがいる。全員片付けてゼイビアックスの右腕に返り咲いてやる。」

『FINAL VENT』

マグナギガの全身に火器が展開する。ユートがアレン達の所へ飛び込んだ直後、その前身の火器が火を噴き、大爆発が巻き起こった。

「うああああッ！」

「又オオオオッ！」

「グうッ！」

爆発が収まった直後、そりユーは笑いながら去っていった。

「ッハッハッハ！ちよつとやりすぎたかな？まいっか。」

アレンは、ブラッドが立っていたのを見た。が、どこか不自然だと、ブラッドが横に倒れ込んだ。後ろで首筋を掴んでいたユートが、彼を離れたのだ。

「ハッ、ありがとう。盾になってくれて。」

口調が明らかに変わっている。何かがおかしい。何かが。

「……ユート？」

「ぐッ…貴様…何をする…」

「残念だよブラッドくん。やっぱり君は選手失格だつてさ。」

ユートが、楽しむような口調でブラッドに声をかける。それは、

アレン達が知っているユートではなかった。

「……失格など、するかあ！」

ブラッドは怒りにまかせてユートに殴りかかったが、ユートは素早く懷に潜り込むとベノバイザーの剣のように細くなった先端を棍棒の様に叩きつけた。

「ハアッ！」

「グアア！」

吹っ飛ばされたブラッドが、壁に叩きつけられる。

「又ゲウッ！」

それを見て、ユートはカードを抜いた。それに刻まれていたのはコブラの紋章。エンブレム

「フッ。お前の悲鳴を聞いてみたい……」

『FINAL VENT』

後ろから、コブラの様なアドベントビースト、ベノスネーカーがのたうちながらやってきた。

「さあ、祭りの時間だ！」

ユートは両手を広げて助走をつけると飛びあがった。

「フンッ！」

空中でトンボを切ると、ベノスネーカーが鎌首をもたげる。

「ぐッ…マズイ……」

「でえやああああああああッ！」

ユートが、ベノスネーカーの毒液に押される形でブラッドの方の突っ込みながら、バタ足の様に足を動かした。そして、連続キックがブラッドの体続けざまに叩き込まれる。

「オおおッ！うう……ああああああッ！」

爆発が起こり、ブラッドがいた場所が炎に包まれる。そして、後ろに弾き飛ばされたブラッドの体が、削られるように消えていく。

「……ッ…俺は負けない…いつでも勝つ…ブラッド・バレットは…試練に…勝つんだ……あ…ブラ……ああ……」

ブラッドは消えた。最後までおのれの負けを認めず、消えた。

「ッはッはッはッはッは！ブラッド・バレットの華麗なフィニッシュでーす！」

「…どうしてだユート、説得すれば！」

アレンが怒りをあらわにして叫ぶと、ユートが酷薄な口調で答えた。

「お前達に協力したかもね。だからベントしたんだよ。ゼイビアックスのために。」

「どういう事だ…貴方は…まさか、裏切ったのか！？このグラーを！」

「ハア？裏切った？最初から君たちの側になんか付いちやいないよ。」

「とその時、レンが口を開く。

「…なるほどな。いつからだ。いつから芝居を打っていた。」

「そうだな…聖棺とやらが消えてから、3週間後くらいかな。」

「！？どういう事だよレン！」

「まだ分からないのか。こいつはユートじゃない。名前はクライス・ベントラのストライクだ。」

「そうだよ大正解。君達には、ハッカーのクライスって言った方が分かりやすいね。」

「…！エミリアにモンスターやライダーの情報をリークしてたやつだ！」

「そうゆう事。あれは保険だよ。ユートじゃないってばれたときのまさかレンがいるなんて想定外だったけどね。君達の内部事情は大体分かったから、こうして正体を出したってわけさ。今まで誰かが見てるか持つて思うと一人の時でも要塞の外じゃおちおち素も出せやしなかったから大変だったよ。それじゃあね。君たちは後のお楽しみに取っておくよ。はッはッはッは！」

ユート　クライスは、鏡に入っていなくなった。アレンは、ただ見ていることしかできなかった。

## 第17話 クライス（後書き）

### 次回予告

正体をあらわにしたクライスは、ドリュウをベントすべく戦いを挑む。そして、欺き、騙し続けたドリュウはついに…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『悪魔の約束』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第18話 悪魔の約束（前書き）

今回は戦闘の展開に結構オリジナル入ってます。

## 第18話 悪魔の約束

アレン、レン、ナギサの3人は、工場のすぐ外にいた。と、ナギサが唐突に口を開いた。

「トラストは……どうなったんだ？何処に行った？」

レンが口を開きかけたが、答えたのはアレンだった。

「ベントされたんだ。」

「？」

「転送されたってことだ。アドベント空間だよ。二つの世界に狭間にある空間で、一度そこに送られると、もう2度と出られない。」

「……私も、危うくそうなるところだったのか……」

ナギサは少しうつむいた。が、そこにアレンが声をかけた。

「でも、俺が守ったんだ。」

「……ああ……そうだな。ありがとう。」

「礼なんていらねえよ。」

「フツ、そうだな。……私達は仲間だからな。」

ナギサは二人に向き直った。

「仲間じゃないさ。」

レンが、突然言った。

「………え？」

「……友達だろ？」

レンが、笑いかけた。ナギサは少し固まっていたが、すぐに微笑み返した。

「……ああ。友達だ。」

レンが右手を差し出し、ナギサもその手を握った。

「ブツ、友達つて。似合わねえなレン。」

「ハハッ、悪かったな。」

レンは、ナギサと、近くに歩み寄ったアレンの肩を軽く叩いた。  
「アレン、レン、これからどうする？」



「飯でも食いに行くか？」

「良いねえ。」

3人はそのまま、お互いに笑いあいながら歩き去っていった。

一方ドリユーは、そこから少し離れた所で壁にもたれかかっていた。体の節々が、少しばかり痛んでいた。どうやら、軽傷だと思っていたのは間違いだったようだ。

「畜生……」

とその時だった。

「みーつけた。ハハハッ。」

ストライク クライスがいた。ベノバイザーを引っ提げ、首をひねってドリユーに目を向けた。

「ガキ？ いや……なんか違うな……」

「ガキなんて失礼だな。これでもベントラではかなり強かったんだよ。ま、今もだけどね。」

ドリユーは後ずさった。どうやら、正体に気付いたらしい。

「クッ！」

ドリユーは後ろを向いて走り出した。クライスもベノバイザーの剣先を地面に引きずって後を追う。

「アハハハハッ！ やっぱこうでなくちゃ！」

が、立ち入り禁止のロープが張られているところでドリユーは立ち止った。

「何だもう終わりなの子牛ちゃん？ ちゃんと逃げてくれよハンティングがつまらない。」

「……逃げる？ちよつとしたウォーミングアップだよ。……勝負だ！」  
ドリユーはデッキを構えた。

ベントラに、2台のアドベントサイクルが入ってきた。そこに乗っていたのはドリユーとクライス。

「けりをつけるよ。」

「ああ……」

二人ともが、カードを抜いて召喚機に挿入した。<sup>ベントイン</sup>

『SWORD VENT』

『STRIKE VENT』

クライスの手にベノバイザーが飛び込み、ドリユーの右腕にメタルホーンがセットされる。

先に飛びかかったのはドリユーの方だった。メタルホーンを振り回して襲いかかるが、クライスは慣れた様子でそのすべてをかわすとドリユーに1撃叩き込んだ。

「グアアッ！」

よろめいたドリユーに、クライスが余裕の体で声をかける。

「君が悪いのさ。主君を裏切ろうなんて考えるからさ。」

クライスは酷薄な口調だった。ユートと同じ声で話している事が、よけいに不気味だった。

「他人の事が言えたタチか？」

「何とでもいいなよ。さあ遊ぼうよ。もつとだ。もつと感じさせてくれ！」

クライスはベノバイザーを開き、さらにカードを挿入する。<sup>ペントイン</sup>

『ATTACK VENT』

突然、後ろからベノスネーカーがのたくりながらやってきた。吐きかけられた毒液を何とかかわし、ドリュウも新たにカードを使った。

『LAUNCH VENT』

「うわっ!？」

「へっへっへ、ザマア見る。」

ドリュウが、召喚されたギガキャノンでクライスを撃つたのだ。

「甘いね。」

『STEEL VENT』

突然、ドリュウの方からギガキャノンが消失した。見ると、クライスの方にギガキャノンが装着されている。

「アッハッハ！喰らいなよ！」

続けざまに叩き込まれるエネルギー弾を何とかかわし、ドリュウは横に転がって新しいカードを使う。

『ATTACK VENT』

「無駄だつて！」

『FINAL VENT』

クライスはコブラの紋章が描かれたカードを使い、トラストの時と同じように空中でトンボを切つてドリュウに突っ込んだ。が、ほぼ同時に現れたマグナギガが、突然その腕でクライスを弾き飛ばした。

「うわっ!」

「ザマアねえな。」

「準備運動はここまでだよ！さあ、祭りの時間だ！」

とたん、クライスは今までにない激しさでドリュウに飛びかかった。連続する猛攻にドリュウは為す術なく、ついにマグナバイザーを弾き飛ばされる。

「うわぁッ！」

「アッハッハッハッハ！終わりだよドリュウちゃん！」

『FINAL VENT』

再び、ベノスネーカーがやって来る。クライスは飛びあがり、毒液に押されて突っ込んだ。そして、必殺の連続キック、ベノクラッシュは今度こそドリュウをまともにとらえた。

「グアアアアアアッ！」

最後の一撃で弾き飛ばされたドリュウは壁に叩きつけられ床にまっすぐ落下した。そこにクライスが歩み寄る。

「……ゼビアックスは、君が成功したら報酬にどうすると約束したの？」

「覚えてない……！……なあ……お願いだ……金ならいくらでも出す！」

「あ、そ。じゃあ……失敗したらどうするって言ったんだっただかなあ？」

「し、知らない！」

が、運命の女神は冷酷だった。ドリュウの体が、少しずつ消えていく。

「あああ……頼む……止めてくれ……なあ！あ……あああ！ああアアアアアアアアアアア……！」

ドリュウは叫んだが、無駄だった。そして……消えた。

クライスは、ドリュウがいた場所に落ちていたデッキを拾い上げ、一言こう言った。

「……サヨナラ、ペテン師君。アハハハハハハハッ！」

レンやナギサとともに家に戻ったアレンは、かかってきた電話に出た。エミリアからだった。

『アレン聞いて！さっき突然ストライクがユートを担いで出てきて、『用済みになったから置いとくよ』って…ユートが二人って…どうなってんの！？』

「……詳しい事は後で話す。ナギサにも事情を話したいから、ユートを連れてきてくれ。」

「う、うん。分かった。すぐ行くよ。」

アレンは電話を切った。

唐突に、ナギサがレンに問いかけた。

「なあ…あのストライク…クライスとか言ったか？彼は何をしたんだ？」

レンが口を開いた。その言葉は、何処となく重苦しかった。

「アイツは最初からあんな狂った奴だった訳じゃない。もとは純粋で、優しい奴だったさ。」

「……本物のユートみたいに。」

「俺はその本物を知らないが、そうだったんだろうな。心優しく、仲間思いだったさ。だが、何度も戦っていくうちにストライクの力に吞まれて……あんな戦闘狂に……。」

「……そんな…事が…」

「アイツはある日、俺達を敵の前哨基地に案内すると言った。アイツは優秀なハッカーだったから、俺達はあっさり信用してしまったんだ。そこに行ったのは、俺と、トルク、ステイニング、インサイザー、アックスと言うライダーそして、クライスだ。」

「……」

アレンら二人は黙って聞いていた。全て聞いてないというのに、言葉が、出なかった。

「だが俺達が案内されたのは前哨基地どころか、ゼイビアックスのアジトそのものだった。そこで、奴はいきなり襲いかかってきた。クライスと、ゼイビアックスの二人に、あっという間に俺以外の全員がベントされた。俺は逃げるしかなかった…仲間を捨てて……逃げるしか、無かった。」

「………」

「…私達は、そんな奴に…騙されたって言うのか？」

「気に病む事はない。アイツは昔から演技が上手かった。人を騙すのなんか、お手の物だったのさ。」

短い沈黙の後、一番初めに口を開いたのはナギサだった。

「……何とかして、ゼイビアックスを止めないと。」

「ああ。俺達、3人で。」

インターホンが鳴ったのが、聞こえた。

## 第18話 悪魔の約束（後書き）

### 次回予告

ユートは、自分がクライスにつかまっていた事、みんなの力になりたい事を話した。そして、アレン達は、ナギサとユートに事情を話すのだった。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『選ばれし者たち』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第19話 選ばれし者たち

ユートはエミリアの肩を借りていたが、それでも少しふらついていた。エミリアの助けもあり、何とか椅子に腰を下ろした。

「大丈夫かユート？」

「うん……」

「ねえアレン、トラストは説得できたの？」

「……ストライクに……ベントされた。」

エミリアはやはり状況が飲み込めないようだった。

「そのストライクって、まさか……」

説明したのはレンだった。

「ベントラのストライクだ。名前はクライス。お前にモンスターやライダーの情報をリークしてたやつだ。」

「クライスが！？……何でそんな事を？」

「お前の信用を勝ち得るためだろうな。万が一自分がユートじゃないとばれた時の。」

一方ユートは、少し置いていかれていた。

「なあ、もんすたーとからいだーとか、何の事なんだ？」

そこでアレンは思い出した。ユートはさっき合流したばかりなのだ。

「ああ、それを今から話すよ。」

レンが、説明を加えた。

「仮面ライダーと言うのは、鏡の向こうの世界ベントラで作られた戦闘システムの事だ。俺、アレン、そしてナギサも使ってる。」

そう言っ、レンは自分のデッキを見せた。

「……俺の父さんが、導いてくれて、それで俺は仮面ライダーになったんだ。」

「お父さんが？」

「ああそうなんだ。一年前から行方不明のな。こないだ、突然声が



聞こえるようになったんだ。姿まで見えるしな。そして、デッキを手にしたのもちょうどその位の頃だ。」

「ふうん…」

エミリアは少し頷いて聞いていた。レンは壁にもたれかかり、黙って聞いている。

「でもその後お前に会った時よりはましだったさエミリア。あの時、イカレてるって思っただろ？」

「今でもそう思ってるわよ。」

エミリアが嫌み交じりに言った。

「ハハハッ。」

「フフッ。」

その場にいた皆が笑った。そのすぐ後、エミリアはナギサとユートに説明した。

「最初はモンスターなんて見えなかったの。あいつらに捕まって、鏡に引きずり込まれてから見えるようになったの。」

「そのもんすたーってなんだ？」

ユートの質問に答えたのはナギサだった。

「人間を鏡の中に引きずり込んで連れて行く怪物だ。そいつらを操ってる黒幕もいる。そいつについては後で説明するよ。」

「ああ。」

「話を戻すよ。その時現れたのが、ここにいるレン。悪役さ。」

レンは少し笑って見せた。

「だってそうだろ？最初は強盗か何かかと思ったからな俺。」

「その方が良かったかもな。あの時俺にカードデッキを渡していれば、この戦いに巻き込まれずに済んだんだ。」

アレンは笑いながら話して見せた。ああだこうだ言っても、レンを今では信頼してる事は分かった。

「俺が状況を把握したくても、誰かさんは何の説明もなしにミスタータフガイっぷりを見せつけるだけだったもんな。結局俺は、自力でカードデッキの意味を知ることになった。父さんに力もちよつと

借りてな。」

「俺は何とかして、お前を引きとめたかったんだ。」

「俺はただ、レンを助けようと思ってさ。」

「オイオイ、うぬぼれもほどにしろ。」

「大人ぶっちゃって。」

アレンの言葉に、レンは少し身を乗り出した。

「何なら、大人の俺が鍛えなおしてやろうか？」

皆が、笑った。ユートも、もうみんなと打ち解けていた。

と、ナギサが質問をした。

「他のライダーはどうなんだ？彼らにはどうやって出会った？」

アレンは、不愉快そうな顔で語った。

「ハア…最悪だよ。仮面ライダーインサイザーに最初に出会った時、つきり味方かと思ったらとんでもない。いきなり襲いかかってきたんだ。話しても無駄だったさ。ライダー達は黒幕の正体を知らずに戦ってたんだ。インサイザーはライダーを一人倒すと1億メセタもらえるってさ。」

「1億！？…つまり、ゼビアクスは金で釣ってインサイザーを利用したのか？」

「もつと手が込んでる。」

レンが言った。

「父親をダシに使ったんだ。奴はどんな相手にも言葉巧みに飴と鞭を使い分ける。そして罠にかけるんだ。ああユート、ゼビアクスは黒幕の名前だ。このグラールを狙ってるんだ。」

その時、エミリアはアレンが沈んだ表情をしているのに気づいた。インサイザーの事を思い出していたのだ。その中でも最悪の思い出を。

「その後、インサイザーはレンに負けた。そして、ベントされたんだ。…ああ。ユート、ベントって言うのは、ライダーが負けると発動する機能の事だ。二つの世界の狭間にあるアドベント空間に送られて、そこから2度と出られなくなる。何が起ってるのか分から

なかったけど、大変な事があつたんだ。……自業自得だけだよ。」

「ベントしたのはあの時が初めてだ。気が咎めたよ。」

レンも、つらそうだった。

「私に止めを刺さなかったのも……」

「まあそれもある。全てのデッキを回収しなければゼイビアックスは止められない。ライダーをベントしなければならなかったことだ。だがいいように使われている奴らをベントする気にはなれなかったんだ。だから止めを刺せなかった。」

「止めをつて？」

ユートが質問する。答えたのはナギサだ。その言葉から、罪悪感がありありと読み取れた。

「私は最初、ほかのライダーと同じようにだまされていたんだ。レンが敵だと、思っていたんだ。……それじゃあ、トルクは？彼はどんな奴だった？」

「……世界の王。そんな夢見てた。インサイザーほど単細胞じゃなかった。頭の回転が速かったんだ。」

「それは言い過ぎよ。」

エミリアが、真剣な表情で返す。

「アイツはさすがにこくて、他人を利用することしか考えない。欲しい者のためなら仲間だって平気で裏切るのよ。嘘も平気で付くし、アレンを、ウソの思い出話でだましたの。レンが、敵だってね。」

「話がそれっぽかったんでつい……」

「だろうな、コロツと引つかかった。」

「でもそうよ。彼の話には説得力があつたわ。……でも、仮面ライダーキヤモが現れたことで、トルクの計画は失敗に終わったの。」

「マトック少佐からの任務がどうかいってた。」

「つまり、そのマトック少佐も、さつきレンが言ってたゼイビアックスだったってことか。」

「俺にもそれ以外考えられない。説明しようとしたけど聞く耳もたずさ。キヤモは栄光の虜になって、トルクにベントされた。」

「その時俺は、仮面ライダーラストと戦っていたんだ。彼はキャリアを取り戻したい一心で、それをゼイビアクスに利用され、バトルクラブと言う大会があると、信じこんで戦っていたんだ。」

「でも、キャモがベントされるのを見て、トラストにも話が違うって分かったの。その頃あたしは、ナギサを探してたの。もっともその時は正体を知らなかったけど。友達になってくれるライダーだっているって、証明したかったのよ。」

アレンは皮肉を込めて笑った。そして、エミリアの説明を肩代わりした。

「最初はフレンドリー過ぎて困ったよ。いきなり襲いかかって来るんだから。」

「頼むよアレン、私の様な人間には、ああいう話の方が分かりやすかったんだ。」

「……」

一瞬、間が空いた。少し気まずかった。

「とにかく、分かりあえてよかったじゃん！……そう、信じたいけど。」

「ああ。どんな言葉より、行動が物を言ったんだ。」

「……トラストとも、こういう風に話したかったけどな。」

「その、トラストはどうなったんだ？」

ユートの質問に、重苦しい間が流れた。答えたのはレンだった。

「一番、彼がトラそうだった。」

「クライスの事は話したろう。」

「ああ。僕の振りをして、皆に近付いた奴のことだろ？まさかそいつに……」

「ベントされた。」

アレンはその時、口をはさんだ。

「そう言えば、ユートはいままで何をしてたんだ？」

「僕は……そのクライスに捕まってたんだ。『作戦の邪魔になってほしくないからね』っていった。」

皆、事情はすぐに呑み込めた。

「なるほどな。本物にうつろつき回られると邪魔になるからな。」  
と、いきなりナギサが口を開いた。

「そう言えば気になっていた事がある。何で私なんだ？ グラール銃探せばもつと強い戦士だっていただろう。」

「簡単だ。奴は選べないんだ。カードデッキは特定のDNAで作動するんだ。鏡映しの関係になっているグラールとベントラには、同じDNAを持った人間が一人ずついる。」

「でいーえぬえーってなんだ？」

やはりユートには伝わりづらかったようだ。

「要するに、このグラールには俺のそっくりさんがいる。そして、ベントラのドラゴンナイトはアレンに、スティングはナギサに瓜二つなんだ。クライスもお前とそっくりだ。」

「私のそっくりサンが、ベントラに……」

「いたが、ゼイビアックスにベントされた。」

ナギサは少し黙っていた。その顔からは、複雑な感情が読み取れた。怒りとも、軽蔑ともみえた。

「だからライダーを騙して……」

「そいつ、許せないぞ、ヒトの命をなんだと思ってるんだ！ 何とかして、ゼイビアックスを止めないと……」

「それに、貴方達がいなかったら、大切な人を守るところか侵略者の手先になるところだった。」

アレンは身を乗り出し、ナギサに声をかけた。

「俺達と一緒に戦ってくれ！」

だが、ナギサは部屋の出口に向かった。

「……でもやっぱり、私には無理だ。貴方達を2度も攻撃してベントしようとした。一緒に戦う資格などありはしない。……すまない。」

悲痛な言葉を残し、ナギサは部屋を後にした。アレン、レン、ユートは後を追おうとしたが、エミリアが制止した。

「あたしが話すよ。まかせて。」

## 第19話 選ばれし者たち（後書き）

### 次回予告

エミリアがナギサを説得していると、そこにクライスが現れる。エミリアを逃がし一人で戦うナギサが窮地に陥り、そしてユートが懸けに出た…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『グラマシーの英雄』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第20話 グラマシーの英雄

ゼイビアックスは、要塞で巨大な画面に手をかざしてデータを探っていた。

「これじゃない……これも違う……」

と、そこにクライスが戻ってきた。ゼイビアックスのもとに歩み寄り、戦果を報告する。

「裏切り者と邪魔ものを始末しました。」

「厄介ものが減った訳だ。」

「味方も減っていましたが。ステイング。ドラゴンナイトに、ウイングナイトとつるんです。3対1は不利に違いありません。」

「まずはステイングを引き離せ、あいつが一番弱い。それに、援軍のめどは付いている。」

「は。」

クライスは不敵な笑みを浮かべた。利用できる人間が増えるのは彼にとってプラスなのだから。そして、去っていくクライスを横目に見て、ゼイビアックスは一言言った。

「…よい狩りを。」

パルムのグラマシーパーク。ナギサはそこにいた。一人でふさぎ



こむ彼女のもとに、カミ・カップ入りのコーヒーを持ってきたのはエミリアだった。

「ほら、飲みなよ。」

「え？ああ、有難う。」

ナギサはコーヒーを受け取って少し飲んだが、すぐにまたうつむいた。

「……私は弱過ぎるんだ。きっとすぐにベントされてしまう。」

「あんたは弱くない！それに優しいじゃん。」

「優しくたって何になる！」

ナギサはエミリアに声を荒げて言い返した。

「グラマシー地区のヒロインじゃない。」

「違うさ。まんまと騙されていただけだ。」

ナギサは語り始めた。

「ゼイビアックスは、私をヒロイン気分にした。」

side ナギサ

ゼイビアックスは、私にカードデッキを渡した後、基地に案内したんだ。

『スイングベント……ファイナルベント……契約の、カード？』

『カードを選ぶ前に説明しよう。ここからはもう引き返せない。このカードでモンスターと契約してもらう。』

『契約？なんで？』

『エイリアンと戦う力の源になる。』

ゼイビアックスは私に淡々と説明した。

『だが一度契約したら一生取り消せない。もう二度と戻れないんだよ。……カードを抜き、かざせば、君はモンスターと一心共同体になり、故郷グラールを守るヒロインになる。あるいはカードを置いてここを去り、のびのびと元の、平凡な生活に戻る事も出来るが。』

が、その時私はためらわなかった。それがいい事だったのかそうでないのか、正直分からない。

『私の答えは決まっている。』

そして、私は契約したんだ…

『K A M E N   R I D E R !』

最初の戦いはしびれたさ。敵を軽々やつつけたんだ。そして、戦うたびに上達するのも分かったよ。より強く、より早く。誰にも私は止められなかった。巨大なモンスターも倒したさ。イノシシみたいな奴だった。確か：ワイルドボーダーとか言ったかな。人を引張っていくそいつを見つけて、彼を解放した後私は言ったんだ。

『待て！君、早く逃げる！』

そして、ベントラに飛び込んだ。最初は押されたが、突進してくるだけ。カードで武器を出した後、決め台詞を言っちゃったさ。

『3惑星最高機関の命により、貴方を倒す！』

弾き飛ばしてやったらすぐに怒って気味たいなものを発射したけど、盾で弾いてやったら粉々にぶっ飛んだ。

s i d e   o u t

「最高だったさ。他人の役に立てたんだし、貴方達を守ってると思

つてた。」

「立ってたし、守ってたよ。あんたがいなかったら、さらわれてたかもしれないし。」

が、エミリアが何を言ってもナギサは浮かない表情を崩さなかった。

「違う、その気にされてただけだ。」

「違うないよ。」

「……」

ナギサは話の続きをした。

「ある日、ゼイビアックスに次の任務を告げられた。」

side ナギサ

「よくやった、あの怪物はとても危険だった。君の勇敢な行動で無数の命が救われた。」

ゼイビアックスの握手に私は応じた。あの時、奴の正体に気付けなかった。全くな。

「ああ、機会を与えてもらって感謝している。ただ…皆にこの事を話したらどんなに誇らしく思ってくれるか。」

ゼイビアックスは、親しげだったさ。とても。

「ああ、そうだな。だがこの戦いは極秘だ。エイリアンが歩き回っているとは知ったらパニックが起こる。だが、今はいないワイナール君は、君をさぞかし誇りに思っている事だろう。」

「ああ。決して口外はしない。」

カッコいいじゃないか。だってそうだろう？誰も知らないところで、人の役に立てるんだから。だが、それこそゼイビアックスのつけ目だった。私は自分が最後の砦のつもりだった。だが違った。ゼイビ

アックスに、利用されていただけだった。実際、私は操り人形だった。私は自信がついて、毎晩戦いに出るようになった。グラールや、大切な人を守るという使命感に燃えていた。ここまで胸を熱くした事は初めてだった。

ある日、ゼイビアックスに次の任務を告げられた。

『君の活躍は素晴らしい。君は勇敢かつ優秀な兵士であり、グラールの民も君に深く感謝している。次のステップに踏み出す時だ。怪物の脅威だが、それを裏で操るエイリアンを消さねばならない。覚悟はいいか？』

『ああ。もちろんだ。』

そしてゼイビアックスは、私に、友達を倒せと命じたんだ。もちろん、その時はそいつらが敵だと思っていたが。

『仮面ライダーウイングナイト、ドラゴンナイト、ストライクの3人は怪物の数10倍も強くずるがしこい。君を罠にかけようとあらゆる手段を使って来る』

『ああ。彼らには騙されない。』

『期待しているぞ。わが、娘の様に。』

『期待にはこたえて見せるさ。』

その後の事は、貴方も知ってのとおりだろう。アレンと遭遇し、真実を知った。

side out

「結局私は、いいように使われていただけだ。」

それを聞いたエミリアはいきなりナギサの肩に手を置き、言った。「しっかりしなさいよ！確かにモンスターはゼイビアックスが仕掛けたフェイクだったかもしれない、でも！誰かが襲われてたのは事実じゃん。あんたはその人たちを助けた、それは事実よ！あんたは、その人たちのヒロインなのよ！」

と、いきなり後ろから声が聞こえた。出来るなら、二度と聞きた

くない声を。

「僕にとつてもヒロインだよ、ハハハッ。メソメソしてる泣き虫ちゃんは大好きさ。」

クライスだった。黒いジャケットにズボン、黒いブーツを身につけ、バンダナも紺色の無地の物に代わっている。そしてその顔には、彼がユートで無い事を証明する一番大きいモノ、酷薄な笑みが浮かんでいた。

「エミリア、逃げろ。逃げるんだ早く！」

「う、うん……」

エミリアを後ろ手に逃がすと、ナギサはデッキを構えた。

「仲間を逃がして時間稼ぎ？泣かせるねえアハハハッ。でもまあ、そう来なくっちゃね！」

挑発するように、クライスも紫のデッキを取り出す。

『K A M E N   R I D E R ! 』

現れたリングが、二人にライダーのアーマーを纏わせる。

「勝負だ！」

「望むところさ！あははははッ！」

一方リトルウイングでは、クノーとシズルが話していた。シズルはかなりいら立っていたが。

「エミリアはまだか？」

「しつこいな、まだだ。」

「……また例のモンスターとやらと遊んでるわけか。」

「遊びじゃない、彼女は世界を救うんだ。」

だがやはり、シズルには何を言っても無駄そうだ。

「…ハア、じゃあ彼女が戻るまで待たせてもらうさ。全く、僕の脳みそを分けてやりたいよ。」

が、シズルが本を読みだしたとたん、クノーは嘔き出しそうになるのを懸命にこらえながら話しかけた。

「…シズル、分けて大丈夫か？本が上下逆さだが。」

「え？……あ。」

その頃ナギサは、クライスと戦っていた。モンスターたちとの戦いを思い出して懸命に攻めるが、クライスは余裕のていですべての攻撃をかわし、ナギサの首根っこを捕まえると鳩尾を蹴りあげた。

「グアアッ！ゲホッ、ゲホッ…」

「んん？どうしたの？カエルみたいにゲコゲコ泣いちゃって。喉飴でも舐めた方がいいんじゃない？背中もさすってあげるよ！」

そう言っ、クライスは立ち上がりかけたナギサにベノサーベルのナックルガードを叩きつけた。

「アアッ！ハア…ハア…」

「それともベントして楽にしてあげようかあ？」

とその時だった。2台のバイクが窓から出てきて、二人の間に立ちふさがった。運転しているのはアレンとレン、後ろにはエミリアとユートがしがみついていた。

「そこまでだ。」

「んん？おっと、これはこれはウイング野郎にドラゴン君。君達の相手はこいつらだよ。僕は知らないっつと。」

クライスが手を挙げて合図すると、窓からレッドミニオンが湧き出てきた。

「なッ！」

「こいつらの相手は頼んだよー！」

二人はレッドミニオンに向かったが、数が多い。ナギサを助けようとしても、壁の様にたちふさがられる。

「どうしよう…あたしはライダーじゃないし…」

と、エミリアは、すぐ横のユートが拳を握りしめ、身を震わせながら目の前の光景を睨んでいるのを見た。

「…ユート？」

ユートは辺りを見渡した。と、彼の眼には資材がいくつか積み上げられた山を見つけた。

「アハハハッ！もういいや、ベントしちゃおーつと！」

クライスはナギサを蹴り倒すとカードを抜いた。ファイナルベントだった。

と、その時、ガアンとものすごい音がして、クライスの体がよろめいた。

「いつてえ！」

ユートが、近くの鉄パイプを拾い上げてクライスの頭を殴りつけていたのだ。

「……お前かよ、身の程知らずが。」

「無茶だ…生身でライダーに立ち向かうなんて…」

「せっかく殺すのはやめといたのに。…じゃあいいや。やっぱり始末しちゃえ！」

クライスがベノサーベルを振りかざして襲いかかった。が、ユートは視認すら困難な斬撃を常人離れた反射神経ですべてかわす。手にした鉄パイプをクライスの鳩尾に叩きつけ、ひるんだすきに懷に潜り込んでベルトに手をかけ、デッキを抜き取った。

「なっ！」

すぐにクライスの変身が解ける。

「オイ！カードデッキを返せ！」

「…嫌だね。これで僕も、皆と戦える！」

ユートはためらわずデッキを構えた。デッキは電光を発して期待にこたえた。

「K A M E N   R I D E R！」

デッキがスライド挿入されるとともに、エネルギーのリングがユートの体を囲み、ストライクのアーマーを形成した。

「……チッ！じゃあ、後は頼んだよ、ミニオンズ！」

そう言っ、て、クライスは窓に飛び込んだ。

「ユート！お前凄いな！」

「ああ！さあ、いくぞ！」

ユートはレッドミニオン達を見据え、不敵な笑みを浮かべて拳を構えた。

それから少しして、クライスは罰を受けていた。



「ハア…ハア…將軍…お許しを…」

念動力で締めあげられてから地面に叩きつけられ、クライスが絞り出すような声を上げた。

「ああ、承知しているさ。君は私の期待にいつも答えていたからね、今回はこれくらいで勘弁してやろう。ここで処分するのは少しおしい。」

「將軍…」

ゼイビアックスはクライスに歩み寄り、にやりと笑って懷に手を入れた。

「そこでだ、君にチャンスをやろう。名誉挽回のな。その代わり、次のチャンスはもうない。」

「…ハイ。」

「分かればよろしい。」

ゼイビアックスは、クライスに何かを渡した。

カードデッキだった。水色の地に、鯨のエンブレムが刻まれたカードデッキだ。

「…これはなんですか？こんなデッキ見た事無い。」

「当然だ。私が作ったものだからな。これで、汚名を返上するのだ。」

「

……了解。」

そして、クライスはデッキを構え、変身した。

『KAMEN RIDER!』

そこに現れたのは、鯨のライダーだった。鯨の様な召喚機に、水色のアーマーだ。

「さあ行け…仮面ライダーブルースよ！」

## 第20話 グラマシーの英雄（後書き）

### 次回予告

ストライクとなったユートを迎え入れたアレン達は、ナギサを慰め、仲間として迎える。そこに、そこにブルースとなったクライスが立ち上がった。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダーブルース』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## ライダーデータ紹介PART3（前書き）

ブルースに関しては僕の個人的判断により設定を少々変えています。

## ライダーデータ紹介PART3

仮面ライダーステイング

変身者：ナギサ 日本名：ライア

ベントラで開発された12のライダーのうちの一つ。アドベントビーストはエイ型の『エビルダイバー』。機動性はそれなりにあるが本体スペックがやや劣るため、エビルウィップ（後述）やコピーベントを使用したヒット&amp;アウエー戦法を得意とする。ただ使いこなせばそれなりの力は期待できるライダーである。エイの様な召喚機の『エビルバイザー』は小型の盾であり、ワイルドボードーが発射する気をそのまま跳ね返すほどの耐久性を誇る。

名前の意味は『棘』。また日本名の『ライア』の意味は『嘘つき』だが、これは、ライアとガイの変身者が当初は逆だったため、ガイの変身者である芝浦順の性格にちなんで名づけられた。

スイングベント AP：2000（100t）

エビルダイバーの尾を模した鞭、『エビルウィップ』を召喚。通常攻撃の他、電流を放って攻撃することもできる。ただ、鞭と言う形態の問題上、扱いはやや難しい。

コピーベント

他のライダーの武器装備をコピーできるアドベントカード。キヤモの物と違いライダーの姿は模写できないが、アーマーの形が変わると小回りが利かなくなる可能性もあるため、むしろこちらの方が使い勝手がいいと言える。ナギサが最も好んで使用。

アタックベント      A P : 4 0 0 0

エビルダイバーを召喚。水中活動の他、スティングを上に乗せての飛行も可能。

ファイナルベント      A P : 5 0 0 0 ( 2 5 0 t )

『ハイドベノン』。飛来したエビルダイバーの上にスティングが乗り、敵に突っ込みながら加速。そのまま波乗りの様に敵に突進する。単純な技だが、うまく決まれば上級モンスターを一撃で爆殺するほどの威力を持つ。

仮面ライダーストライク

変身者：クライス、ユート・ユン・ユンカース    日本名：王蛇

ベントラで開発された12のライダーのうち、トップクラスの攻撃性を誇るライダー。アドベントビーストはコブラ型の大型モンスター『ベノスネーカー』。本体スペックがかなり高く、特に接近戦では無類の強さを誇る。カードの少なさを補って余りある性能を持つが、反面クセのあるライダーになったため使いこなすにはある程度の熟練が必要。杖型召喚機『ベノバイザー』は付きたてた相手を短時間マヒさせる毒牙が取り付けられ、またサーベルの様に鋭利な先端を利用して剣の様に使用もできる。

名前の意味は『命中、激突』。ちなみに日本名の『王蛇』はボアの別称。

ソードベント      A P : 3 0 0 0 ( 1 5 0 t )

ベノスネーカーの尻尾を模したサーベル、『ベノサーベル』を召

喚。斬ったり突いたりではなく叩きつけると言った感じで使用する。刀身は強毒でコーティングされており、ベントラに破壊できないものは存在しないという。

#### スチールベント

相手の武器や防具を奪い取るアドベントカード。アタックベントや特殊能力系には効果なし。

#### アタックベント      A P : 5000

ベノスネーカーを召喚。頭部側面の刃『ベノハーシュ』と口から吐く強酸性の毒液で戦う。

#### ファイナルベント      A P : 6000 (300t)

『ベノクラッシュ』。助走をつけて飛び上がった後トンボを切り、ベノスネーカーが吐く毒液に押される形で敵に突進。足をバタ足の要領で動かし、敵に突っ込んで連続キックを叩き込む。毒液とキックの2弾攻撃はすさまじい破壊力を誇り、また盾などで防いだとしても連続攻撃で弾いて本体にダメージを叩き込むため、避けるかアタックベントなどで軌道を逸らす以外にかわす手立てはない。

#### 仮面ライダーブルース

変身者：クライス    原作名：アビス

奪ったカードデッキを基にしてゼイビアックスが開発したライダー。アドベントビーストは鯨型の『アビスラッシュャー』とシュモク

ザメ型の『アビスハンマー』。汎用性の高いドラゴンナイトがベースとなっているが、ウイングナイトの機動性やストライクの攻撃力なども足されており、スペックは特筆すべきレベル。特殊能力系カードもいくつか保有し、どんな相手にも合わせられる。召喚機は左腕に取り付けられたコバンザメ型ガントレット『アビスバイザー』。衝撃波の様な水流を発射して遠距離攻撃に使うこともできる。名前は友達の案。ドラゴンナイトには登場しなかった。

ソードベント      A P : 3 0 0 0 ( 1 5 0 t )

アビスラッシャーが保有するのと同じ鮫の歯の様な剣、『アビスセイバー』を召喚。のこぎりの様な刀身は一撃で多数のダメージを叩き込む。

ストライクベント      A P : 3 0 0 0 ( 1 5 0 t )

アビスラッシャーの頭部を模した手甲型武器『アビスクロー』を召喚。ドラグクローファイアの水流番の様な技『アビスマッシュ』も発動可能。

シュートベント      A P : 3 0 0 0 ( 1 5 0 t )

アビスハンマーの胴体を模したバズーカ砲『アビスキャノン』を召喚。オリジナル。

スタンベント

アビスバイザーの牙にマヒ効果をつける。オリジナル。

コンファインベント

他のライダーのカードの効果を無効化する。

#### リターンベント

打ち消されたカードの効果を再び発揮。

#### トリックベント

最大8人に分身。

#### アタックベント

1：アビスラッシャーを召喚。5000AP。

2：アビスハンマーを召喚。5000AP。

#### ユナイトベント

アビスラッシャーとアビスハンマーを合体させ、巨大なホオジロザメ型モンスター『アビゾドン』を召喚。原作ではファイナルベントだった。通常形態『ホオジロモード』、エネルギー弾を撃つ『シユモクモード』、頭から刃が伸びた『ノコギリモード』の3形態を使い分ける。なお、全ての形態を合わせた『ホオジロノコギリシユモクモード』にもなれる。

#### ファイナルベント

1：『アビスクラッシュ』。アビスラッシャーがブルースの足首をつかみ、ハンマー投げの要領で投げ飛ばす。ブルースはそのまま独楽の様にスピンし、敵に必殺の回し蹴りを叩き込む。オリジナル技6000AP（3000t）。



2：『アビスフアング』。アビスハンマーが発射する特殊なエネルギーをアビスセイバーの刃に吸収し、一撃必殺の斬撃を叩き込む。オリジナル技。6000AP（300t）。

3：『アビスダイブ』。アビゾドンが大口を開けるように変形するとその中に下半身を納める形で合体し、水流を纏って体当たりする。原作ではアビゾドンを出現させて自在に操る技だが、それではライダーはベント出来ないだろうという作者の判断により内容は変更になった。7000AP（350t）。

## キャラ紹介 PART2（前書き）

クライスもブルースになり、ちょうどいいと思ったので紹介やります。

クライスとユートに関しては紹介をし直します。

## キャラ紹介 PART 2

ユート・ユン・ユンカース（仮面ライダーストライク 王蛇）  
モトウブの原住民族「カーシユ族」の少年。ニセモノ作戦の障害になるのを防ぐためにクライスに拉致監禁されていたが、彼が正体を出した直後に用済みになって解放された。自分がつかまっていたせいでクライスの接近を許しブラッドがベントされたと考え、責任をとるためにクライスからデッキを奪い取ってストライクとなる事を選んだ。

クライス（仮面ライダーブルース アビス）

ベントラの正式なストライクだった少年。優秀なハッカー。ベントラでは文武ともに優秀で将来を嘱望されており、それをアドベントマスターに見込まれてストライクに選ばれた。

元々はユート同様純粋で心優しい性格だったが、幾度となく戦ううちにストライクの力に溺れて行き、狂気に走った残虐な戦闘狂に変貌。アドレナリンが昂ぶると笑いだすようになったのもここから。アドベントマスターを失い敗色が出てきたベントラを見限り、勝ち組になるためにゼイビアックスの側に寝返ったのち、忠誠の証として4人ものライダーをベントした。ユートを拉致監禁して彼になり済ましアレン達の内部事情を探っていたが、有益な情報が得られる見込みなしと判断して本性をあらわにする。しかし、隙をつかれてユートにデッキを奪われたため、ゼイビアックスが作ったブルースのデッキを使い、汚名返上と侵略成功のために戦う。  
無実の罪で服役中の兄がいる。

リッチー・プレストン（仮面ライダーインサイザー シザーズ）

パルムの大資産家の息子だったが、親の金で遊び歩いてばかりである事を憂いた父親に勘当され文無しになる。親の遺産を告げなくなったことを嘆きつつも地道に働こうとはしない、要するにニート。ゼイビアックスにライダーを1人倒すごとに1億メセタ出すと約束されてインサイザーとなるが、レンとファイナルベントをぶつけ合った際にシザースアタックのAPが飛翔斬のAPに負けていたために敗北とみなされ、グラールで最初にベントされる事となった。

ドリユー・ランシング（仮面ライダートルク　ゾルダ）

ニユーデイズに居を構える詐欺師で、太陽系警察とガーディアンズに追われる身だった。ゼイビアックスに侵略後のポジションを約束されて仮面ライダートルクとなる。アレンを騙したが失敗に終わったためゼイビアックスから距離を置かれ、更にはグラールだけでは飽き足らずベンタラまでも支配しようとして試みてゼイビアックスを出し抜こうとした事がばれて怒りをかい、ブラッドやアレンに拒絶された揚句クライスにベントされる。

グラント・ステイリー（仮面ライダーキャモ　ベルデ）

最強の座に就くことにしか興味がないアンダーグラウンドの格闘家。勝つためなら卑怯な手段もとる。二つの世界で最強になりたくないかとゼイビアックスにけしかけられて仮面ライダーキャモとなるが、ほかのライダーがいるという事を聞いていなかったためドリユーと激突し、不意打ちでギガランチャーを叩き込まれたのちに続けざまにエンドオブワールドを喰らってベントされる。

ブラッド・バレット（仮面ライダートラスト　ガイ）

モトクロスのスター選手だったが、友人のバイクに細工したとい

うスキャンダルにより、無実の罪でレーザー人生を絶たれる。無実を証明するビデオ画像と引き換えにライダーが参加するトーナメント（もちろん実在しない）への参加を強要され、キャリアを取り戻したいがためにつられて仮面ライダートラストとなる。が、キヤモがベントされたのを目撃したことで話が違ふ事に気付き、さらにキヤリアを取り戻すために暴走して命令無視を繰り返したがために用済みの烙印を押されてクライスにベントされる。

#### クノー・オーガスト

リトルウイング所属の傭兵で、アレンの先輩に当たる。ガーディアンズ時代のエミリアを知っており、彼女を守れなかった事に責任を感じて生きてきたが、彼女の感謝のメッセージを聞いて胸のつかえが下りたという。モンスターに関するエミリアの調査に協力する。

#### フランク・クラウド

アレンの父親。アレンと同じクラッド6に暮らしていた。住んでいる家は別々だったものの息子との仲は良かった。1年前にモンスターにさらわれて行方不明だったが、病院にひそかに収監されて保護された。たびたび幻影としてアレンの前に現れ、アドバイスを送る。

## 第21話 三つの力

「さあ…来いよ。」

ユートは自信に充ち溢れた口ぶりでレッドミニオン達を挑発した。それに乗り、相手は襲いかかって来る。  
が。

『SWORD VENT』

「うらあっ！」

ユートは素早くベノサーベルを召喚すると、飛びかかるレッドミニオンをすり抜けざまに次々と切り捨てた。万力込めた斬撃を喰らい、一太刀でレッドミニオン達は消滅していく。アレンが加勢する中、レンはナギサを助け起こした。どうやら相当のダメージを負ってしまったらしい。

「大丈夫か？」

「ああ…」

申し訳なさそうに言葉を絞り出しながら、ナギサも戦いに加わった続いてレンも。

4人ともが、目覚ましい闘いぶりを見せていたが、特にユートはすさまじい。これが初陣だとはにわかに信じ難いレベルだった。まさに的確なタイミングで、拳を見舞い、斬り、突き、叩き、蹴る。伊達に戦士ではなかった。

一方、見守っていたエミリアの携帯が、突然場違いなほどの陽気な着メロを鳴らした。出てみると、相手はクノーだった。

『エミリア、ちょっと、来てくれないか。シズルがイライラしながら待っている。』

「ええ！？…あんの引きこもり科学者が…他人の行動にいちいち難癖つけて…分かった！今行くから！」

エミリアは乱暴に電話を切り、その場を後にした。

最後の1体が消滅すると同時だった。ナギサが膝をついたのは。

「ナギサ！」

「おねえさん、大丈夫か？」

「ああ、何とか…」

変身を解いた彼女の顔から、苦悩の色が読み取れた。

「とりあえず行こう。」

それから、4人はグラールに移動し、広場にいた。重々しい口調で切り出したのは、ナギサだった。

「……やはり、私には無理なんだ。クライス相手に手も足も出なかった。」

「アイツは強い。仕方ないさ。俺でも1対1では苦戦は必至かもしれない。」

レンの慰めるような言葉は、逆効果だったらしい。ナギサはかえって落ち込んでいた。

「……きつと簡単にベントされてしまうさ。」

「ナギサ、俺達にはお前が必要なんだ！」

「私なんて必要じゃない！ユートだって加わったんだ。私はもう降りるよ…これからは3人で…戦ってくれ。」

「いや、おねえさんは僕達には必要なんだ。」

突然、ユートが口を開いた。辺りを見回し、長めの枝を1本拾ってナギサの前に出す。

「これを折ってみろ。」

「ユート…」

「いいから。」

ナギサは枝をひったくり、パキンと折って渡した。

「よし。次はこれだ。」

そう言つて、ユートは次に3本を拾った。

「折ってみろ。」

ナギサはそれを手に取った。手の中で力を込めるが、枝はしなるだけで折れない。

「……これがなんだっていうんだ？これでは3人だつて十分だろ……」  
が、ユートはナギサの言葉を遮り、もう1本渡した。

「これも入れてみる。」

ナギサはそうした。そして、ありったけの力を込めた。

が、折れない。さっきよりもはるかに手強かった。

「……もう分かつただろ。確かに3人いれば力はすごいよ。でも、4人が結束すればもつと強くなるんだ。おねえさん、僕達には、お前が必要なんだ。おねえさんは僕達をいつでも頼つていい。だからおねえさんも、必要な時は僕達に頼らせてくれ。」

ユートはナギサの目をじっと見つめた。目をそらさず、話し続けた。

「……ユート……」

「サツすがユート、伊達に戦士やって無いな。」

「分かりやすい話だな。……ナギサ、そう言う事だ。俺達は、もうチームなんだ。」

彼らの言葉を聞いたナギサの顔は、明らかに明るくなっていた。

「みんな……」

レンはナギサの表情を見てから、拳を握って前に出した。

「グラールとベントラに。」

「ベントラとグラールに。」

「ベントラとグラールに！」

「……ベントラと、グラールに。」

アレン、ユート、ナギサの3人が、レンと拳を重ね合わせた。レ



ンの言葉通りだ。彼らはチームなのだ。

「次はどうする？ 肩でもお揉みしましょうか？」

「ハハッ、悪くないかもな。」

アレンの冗談に、レンが笑いながら答えた。

一方ゼイビアックスの要塞。ブルースの慣らし訓練を終えたクライスが戻ってきた。

「…新兵を募集するのですか？」

彼の眼の先のスクリーンには、親しげな二人の男が映っていた。

「チョウ兄弟だ。愉快的連中だよ。」

「またろくな連中には見えませんが。」

「そうか？ だが今度は逆らったりしないだろう。軽い連中だ。オツムも軽い。だがそこがいい。」

その画面の中では、二人がバイクのチェーンを切っていた。

「やったな兄ちゃん。ボロ儲けや。」

「そやな。」

「うし、兄ちゃんはそっちを…」

と、その時だった。そのバイクの持ち主と思しき男が、いきなり叫んだ。

「オイ！ 何してる！」

が、チョウ兄弟は不敵な笑みを浮かべた。そして、兄ちゃんと呼

ばれた男、ダニーがいきなりその男に回し蹴りを叩き込んだ。

「はああッ！」

「うああっ！」

「ほら、なかなかやるじゃないか。」

「…今度は使えそうですね。」

「新兵に、話をつけてくるでしょう。」

アレン達4人は、工場の辺りを歩いていた。

「やる事がある。」

「またユートにチームワークについて熱く語ってもらっの？」

「違う。トレーニングだ。早朝からやるぞ。」

「早朝って何時！？」

レンは、にやりと笑みを浮かべて答えた。

「早朝だ。」

アレンは横を見た直後、ユートとナギサは同時に答えた。

「了解。」

「ああ！修行ならやるぞ！」

「…りょうかい。」

アレンが嫌み交じりに言った。

同じころ、郊外の高架下で、チヨウ兄弟が盗んだバイクを物色していた。

「こんなん出たで。」

「なんやねん兄ちゃん、もっと金目のパーツ取りいや。」

「しゃアないやん……」

その時だった。彼らの前に、一台の黒い車が止まった。

出てきたのはゼイビアックスだった。サングラスをかけてスーツに身を包み、例の親しげな笑みを浮かべる。

「チヨウ兄弟ってのは、君達かい？」

「誰やねんお前。」

「警察か!？」

「何だね警察が怖いのか？ 悲しいじゃないか。君たちみたいな未来ある若者が、コソ泥か。」

「仕方ないやん、恵まれない家庭ってやつや。けどアメリカンドリームを1グラム掴んだる。」

「1グラムって……すくなッ。」

アルバートの言葉に、ダニーがささかずツツコミを返す。

「じゃあ、1キロや!」

「1キロ。もつと大きな仕事をしてみないか？」

そして、ゼイビアックスは本題に入った。

「実は大規模な銀行破りを計画しているんだが、ある連中が邪魔でね。君達にそいつらを、引き算してもらいたいんだ。成功すれば、1キロとは言わず、掛け算で何倍もの富が手に入る!……君達に商売道具を見せよう。」

ゼイビアックスが開けたアタッシユケースには、数千万メセタもの札束と、二つのカードデッキがあった。トラの紋章が刻まれた青いデッキと、レイヨウの紋章が刻まれたブラウンのデッキ。

「スゴッ!」

「ああ、それとこれは、少ないが、経費の足しにしてくれ。……私達はチームだ。」

翌朝。斬りつけられたユートが、地面に転がった。

「痛い！だから朝早過ぎるんだって！」

「文句を言っな！」

レンが、ウイングランサーをユートにつきつける。

「よし、ナギサと交代だ。」

「お願いします。」

そして、レンとナギサは拳をぶつけ合った。が、素手の戦いにはまだになれないのか、ナギサはおされぎみだった。そして、ウイングランサーを叩きつけられ、その体が大きくよろめく。が、すぐに体勢を立て直すと、近くにいたユートの背中を借りて馬跳びの様に飛びあがり、レンに蹴りを放った。が、あっけなくかわされ、ナギサは地面に突っ込み、ユートは段差の角に膝をぶつけた。

「あいったあ！脛打った…いたい…」

「呼吸が乱れてるぞ。いいかナギサ、後の先を取れ。相手の動きを読む事が出来れば、みだりに呼吸は乱れない。」

「ハイ！」

「よし、もう1戦行くぞ。」

そして、再び、二人はぶつかり合った。ウイングランサーが突き出されるが、ナギサは側転してかわすと、レンの鳩尾に蹴りを叩き込んだ。

「ウアアッ！……良いぞナギサ。今のは良かった。」

「ハハッ、まだ脳が寝てるのか？いい加減起きろよ。」

レンは、アレンの言葉を見殺してメンバーに言葉をかけた。

「よし、今日はここまでにしよう。」

「ハア…まだ朝飯食ってないもんな…」

そしてその少し後、4人は近くのバーガーショップで朝食を取っていた。と、いきなり4人の頭に例の気配がした。

「！！…近いぞ。」

「あ、あれ！」

ユートが指さした先では、バイクメットをかぶった男が、レッドミニオンに引きずられていた。

「た、助けて！」

ナギサが進み出ると、3人も後に続いた。

「行くぞ。」

「ああ！」

そして、4人は同時にデッキを構えた。

「『『『KAMEN RIDER！』』』」

そして、変身が完了するや否や、ナギサは駆け出した。

「私に任せろ！」

「あ、おねえさん！…二人は反対側から言ってくれ、後で合流しよう！」

そして、ユートも走り出した。

その後、ナギサはレッドミニオンを追ってきた。が、誰もいなかった。

「何処だ…？」

と、ユートが追いかけてきた。

「おねえさん！一人で突っ走るな！」

「ス、すまない…」

とその時だった。いきなり、目の前に人影が現れた。クライスだった。

「エイちゃんにへび少年。おひさ。」

「何しに来た！」

「貴方のデッキはもうない。私達とは戦えないぞ！」

「そうかな？」

クライスはデッキを取り出した。水色の、鯨のデッキを。

「KAMEN RIDER！」

そして、デッキを挿入したクライスの体が、鯨の様なアーマーに包まれる。

「あッハッハッハ！さあ、カーニバルだよ！」

## 第21話 三つの力（後書き）

### 次回予告

ブルースとなったクライスは、4人の前に立ちはだかる。圧倒的な力を見せるクライスは、ユートとナギサを追い詰める。そして、新たな仮面ライダーも、誕生しようとしていた。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『仮面ライダーブルース』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第22話 仮面ライダーブルース（前書き）

ブルースのアドベント音声はパイロット版の物を想像してください。



## 第22話 仮面ライダーブルース

「アツハハハ！2対1か。性能テストにはちょうどいいや！」

ブルースへとその姿を変えたクライスは、左腕に着いた鮫型召喚機アビスバイザーを、二人につきつけるように出した。

「おねえさん、カードデッキって使える人が決まってるんじゃない？」

「どついう事だ！おまえが使えるデッキはストライクだけのはずだ！」

二人は動揺を隠せない。クライスがデッキを奪われたことで、ゼイビアックス側の戦力は明らかにガタ落ちしたとばかり思っていたのに。クライスと言えば、首をひとひねりしてから余裕のていで答える。

「使えるさ。だってこれ將軍が作ったデッキだもん。じゃ、おしゃべりはこの位にしようか！」

そう言うや、クライスはデッキからカードを引き抜いた。アビスバイザーの口の部分にカードが差し込まれ、右手で押し込むと同時に、他のライダーの物よりもエコーがかかった音声が響いた。

『SWORD VENT』

クライスの右手に、鋸の様な剣、アビスソードが飛び込んだ。

「ユート！」

「ああ！」

ユートはベノバイザー、ナギサはエビルウィップを構えてクライスに突進する。が、クライスは手慣れた動きでかわし、ユートの背中にカウンターの斬撃を叩き込んだ、続いて繰り出されるナギサの回し蹴りも余裕で回避し、逆に足を掴んで胴体に蹴りを見舞う。

「ハハハッ、なんだこんなもん？ユートくんも、もつと楽しませてくれると思ったのに。まいつか。じゃあ、雑魚は寝てろよ！」

『SHOOT VENT』

クライスの手に、巨大なバズーカ砲、アビスキャノンが飛び込み、

放たれた砲弾はユートを正確な照準で捉えた。

「あああつ！」

ユートの体が吹っ飛ばされ、後ろの壁に叩きつけられる。

「…二人つきりになれたね。もってこいだ！」

ナギサは必死に立ち向かった。だが、クライスの戦闘技術にブルースの性能が合わさり、その戦闘能力は異常なレベルへと昇華していた。クライスの刃が、ナギサの体を何回も何回も捉える。

「楽しもうじゃないか！」

アレンとレンは、先ほどのレッドミニオンと交戦していた。背中ของブーメランを巧みに操り、二人の斬撃をことごとくブロックして反撃の刃を振るう。

「早くナギサとユートに合流しないとイケないのに…！」

「くそ、ちょこまかと……！」

レッドミニオンがブーメランを振りかざして向かってくる、だが。

「「やああつ！」」

アレンのドラグソードと、レンのウィングランサーが、飛びこんできたレッドミニオンに正確な斬撃を浴びせ掛けた。体勢を崩し、壁に叩きつけられたレッドミニオンが、靄の様にかき消える。

ユートはダメージからようやく立ち直り、クライスに後ろから迫った。だが、クライスはナギサをけっ飛ばし、その隙に新たなカー

ドを装填した。

「ハッハー、そうはさせないよ！」

『ATTACK VENT』

次の瞬間、鯨のモンスター、アビスラッシャーがユートを後ろから組みふせた。

「わあっ！」

「アハハハッ！……で、君はどうした？もう疲れたの？」

「……待ち疲れたのさ。早く来たらどうだ！」

クライスは刃を振るって期待にこたえた。エビルバイザーで攻撃をしのぎながら、ナギサは先ほどの訓練を思い出していた。

後の先を取れ。相手の動きを読む事が出来れば、みだりに呼吸は乱れない。

「どうしたのナギサちゃん？掛かってきなよホラホラ。」

ナギサは右胸を抑え、静かに言い放った。

「お前こそどうした。戦いたいならかかって来い。それとも、負けるのが怖いかな？」

「ハハッ、いいねえ、高まるよ！」

クライスはアビスバイザーを突き出し、鋭い牙状のパーツを叩きつけようとした。しかしナギサは回し蹴りでその攻撃を払うと、もう一度体を反転させ、振り向きざまのローキックでクライスの鳩尾を蹴りあげた。

「がああっ！……なるほど、やるじゃん。エクササイズは卒業だ！」

言うなりクライスは襲いかかってきた。しかし、今まで彼が遊んでいた事は明らかだ。形勢はまたもやひっくり返った。ナギサはエビルウィップを叩き落とされ、続けざまの斬撃を叩き込まれて大きくよろめいた。

「今度のはちよつと痛いよ?」

『STRIKE VENT』

クライスの右腕に、アビスラッシャーの頭を模した、アビスクローが装着される。すると、ユートと戦っていたアビスラッシャーは現れたアビスハンマーと合体し、大型のサメモンスター、アビスドンになる。

「はああああ、おりゃあ!」

アビスクローが突き出されると同時に、アビスドンが水流を吐きだす。あまりの勢いに二人は弾き飛ばされ、地面にぶざまに倒れた。

「良いじゃん。少しは見直したよナギサちゃん。でも、君はもう息を引き取る。」

クライスがアビスソードを振り上げる。が、その攻撃はユートのベノバイザーに防がれていた。

「アア? 往生際が悪いなあ、チビスケが。じゃあまず君から…」

その時だった。いきなり、クライスに斬撃が叩き込まれる。

「があっ!」

レンだった。ウイングランサーを構えてクライスを見据える。続いてアレンもやってきた。

「チッ! またこのパターンかよ。じゃあネ。」

「オイ、待て!」

クライスは近くの鏡を通って去っていった。

「アレン、ナギサとユートだ。」

「そうだな…おい、大丈夫か?」

「ああ、何とか…」

「う…ッ…」

その後、4人は変身を解いて近くの通りを歩いていた。

「なあ…さっきは一人で別行動を取ろうとしてすまなかった。」

ナギサが、謝罪を口にする。答えたのはレンだった。

「力を合わせるんだ。4人が協力しなければ俺達は勝てない！」

「ああ、もう忘れないさ。許してくれ。」

「分かってくれればいい。」

ナギサが差し出した手を、レンが握った。

「よし、じゃあ皆でピザでも食おうぜ。」

「了解。」

「そうだな。」

「ホントか？」

「ああ。ただし、ユートはいい加減、遠慮を覚えろよ？」

アレンが笑いながら答えた。

「分かった！」

一方その頃、要塞にゼイビアックスが戻ってきた。クライスが、氷嚢を持って座っている。

「新しい仲間を待てなかったようだな。」

「頭痛の種です。ウイング野郎とドラゴン君、それからコブラちゃんにまた邪魔された。」

「…だが、その心配は無用だ。紹介しよう。」

すると、二人のライダーがそこに現れた。片方は青いデッキをベルトにつけたトラのライダー、もう片方は巻貝の様な角をつけ、肩にファアの様なものがついたレイヨウのライダーだ。

「仮面ライダーアックスと仮面ライダースピアだ。仲良くな。」

「今度は使えそうですね。」

アックスとスピア　ダニーとアルバートはクライスを見据え、クライスも二人を見据えていた。

## 第22話 仮面ライダーブルース（後書き）

### 次回予告

レンの前に現れたチヨウ兄弟。だがレンは二人に肉弾戦を挑んで圧倒、素人呼ばわりされたチヨウ兄弟はリベンジの炎を燃やす。一方、ナギサは自分の力不足を自覚し始め、苦悩し始めていた…。

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『チヨウ兄弟』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第23話 チョウ兄弟

アレンの部屋にピザが届くのに、そう時間はかからなかった。ちなみに注文したのはソーセージで、耳にチーズが入ってる奴だ。

「ありがとう。」

「ピザ！ピザ！」

真面目にお礼を言うナギサと、はしゃぐユート。レンはと言えば、ピザを手にとってしげしげと眺めていた。

「ベントラにはこういうピザとか無かったのか？」

「ああ、無かったな。」

レンはユートの問いに答えると、少しニヤリとしてこう付け加えた。

「美味いピザならあったんだが。」

その瞬間、アレンとナギサは嘔き出していた。

「ふふつ。」

「聞いたか？レンがジョーク言ってたぜ。」

「ははは。」

と、ナギサが突然、レンにたずねた。

「そう言えばレン、貴方は仮面ライダーになる前は何をしていたんだ？」

「きつとオニキョウカンだ！」

「犬の散歩屋とか？」

「靴の販売員？」

ユート、アレン、ナギサの答えを聞き、レンは少し笑ってから返答を返す。

「実は、ライダー一筋だね。幼いころ、仮面ライダーに選ばれたんだ。」

「そんなときから、なのか？」

「戦士になるって、両親は反対しなかったのか？」



アレンの言葉を聞いて、思わず不思議そうな顔で返したのはユー  
トだった。

「何言ってるんだ、戦士に選ばれるのは名誉な事だろ?」

「ユートの言うとおりだな。ベンタラでは、仮面ライダーに選ばれ  
るというのは、最高の栄誉と、評価を意味する。」

「スツゲエな、俺とは大違いだ。学生の頃はトラブルメーカーだっ  
たよ。問題ばっか引き起こしてた。」

「何をしたんだ、貴方は?」

「悪事ってほどはしてないよ。ひどいのは一度、フットボール場で  
BMXを乗りまわした。チョー楽しかったよ。」

ユート以外は、思わず笑っていた。

「なんだ、そのびーえむえつくすって?」

「バイクだよ。ホイール付きの。」

「それだけじゃないだろ?」

「ただ、試合中だっただけさ。ウチの学校は選手が一人多いって、  
5ヤードのペナルティ喰らってさ。」

と、アレンは少しうつむいた。

「正直、退学になるかと思った。けど、父さんが土下座までして校  
長に頼み込んでくれたから、助かったんだ。」

「へえ、父親が、土下座までして…」

「後でゲンコ2、3発は喰らったけどな。でも、父さんが、ピンチ  
から救ってくれたんだ。ユートはどうなんだ?なんかやかしかした事  
あるか?」

「無いよ!僕はいい子だったからな!」

ユートの答えはかなり快活だった。と、レンはナギサが少し表情  
を曇らせているのに気づいた。

「ナギサ?」

「ああ…ナギサの過去にはあまり触れないでやってくれ。」

「あ、いや、いいんだ。…ピザをありがとう。また明日。」

「あ、もう帰るのか。ああ、それじゃアな。」

「また明日！」

「じゃアな。」

ナギサは部屋から出た。閉まるドアの音が、妙に重く聞こえた気がした。

ナギサは、何処を目指すでもなく、フローダーを気の向いたままに走らせていた。

相手の動きを読めれば、みだりに呼吸は乱れない。

やるじゃないか、見直したよ。けど、君たちはもう息を引き取る。

ナギサが思い出していたのは、レンとの訓練、そして、クライスと戦い、ぶざまに負けた記憶。

彼女は近くの公園でフロードーダーを止め、眼下の街並みを一望できる丘まで来た。ヘルメットを抱え、そっと呟く。

「見ていてくれ、ワイナール。私にも、出来るよな。……やってみせる。」

ナギサが去ったすぐ後、レンは二人に声をかけた。

「ずっと考えてた。俺達にゼイビックスが倒せるかは分からない。仮面ライダーに未来があるかも分からない。だが、もしあるのなら、お前達も加わってほしいんだ。」

「え？ どういう事？」

「……正式なベントラのライダーとして、迎えたい。本物の、仮面ライダードラゴンナイトと、仮面ライダーストライクになるんだ。」

レンの言葉に、二人は思わず耳を疑った。

「…認めてくれるのか、僕らを？」

「光栄だよ……」

が、レンの言葉には続きがあった。

「決める前に最後まで聞け。この戦いが終わったら、ベントラに来てもらう。12人のライダーのメンバーとして列せられる。グラー

ルとはお別れだ。お父さん、村のみんな、リトルウイングの人たち、友達、ほかの人ともだ。」

「……………」

「確かに、考える時間があるぞ……」

「ゆっくり考えるといい。…また明日。」

「じゃあ、僕もそろそろ……」

「ああ、また、明日……」

2人が去っていった直後、アレンの頭には様々な思いが去来していた。棚にある、父の写真に目を向け、言葉を絞り出す。

「どうしよう、父さん……」

レンの言葉は重かった。戦士としての栄誉が、皆か…

そのすぐ外、並んでいた3台のバイクに乗っていたのは、ダニー、アルバート、そしてクライス。前を走り抜けていくレンのバイクを見て、ダニーがに奴きながらクライスに話しかける。

「アイツやな。」

「そうだよ。」

「なんや弱そうやな、あんた一人で十分とちゃうん？」

「アホかアルバート、俺らプロやろ。」

「言ってみただけやん。」

「いいって。」

クライスは、なだめるように言った。

「プロの仕事ぶりを期待してるよ。ハハッ。」

「任しとき、すぐに片したるわ。」

「せや、ついでに後の銭も積んどいてや。」

「アルバート！」

「堪忍や兄ちゃん、解つとるわ。」

単純な奴らだ。將軍がああいうのも分かる。

バイクで走っていったチヨウ兄弟を見送ると、クライスはその顔に残忍な笑みを浮かべ、思った。

「オツムは軽いが、そこがいい、か……」

レンは、おってきた1台のバイクにすぐ気付いた。振り切ろうとすると、行く手をさらにもう1台が阻む。前にいる方がヘルメットを脱ぐと、レンは相手にすぐ気付いた。

「まいど。儲かりまつか？」

「仮面ライダースピアか。」

「知つとんかいな。」

とその時だった。

「はアアアアアアッ！」

ダニーが、アルバートに向き直ったレンの背後からいきなり飛び蹴りを見舞った。構える暇すら与えられなかったレンはアルバートの方によるめき、そのまま蹴りを受けて吹っ飛ばされる。しかし、すぐに体勢を立て直して、近づいてくる二人を見据える。

「ほな俺は？知つとんか？」

ダニーがそう言ったのを合図に、二人がデッキを構える。しかし、レンはそのデッキを素早くひったくってかざした。

「二人とも知ってる。……素人だな。」

「返せや！」

ダニーのパンチを、レンは的確にいなし、体を素早く反転させてアルバートの蹴りをかわす。パンチのふりをしてスピアのデッキを目の前にかざし、アルバートが気を撮られているウチに接近して来たダニーも蹴飛ばす。不意にレンが、スピアのデッキを空中に放り投げた。アルバートはキャッチしようと飛びあがったが、その隙にがら空きになった胴に蹴りを叩きこまれ、彼の目の前に落下したデッキはレンに蹴飛ばされて最寄りの窓に突っ込み、ベントラ目掛けでまっしぐら。

「弟をコケにしよったな！」

ダニーがいきり立ってレンを蹴ろうとするが、全て軽い身のこなしでかわされる。そして、レンはアルバートをベントラに蹴り込むと、自らもダニーを押さえ込んで窓に飛び込んだ。

ベントラに到着したレンは密着していたダニーを蹴り飛ばし、落ちていたスピアのデッキを掴んで走り去っていった。

「待たんかいゴラあ！」

兄弟の声がハモる。

「逃がすなや！」

「解つとるがな！」

ダニーはレンをまっすぐおい、アルバートは反対側から迫った。すぐにレンは挟み撃ちにあつたが、二人の拳と蹴りをかわして横にローリングすると、兄弟を見据えて問いかけた。

「ゼイビアックスに何を約束された？」

「分け前や。史上最大の強盗をやる。」

「そのためには、あんたが邪魔なんや。」

「言っておくが、ゼイビアックスはお前らを騙すつもりだ。出来れば仲間になってほしいが、何でだろうな、心からはそう思えない。」

「そんなもん知るか！」

「俺もだ。」

と、レンはいきなり二つのデッキを後ろの吹き抜けに放り投げ、構えの姿勢を取った。肉弾戦に徹するつもりらしい。

「あ。」

いきり立った兄弟は舌打ちしてレンに飛びかかったが、ダニーはカウンターのパンチを叩き込まれて柱に頭をぶつけ、アルバートは正面から組みふせられて吹き抜けに投げられ、積み上げてあるダン・ボウルの上に落下する。レンはそれを見ると、踵を返して去った。

「素人どもが。」

チョウ兄弟はデッキを回収してレンを追いかけたが、レンはバイクに乗って去って行ったあとだった。彼らも自分のマシンに乗ろうとしたが、2台の車輪が一つに縛られていた。それも片結びで。

「縛りよった！」

と、窓の中からクライスが出てきた。どうやら、監視していたらしい。

「ハハッ、どうだった？プロのお二人さん？」

「次は仕留めたる。はろてもろた分」

「働くで、きっちり。」

アルバートはクライスを睨みつけ、もう一度繰り返してから去っていった。

「きっちりや。」

アレンがナギサを見つけたのは、リトルウイング宿舎からそう遠くないところだった。

「ナギサ、こんなところにいたのか。今平気？」

「あ、アレンか。ああ、平気だ。…なあ、こないだは、帰り際に気まづくなつて、すまなかつた。」

「良いよ、別に気にしてないし。」

「……ワイナルは、今の私を見たら……」

「きつと誇りに思ってくれるさ。グラールを救うなんて意義のある事だしな。」

「同じ事を考えてた。」

とその時だった。頭の中に、例の気配が響く。

「……行くぞナギサ。」

「ああ。」

二人はお互いに頷き、デッキを近くの窓にかざした。赤とライトレッドの電光が、二人の腰でベルトを形成する。

「KAMEN RIDER!」

そして、アーマーが形成され、仮面ライダーへと変身完了するや、窓に飛び込んでいった。



ナギサは、触手の様な物にからめとられ、自由を奪われていた。

敵は鳳凰型の上級モンスター、ガルドサンダー。

突如、アレンのドラグソードが、ナギサにから待っていた触手を切断した。ナギサは身が自由になるや否やガルドサンダーに飛びかかったが、ガルドサンダーは胸から炎を吐きだしてナギサをけん制すると、空中に飛び上がって炎の嵐を爆撃機のように見舞った。

「うああっ！」

が、ナギサはすぐに体勢を立て直して、ガルドサンダーに突っ込んでいった。

「待てナギサ！チームワークだ！」

「私にやらせてくれ！モンスターに手を焼いては、クライスには勝てない！」

『COPY VENT』

ナギサの手にドラグソードが飛び込むと、彼女は見事な剣技でガルドサンダーを追い詰めた。数回の剣撃の応酬で、あっという間に形勢が逆転する。

「見ていてくれ、ワイナール！」

『FINAL VENT』

飛来したエビルダイバーに、ナギサが乗る。ガルドサンダーも炎を纏って突っ込んできたが、ナギサの繰り出したファイナルベント、ハイドベノンはガルドサンダーを直撃し、ガルドサンダーは粉々に吹っ飛んで行った。

「ハア…ハア…クツ…」

「ナギサ…無茶するからだ。」

「あ、ああ。」

アレンとナギサは、はいつてきたのと同じ窓から出てきた。

「大丈夫？」

「ああ。」

「本当に？」

「ああ、大丈夫だ。」

「そっか、分かった。」

「あ、オイ…」

ナギサは、去っていくアレンの背中を見ながら、自分の力不足を自覚し始めている事に気付いた。

未確認疾患センターの病棟にはいてきたアレンは、ひかれたカーテンの向こうにフランクがいない事に気付いた。

「なあ、父さんはどこ!？」

と、アレンは、空っぽのベッドに何かが置かれている事に気付いた。

それはレリーフの入った丸い金属板だった。凶暴な鯨が描かれた、

丸い金属板。

「クライス……！！」

## 第23話 チョウ兄弟（後書き）

### 次回予告

クライスはナギサに取引を持ちかけるが、交渉が決裂して戦いへと持ち込まれる。その闘いから途中で逃げた事に自責の念を抱くナギサは、次は皆で挑もうとする。しかし、圧倒的な力を持つクライスと、新たに加わったチョウ兄弟に4人は追い詰められ、そして、ユートに向けてクライスの無情なファイナルベントが放たれる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『センパーファイ』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第24話 センパーファイ（前書き）

この話は僕が原作で1番好きだった話です。

## 第24話 センパーファイ

ナギサは近くの階段に座り、ずっと何かを書いていた。すると、後ろから声をかけられた。

「大丈夫か？何だか辛そうだな。」

「ユート……？」

ナギサは振り向いた。が、そこにいたのはユートではなく、クライスだった。ユートと瓜二つの顔に、わざとらしく友好的な笑みを浮かべている姿は、彼の本性を知っているナギサをかなりイラつかせた。

「クライス……！」

「落ち着け、良いから落ち着けて。戦う気はない。話がある。」

そう言ってクライスはナギサのすぐ横に腰を下ろした。ナギサは、スティングのデッキを体の後ろで持って、クライスと向き合った。

「君が思うように戦えないのは、欠片を失ったからだろ？…君は力を取り戻せる。」

「何を言っても無駄だ！ゼイビアックスの手下に耳は貸さない。」

「良いから。將軍に、君を騙すのは無理だと言った。仲間想いの君を騙すのは。そうだろ？」

「そうだ！」

「戦いの本当の意味を説明すべきだった。將軍のテクノロジーについても。」

ナギサは一瞬、その話に関心が向かった。が、彼女に気を変えるつもりはなかった。

「テクノロジー？どういう事だ。」

「あの方の技術力を持つてすれば、僕達人間の体なんかどうにでもなる。」

「引き換えは何だ！」

「別に何も。ただ、ウィングナイトをちょっとね。」

「ちょっととはどういう事だ！」

ナギサは、クライスがいつまでたっても本題を持ち出さない事に、内心かなり腹を立てていた。

「アイツともっと、親しくなって欲しいんだ。気を許して隙が出来たら……」

クライスは懷からブルースのデッキを取り出し、カードを1枚抜いてナギサに見せた。青と金、二つの鯨の紋章が刻まれているそのカードが何かは、すぐに分かった。

「ファイナルベント。晴れて君は力を取り戻せる。」

「それって、世界全体を売り渡せということだろう。」

「気にするな。あっちの世界の話さ。」

それを聞くや否や、ナギサが立ちあがった。クライスに向き直り、話します。

「センプーフアイと言う言葉がある。お前は知らなくても無理はないだろうな。ある人が教えてくれた。」

クライスは首をかしげた。言っている事が分からないという様子だ。

「仲間は裏切らない。それが私の信念だ！」

そしてナギサはデッキを取り出し、クライスの方に突きつける様にして構えた。ライトレッドの閃光が迸る。

「はぁ、あつそ。」

「KAMEN RIDER！」

ナギサが変身すると、クライスもデッキを取り出した。

「懲りない奴だね。」

クライスのデッキから、青い光が湧き出た。

「KAMEN RIDER！」

デッキがスライド挿入されると、青いリングがクライスの体の周りを回り、ブルースのアーマーを装着させた。

「アッハハハ！さぁ、カーニバルだ！遊んであげるよ！」

「来い！」

「あーあ、本気で闘<sup>ヤ</sup>るつもり？」

「他人の心配か…自分の心配をするんだな！」

「ハッ、親切で言っただけなのにさ！」

そう言うが早い、クライスはアビスバイザーをいきなり突き出した。口の部分から水流の様な衝撃波が発射され、ナギサの体をまともにとらえた。

「グアアッ！」

その隙にクライスはナギサとの距離を一気に詰めた。かわす間もなく、ナギサの体に幾度も幾度もアビスバイザーの牙が叩きつけられる。

「ハッ、何が信念だ。せつかくあげたチャンスが無駄にしたね、アハハ。」

そして、クライスは1枚のカードを抜いた。先ほどナギサに見せたのと同じカードだ。

「タイムアップだよ。」

が、ナギサもカードを抜いていた。

「じゃあネ、ナギサちゃん。」

『FINAL VENT』

「クッ！」

『ATTACK VENT』

すると、突然飛来したエビルダイバーがクライスに後ろから衝突し、その体を大きくよろめかせる。ナギサはその上に乗ると、凄まじいスピードで遠くへと消えて行った。

「オイ、戻って来い！チッ、遊び甲斐の無い奴だ！」



エミリアの家。シズルはエミリアがそこにいるのを見つけたが、はいるとなると急に気がくじけ、外の窓から見ていた。

一方エミリアは、携帯の着信履歴がかなりたまっていたのに気づいていた。

「シズルだわ。」

そこにいたクノーは、シズルがエミリアに対してかなりいら立っている事を知っていた。

「まだ、エミリアの事を怒っているのか。」

「あたしはただ分かってほしいだけ！無理を言ってるのも分かる。実際見てなければ、あたしだって信じられないし。」

「それでは、アレンに頼んで目の前で変身してもらえばどうだ？」

「アレンは見世物じゃないの。」

「それは、そうだが…」

と、その時だった。アレンが血相を変えて飛び込んできたのは。

レンが、それを置きかけて、やはり入ってきた。

「父さんが病院からいなくなった！さらわれたんだ！」

「さらわれたって、誰にだ？」

レンの問いに対して、アレンは鯨のレリーフ入りの金属板を机に叩きつけた。

「クライスか…」

丁度見ていたシズルは、あきれた様子で壁にもたれかかる。

「ハア…」

「2度も誘拐されるなんて…。敵の基地に乗り込んで、カタをつけないと！」

その時、ナギサが、ユートに支えられて入ってきた。

「私も賛成だ。作戦があるのならやろう。皆で。」

「僕も同じだ。その方がいい！」

が、レンは否定を表わした。

「クライスとゼイビアックスだけでも手ごわいが、新しいライダー

が増えた。仮面ライダーアックスとスピアだ。一度に相手をするのは無理だ。」

と、その時。二人の人間が、部屋に入ってきた。片方は単発で、もう片方はニット帽をかぶっている。

「カード遊びでもどや？」

「望むところだ！」

いきり立つナギサを腕で制止し、レンが説明した。

「仮面ライダーアックスと仮面ライダースピアだ！」

「父さんは何処だ！」

アレンが問うたが、チヨウ兄弟は失笑しただけだった。

「家出でもしたんか？」

「それは手のかかるオトンやな。」

「でも、ここじゃ迷惑だな。大体、狭いし。」

最初に動いたのはレンだった。シズルが見ている窓の前に立ち、そこに突っ込む。シズルは思わず顔を腕でかばったが、ベントラに飛び込んだレンが、シズルとぶつかる事は無かった。

「…え？」

そして、アレン、ナギサ、ユート、ダニーも続く。そしてシズルは、彼らが消滅。実際はベントラに移動しただけだが、するのを見届けた。

最後はアルバートだった。既にデッキを取り出していたアルバートは窓の前でデッキを構えた。茶色の電光が、アルバートの腰でベルトを形作る。

「KAMEN RIDER！」

ゆっくりとスライド挿入されたデッキが回り始める。そして、エネルギーのリングが出現して回転し始めると、その衝撃で本棚が揺れ、立てていた本や飾っていた小物が、どさどさと音をたてて床に落ちる。

「ほな、行くで！」

そして、スピアとなったアルバートもまた、窓に飛び込んだ。

「……嘘、だろ……」

シズルは、その場を立ち去った。見てはならないものを、見てしまったような気分だった。

部屋の中は、棚から落ちたものでひどく散らかっていた。

「変身するといつもこうなるの。はぁ、おっさんに叱られる……」

アレンは、同じ窓から出てきたライダーがいない事を確認すると、仲間を探して走り出した。

「何処行った？」

するといきなり、丸い角を持ったレイヨウの様なモンスターが、アレンを組みふせた。

別の所から出てきたナギサは、不意に誰かの気配を感じ取った。物陰に隠れ、様子をうかがう。拳を握りしめて飛びだしたが、そこから出てきた誰かはナギサの腕を抑えて壁に押し付け、腰に刺さったレイピアを引き抜いてナギサの首筋に突きつけた。レンだった。

「ちょ、ちょっとレン！私だ！」

レンは、相手がナギサだとすぐに気付き、武器を納めてナギサを手招きした。

「アレンとユートを探そう。」

一方アレンは、そのモンスター、マガゼールを追い詰めていた。キックを一撃放ってマガゼールをカメに叩きつけると、ドラグバイザーを開いてカードを挿入する。<sup>ベントイン</sup>

「さっさとけりをつけるぞ。」

『FINAL VENT』

そしていつも通り、飛びあがったアレンをドラグレッダーが炎で押す。ドラゴンライダーキックを叩きつけられたマガゼールが粉々になり、爆炎と共に消し飛んだ。

「ハア。」

と、その時だった。

「次はこつちや！」

『SPIN VENT』

ドリル状の角がついた手甲型武器、ガゼルスタッフを振りかざしてアルバートが飛びかかってきた。後ろからの奇襲攻撃をかわしきれなかったアレンに、さらなる追撃が叩き込まれる。

「クソッ！」

『STRIKE VENT』

腕に装着されたドラグクローを、アルバートに直接たたきつけた。続いて横から一撃お見舞いし、近くの柵に押し付ける。

「兄ちゃんが黙ってへんで！」

「お前ら兄弟か！？」

「兄ちゃん！助けてや！」

「俺の弟に手え出すなや！」

近くにいたダニーが飛びかかったが、間一髪のところユートが立ちふさがった。

「行かせない！」

ダニーとアルバートは二人揃うと、早速相手に襲いかかった。ついさっきの攻勢がウソの様だった。チョウ兄弟は単体では素人

同然かもしれないが、二人揃ったとたんに力が幾倍にも増した。

「ウチらチヨウ兄弟をなめんなよ！」

「アルバート、ストライクの小僧はどうでもいいけど、ドラゴンナイトは適当にあしらうだけにしとき。ブルースの言いつけや。」

「お目目汚しくらいええやん！」

その時、いきなり飛びかかったユートが、アルバートを抱えて橋から飛び降りた。二人はもつれあったまま斜面を転がって行った。そしてアレンは、ダニーの振るう戦斧、デストバイザーの一撃を喰らって吹っ飛ばされた。

「ほらほらどうした？」

武器を召喚する暇すら与えられず、アレンに重い攻撃が叩き込まれた。

「ええ加減にせえや、ボン。」

「待て！」

レンと、ナギサがいた。駆けつけたのだ。ダニーはそれを見ると、黙ってカードを抜き、デストバイザーに挿入した。ヘントイン

『STRIKE VENT』

ダニーの腕に、トラの腕の様な武器、デストクローが装着された。それを振り回し、勇躍レンとナギサに飛びかかる。

避けるのはさほど難しくは無かったが、不意をつかれた一撃はとつともなく重かった。レンが吹っ飛ばされ、ナギサも思わず膝をつく。

「さあ、こつちの番だ！」

『SWORD VENT』

アレンの手に、ドラグソードが飛び込む。それをダニーの背中に振り下ろすと、予想通りダニーはアレンを追ってきた。

「こつちだ！」

そのまま、離れた所まで移動したアレンは、ダニーと戦っていたが。

ダニーの攻撃は、落ち着いてみればあきれるほど単調だった。避

けるのは拍子抜けするほど簡単で、攻撃の後の隙もかなり大きい。大振りの一撃をかわし、アレンはダニーに切りつけた。そのまま何度も何度も斬撃を叩き込み、止めのフルスイングでダニーを壁に叩きつける。

「グあああ！」

アレンはドラグソードを左手に持ち替えると、カードを抜いた。そこには、ドラゴンナイトの紋章が刻まれていた。

「ハア…ハア…ハア…」

しかし、アレンはカードを持った手が止まっているのが分かった。そして、それが震えているのも。

「ハア…ハア……やるんだ…止めを刺すんだ…ハアッ…やるしかないんだ…」

が、結局アレンには出来なかった。カードを戻してドラグバイザーを閉じると、そこに背を向けて駆け出した。

レンとナギサは、アルバートと戦うユートを見つけた。

「ハッ、何やハンサムばかりやな。」

「これは正義の証だ！」

ユートの拳が、アルバートを捉えた。

「加勢するぞ！」

「ああ！」

ところが。

「何すんねんアホ！」

『ATTACK VENT』

アルバートが、膝のアーマー型召喚機、ガゼルバイザーにカードを<sup>ベントイン</sup>挿入すると、近くの窓から、様々なレイヨウのモンスターがうじゃうじゃ現れた。

「ナギサ、お前は止めておけ。」

「やらせてくれ。」

「これは命令だ、下がってろ。」

「私がやる！」

レンの命令も聞かず、ナギサは突っ込んでいった。

『COPY VENT』

レンの手の中のウイングランサーをコピーし、ナギサはレイヨウ達を相手取って戦い始めた。が、やはり数の優位を覆すのは並大抵ではない。

「ナギサ！逃げろ！」

「私は一度、クライスとの戦いから逃げた。2度も同じ事をする気は無い！」

「逃げるナギサ！ベントされるぞ！」

「私にやれる事は、やっておきたいんだ！」

その時だった。ユートがナギサのもとに駆け寄り、ベノサーベルを振りかざしてレイヨウを次々斬り倒した。

「おねえさんから離れる！」

締めたとはかりに、ナギサがレイヨウをウイングランサーで切りつけた。が、蹴りを受けてよろめいたナギサは、すぐ近くでアドベントの音声を聞いた。

『STAN VENT』

次の瞬間にナギサを感じ取ったのは、体中がしびれるような感覚だった、鋭い電撃の様な感覚が背中をかけあがると、ナギサは動けなくなった。

「雑魚はそこで寝てな！」

クライスだった。

「よお、遅かったな。」

ユートはクライスを切ろうとしたが、衝撃波を次々に叩きつけられ、近くの高くなった花壇に叩きつけられた。

「ユート！」

アレンはそこにたどりつき、割って入ろうとした。だが、そこにダニーが立ちふさがった。

「通さへんで！」

「またお前か、どけえ！」

そうこうしている間に、クライスはカードを抜いた。青と金のエンブレムが刻まれている。

「もっと楽しませてほしかったよ、ユートくん。アハハハハハ！」

ナギサは、その光景を見ながら、体を起こそうとしていた。

「…立て…」

『FINAL VENT』

「よせ、止める！」

「ナギサあああ！」

アレンとレンの叫びも空しく、カードは挿入<sup>ベントイン</sup>された。

「立つんだナギサ…早く…」

「君とはもつと遊びたかったよ。じゃあね〜！」

現れたアビスハンマーとアビスラッシュヤーが合体してアビソドンとなり、飛び上がったクライスが、その変形した頭部に合体する。

「お前の信念は何だ…皆を守るんだ…友達を…大切な…大切な人を！」

クライスが水流を纏って、ユートに突進する。

と、その時だった。ナギサがユートの前に立ちはだかり、腕を広げて彼を庇った。

そして、必殺の突進攻撃、『アビスダイブ』は命中した。

「グあああああ！」

「ナギサ！」

「おねえさん！」

ナギサは大きく吹き飛び、地面に叩きつけられた。

「ハア…ハア…クツ…ワイ…ナー…ル…」

恐怖、不安。何故かナギサの声から、そのような感情は読み取れなかった。むしろ、安らぎや、安堵すら感じる。

「ワイナール…私…やれたよな…やっと守れたんだ…私は…」

「おねえさん止める！行っちゃ駄目だ！」





「  
「  
「  
「  
ベントラとグラールに。  
「  
「  
「  
「

ベントラとグラールに。

## 第24話 センパーファイ（後書き）

### 次回予告

ナギサを失い、悲しみにくれるユートは、ナギサが残した手紙を発見する。一方、さらわれたフランクの事を思い出して探すとするアレンに、チョウ兄弟が立ちはだかる。そして、クライスからエミリアに、フランクの居場所が伝えられた…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『前線からの手紙』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## 第25話 前線からの手紙

エミリアは、散らかった部屋を片付けていた。

「クノーさん、ぼーっとしてないで手伝って！」

当のクノーは、しばらく茫然とした表情をしている。

「信じられない。仮面ライダーは本当にいたんだな……」

「当たり前でしょ！……あたしの話、信じてなかった？」

「それは！もちろん信じてはいたが……やはり実際に見ると違う。まさにここで変身したんだから。」

と、その時だった。レンとアレン、そしてユートが入ってきた。

3人とも平静を保とうとしていたが、エミリアは何かがあった事をすぐに見抜いた。3人の表情が、いつになく重かったからだ。

「アレン、レン、ユート。大丈夫？」

そしてエミリアは、一人が欠けている事にも気付いた。

「……ナギサはどうしたの？」

「……ベントされた……」

答えたのはレンだった。幾ら冷静になろうとしても、その声から、悲しみを見逃すことなど出来ない。

「……ベント……？死んだという事か？」

「……考えようによつてはそれよりひどい。別次元に閉じ込められて、そして二度と出られない。」

「……クライスは僕を狙ってた。でも、おねえさんが僕を庇ったんだ……僕のせいなんだ……僕のせいでおねえさんが……」

「俺のせいだ！俺がアックスをベントしてれば、割って入れた！ナギサもユートも二人とも助かったんだ！……俺は仮面ライダーにふさわしくないんだ……」

「アレ、ユート、自分を責めるな……全責任は俺にある。」

それだけ言い残し、レンはその場を後にした。その姿は、誰が見ても痛々しかった。

「…ナギサは自分を犠牲にしたんだね……」

ゼイビアックスの要塞。クライス、そしてチョウ兄弟が転送機から出てくる。彼らは何をしたかは、その場にいたゼイビアックスにも何となく分かった。チョウ兄弟が互いの拳を合わせる。

「さて、いい知らせかな？」

「一人倒しました。チョウ兄弟が援護してくれたおかげです。」  
「役に立つやろ？」

「次は俺らにもやらせてーな。おいしいところをクライスに持つてかれたからな。俺らはまだ切り札を切つとらへんのや。」

意気込みながら、アルバートが喋る。

「君たちの意気込みは素晴らしいが、ルールナンバー1を忘れてはいないかな？」

「『ウイングナイトとストライクを倒すまでドラゴンナイトには手を出すな。』」

「よろしい。」

ダニーの言葉は少し棒読みっぽかったが、ゼイビアックスは聞こえなかったことにした。

「アルバートくん？」

「ああ、わかっとなるがな。」

ゼイビアックスは、自分の後ろをちらと見た。そこには、車いすに乗せられ、うつろな目をしたフランクがいた。

「そろそろ次の罠を張らなくてはな。」

「了解。」

クライスがやりと笑い、ケータイを手にして立ち去って行った。

「俺らには何やらしてくれるん?」

「君達には、ドラゴンナイトを見張ってもらう。」

そして、ゼイビアクスはここだけ強調して、付け加えた。

「ただ、見張るだけだ。」

「ああ、わかつとるがな。」

「止めとけアルバート。」

そしてチヨウ兄弟が出て行った後、ゼイビアクスはフランクの方を向き、嘆息を漏らした。

「ハア、やれやれ、フランク。」

ユートは、自分の部屋に戻っていた。そこには、昨日まで泊まっていたナギサの荷物がまだあった。その中の鞆から突き出ている棒を抜いてみる。ユートがナギサにチームワークの大切さを諭した時の、木の棒だった。と、ユートは、便箋が鞆から突き出ているのを見つけた。

「…手紙?

……ワイナールへ。お前がいなくなってから……」

お前がいなくなってから、もう随分経つな。手紙と言うものは、もらったら返事を書かねばいけないという事を知ったので、返事を書くことにした。でも、出す相手のお前は、もういないからな。だから、これは、出さない手紙だ。

お前は分かっていたのか？私が再び、戦いに身を投じることになると。分かっていたから、私に、あんなによくしてくれたのか？…いや、すまない、忘れてくれ。

私はある男に出会った。その時、チャンスをつかんだと思った。このグラールをもう一度救い、お前に恩返しするチャンスを。けど、私は良いように使われ、もてあそばれていたただけだった。その時の私は、道化に過ぎなかったんだ。

でもそんなとき、私に真実を教えてくれた人たちがいた。どんな言葉よりも、彼らは行動でもって示してくれた。真実と勇気と、そして真心を。皆は寛大だった。どんなに私が足を引っ張っても、どんなにぶざまな戦いしか出来なくても、私を必要としてくれた。私は、生涯で一番大切な物を手にしていた事に気付いたんだ。心から信じあえる友達を。どんな犠牲を払ってもいいほどの友達を。

昔、お前が教えてくれた言葉、その意味が、ようやく分かったよ。センプーフアイ 常に忠実であれ

私は彼らを裏切らない。絶対に。

私はせめて、誰かの役に立ちたかった。私と言う人間がいた事に、少しでも意味を持たせたかったんだ。でも、そんな事はどうでもよ

くなつた。ヒロインになんてなれなくてもいい。だって、自分の命を投げ出しても、守りたいと思える、友達が出来たんだ。それは全て、お前のおかげだと思っている。お前とであえたから、そしてお前が私に色んな、生きていることの楽しさを、大切な人といふことの喜びを、教えてくれたからだ。

ヒロインになれなかったとしても、今、私はとても幸せだ。だから、私はお前に感謝している。

お前に出会えてよかった。皆と出会えてよかった。そして私は、生まれてきて、よかったよ。

### 私の一番の友達へ

ナギサ

「おねえさん……何だよ……何で……僕はちつとも……幸せじゃないのに……」

またしても、彼は泣いていた。

ナギサは、自分達が思っていたよりもはるかに、仲間を想っていた。だからこそ、こみ上げる涙が止まらなかった。こんなにも自分達を想ってくれていたナギサを、守れなかった。自分のせいで、失ってしまった。だから涙が……止まらなかった。



「君はヒロインだったよ……おねえさん……」  
ポケットの中の、ナギサのデッキを握りしめ、泣きながら、ナギサを想った。守りたかった、でも守れなかった人を。

レンは、ビルの屋上の、パイプの上に腰かけていた。

「俺のせいだ……リーダーの器も無いのに……俺は……」

逃げると言っただんたろ。

「!?」

反射的に横を見たレンは、近くの鏡の中に、自分の姿を見つけた。もちろん現実には存在しない。だが、彼はそれに歩み寄った。

「十分じゃなかった。無理矢理返すべきだった!」

彼女も戦士だ。危険は承知の上だ。

幻影は話した。その声は、幾重にも響いていた。

「俺が命令めた事を言うから、戦士気取りになっただけだ!」

指揮官が犠牲をためらってどうする? 戦争なんだ。

「俺は指揮官じゃない、成りたいとも思った事は無い! そんな役割は御免だ!」

他に誰がなれる? お前しかいないんだ。

「やめる事は出来ないのか?」

影はかき消えた。

「おい。……オイ!」

いきり立ったレンは、拳をその鏡に叩きつけようとした。だが、デッキを所持するレンの拳は、鏡を突き抜けたただけだった。

バイクで走っていたアレンは、後ろから追ってくる2台のバイクに気付いた。やがてそれはアレンに追いつき、片方のドライバーが声をかけてくる。

「よお、ボン。」

「クソっ、お前らか！」

チヨウ兄弟だった。

アレンはマシンを加速させ、二人を巻こうとした。

「回れ！」

「了解！」

ダニーの指示で、アルバートが別ルートに抜ける。

アレンはそれに気付かず逃げていたが、いきなり前方からやってきたアルバートに逃げ場を奪われ、マシンを降りる。

「なにやってんねんや。お子ちゃまは一人で出歩くもんやないで。」

「俺は二十歳だ！……お前らなんか、怖くない。」

「……いちびんなや。」

すると、いきなりダニーが言いだした。

「ベントされたのは誰やったかいな？あの、眼帯でナイスバディのデユマ子ちゃん？お前なんかイチコロや！」

「お前ら腐ってる。」

「友達が恋しいんかいな？確かに、あのお嬢ちゃんもベントされる時はピーピー泣いてはったなア！」

すると、いきなりアレンがダニーの顔面に本気の拳を見舞った。ダニーは勢い余って吹っ飛ばされ、近くの花壇のすぐ横に倒れる。

「……あの時ベントしときゃよかった。……もう迷わない。」

ダニーはアルバートの手を借りて起き上がった。そして、アレンを指さしたアルバートは挑発するように言った。

「こいつ、兄ちゃんを殴りよったな。」

「えらいこっちゃ。暴行を加えよった。攻撃的で、反社会的ってやつちゃ。」

「て事は、こいつをいてももうても正当防衛やな。」

アレンは二人を見据え、落ち着いた口調で返した。

「カードゲームが好きだったな？」

3人は、デッキを一斉に構えた。

そしてベントラ。ダニーがアレンに殴りかかる。前回の様にあらおうとしたが、どうやらこちらの攻撃パターンはある程度読まれている。前に比べると、その実力は拮抗しているように見えた。

「さあ、授業の始まりや！」

「兄ちゃん、先行くで！」

アレンは狭い路地に二人を誘いだした。ここなら、数が多い敵は戦いづらいはずだとおもったからだ。が、とんだ誤算だった。どうやらチヨウ兄弟はこういう場所での戦いに慣れているらしい。追いつめられるのはアレンの方だった。

「どうしたあ？」

「俺らをベントするんやなかったか？」

「ウイングナイトとストライクがおらなあかんのか？」

「さあ…どうだろうな！」

アレンがカードを抜いたのを見て、ダニーとアルバートもカードを抜き、そして3人はそれぞれの召喚機にカードを挿入した。

『SWORD VENT』

『STRIKE VENT』

『SPIN VENT』

3人の手にそれぞれの武器が飛び込む。そして、アレンは二人に斬りかかった。しかし、冷静さを失っては、ジンゴウムの如くふたりに戦うチヨウ兄弟に太刀打ちできるわけがなかった。二人の連携が取れているのに加え、おそらくアックスとスピアは組んで戦うことを前提に作られているのだろう、お互いに足りないところを補いながら、相手を追い詰め、逃げ場をなくし、そして次々に攻撃を叩きこむ。そして、デストクロウを手に飛び込んだダニーの一撃がアレンをまともにとらえ、彼は吹っ飛んで後ろの資材の山に叩きつけられた。

「けっ、ボーイスカウト小僧が！」

ダニーの言葉が合図になったように、アルバートが、レイヨウのカードを抜いた。

「俺ら兄弟をおちよくりよったからには…」

「止めえ！アカン。契約はおわつとらん。」

「…クソツタレえ！…まアいいわ、示しはつけたっちゅうこつちゃ。」

アルバートはその場を立ち去った。ダニーもアレンを一瞬だけ睨みつけ、去っていった。

「……待て……決着はまだだ……逃げるな……」

アレンは地面に這いつくばったまま拳を握りしめた。こんなんじや、ナギサの敵など討てない。

「クソ……！！」

大体同じころ、シズルは近くのオープンカフェでコーヒーをすすっていた。だが、味など分からなかった。

「……全部本当の事だったのか……エミリア、本当にごめん……」

その時、彼は近くに歩み寄って来る人間を見つけた。ルミアだった。

「あら、シズルじゃない。どうかしたの？」

シズルは咳払いし、平素の自分でいれるようにした。

「何でもないよ。何か用かい？」

「あら、エミリアから私の悪口聞いているみたいね。」

「そんな事はないさ、事実だけだ。」

すると、ルミアはシズルの席の向かいに腰を下ろし、少し身を乗り出して言った。

「エミリアは真実を知らないのよ。良い？怒らないで聞いて。エミ

リアの身の安全が心配なの。…誰に話したらいいかわからなくて。危険な男と付き合ってる、そうでしょう？」

「とたん、シズルは口を開いた。そして、自分が見た者の話をブチまけた。」

「そ、そうだよ！エミリアを突き離れたら、その後、僕の目の前でひとり、マシナリーみたいな姿に変わった！」

するとシズルは黙り込んだが、ルミアは落ち着かせるように話しかける。

「いいのよ、全部知ってるから。だからあなたに話しかけたの。エミリアには助けがいるわ。」

「君のかい？」

「貴方の、よ。危険な目に遭わせたくないでしょ？」

「もう遭ってるかもね。僕とした事が、彼女を一人で置いてきてしまったんだ。」

「心配無いわ。ところで、エミリアは何処まで知ってるの？」

「全部知ってるんじゃないのか？」

「細かい事は別よ。」

「だったら、君が聞けばどうだ？」

「エミリアは最近私を避けてるわ。でもあなたは、友達でしょ？そして、研究仲間でもある。」

「だからって、急に根掘り葉掘り聞き出したらかなり変だろう？」

ルミアはイスに身を預け、顔をしかめて行つた。しかし、悩ましげな言葉の割には、その声は想定範囲内と言った感じだった。

「確かにね…エミリア、日記は付けてる？」

「それだ！パソコンで。……ちょっと待て、エミリアのパソコンを盗めって！？」

「友達を守りたいでしょう？」

「僕は人の物は盗まない！まア…女の子は別だけど。」

「盗むなんてそんな馬鹿な。」

そう言うと、ルミアはナノトランサーから何かを取り出した。ど

うやらUSBメモリらしかった。

「これを挿すだけでいいの。」

シズルはそれを受けとり、じっと見つめた。

エミリアは、そんな話がかわされているとはつゆ知らず、自分の部屋から出てきた。

「エミリア、大丈夫か？」

「ええ……」

そこにいたユートの問いにそう答えた直後、アレンが入ってきた。疲れた顔で、肩を上下させる彼に、エミリアは思わず声をかけた。

「アレン！？どうしたの？」

「アックスとスパアさ。ベントしようとしたけど。」

「二人共か？ たった一人で？」

クノーが、驚いて問いかける。

「俺があいつらをベントしていれば……」

「今ベントしても、ナギサは戻ってこないわ！」

「俺のせいだから……償わないと……」

その時だった。部屋の電話が鳴り響いた。

「ハイ、ミユラーです。」

エミリアが電話に出た時だった。

「……クライス！？ 何の用なの！？」

アレンは驚きに一瞬固まっていたが、よくよく考えると、エミリアはクライスの正体を知らなかった頃、彼に電話番号もメールアドレスも教えている。エミリアは素早くスピーカーにした。

『ヤッホー。アレン君に、お父さんの居場所を教えてあげな。タルカスシティ東地区のローズデール工業団地だ。すぐに行かないとお父さんの身が危ないって言ってあげなよ。そこには僕がいるともね！ 良いかい？ ローズデール工業団地だよ！ それじゃあねーハハハハハ！』

「……行かなくちゃ。」

「待てアレン！ 僕も行く！ 一人じゃ危険だ！」

「あたしも行くわ！」

エミリアの言葉に、アレンは思わず止めようとした。相手はライダーだ。おそらく、3人の。

「ちょっと待て！ エミリアこそ危険だ！」

「お父さんをバイクで運ぶ気？」

「……分かった、行こう。」

「クノーさん、レンが来たら、行き先を教えといて！」

「あ、ああ！」

そして、アレンはエミリアを後ろに乗せてバイクで走りだし、ユートモナギサの物だったフロードーで後を追った。

「……気をつける……」



## 第25話 前線からの手紙（後書き）

### 次回予告

工場にとらわれたフランク。そこに現れたクライスはアレンに取引を申し出るがアレンはそれを拒否、ユートとエミリアにフランクを逃がすよう頼むと一人で戦い始める。そして、そこでアレンは迷いを振り切ってしまう。

そして、戦いが激化するグラールに、最強と言われた女戦士が舞い降りる…

次回 仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士 『兄弟の最後』

命をかけて、守りたいものがありますか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1608w/>

---

仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士

2011年12月1日17時45分発行